
第 13 回学生宗教意識調査報告

(2020 年度)

—改訂増補版—

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編

2022 年 3 月

もっと日本を。もっと世界へ。



第 13 回学生宗教意識調査報告

(2020 年度)

—改訂増補版—

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編

2022 年 3 月

はじめに

本報告は、2020年度に実施された第13回学生宗教意識調査について、分析を行った論考を中心に編まれたものである。2020年度に刊行した報告書に若干の訂正が生じたため、調査結果についてもあらためて再録した。

学生宗教意識調査は、國學院大學日本文化研究所（2007年から國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所）が、1995年から2015年まで12回にわたって「宗教と社会」学会の宗教意識調査プロジェクトと合同で行ってきたものである。積み重ねられた調査は、若者の宗教意識、宗教リテラシーの現状を知る大規模調査として、研究者に活用されてきたばかりでなく、一般紙誌でも広く紹介されてきた。

2015年の調査から5年経ち、学生のメディア利用を含めた情報環境も大きく変わり、天皇の御代替わり、平成から令和へという改元もあった。そこであらためて調査を行う必要があると考え、2020年度は下記のプロジェクトと合同で調査を行った。

【2020年学生宗教意識調査参加団体（研究プロジェクト）】

- 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
- 「宗教と社会」学会・宗教文化の授業研究プロジェクト
- 宗教文化教育推進センター
- 科研費「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」（基盤研究（B）研究代表・平藤喜久子）
- 科研費「高齢多死社会日本におけるウェルビーイングとウェルディングの臨床社会学的研究」（基盤研究（B）研究代表・櫻井義秀）

2020年は、新型コロナウイルスの拡大というこれまでにない状況に大学は大いに翻弄された。大学ではほぼ一年、慣れないオンライン授業に取り組むこととなった。そのため調査もはじめてオンラインで実施された。これまでの紙を配付しての調査、手作業での入力に比べれば、格段に集計はラクになったが、オンライン授業に組み入れるノウハウがまだなく、回答者数は過去の調査に比べて少なくなってしまった。しかし、調査数は減ったものの、結果には大いに注目されるべきところがあったと思われる。

そこで今回の調査では、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所客員研究員の丹羽宣子氏と同共同研究員の今井信治氏に詳細な分析を行っていただいた。両氏による分析は、宗教社会学の専門的知識を背景にした調査分析にとどまらず、現代宗教論になっている。広く読まれ、参照されたい。

ここに、調査・分析にご協力いただいた方々すべてと、とくに丹羽宣子、今井信治両氏に厚く御礼申し上げたい。

平藤喜久子

目次

はじめに

第 13 回学生宗教意識調査（2020 年）〔改訂版〕 1

今井信治・丹羽宣子「学生の宗教意識から浮かび上がるもの
—『第 13 回学生宗教意識調査』を題材に—」 35

今井信治「浮遊する宗教的関心と宗教的文化資本の継承
—実証研究に基づく理解を目指して—」 53

丹羽宣子「宗教教育とジェンダー —「隠れたカリキュラム」概念に着目して—」 81

2020 年度調査票 95

あとがき

第13回学生宗教意識調査

凡例

1. 調査結果の比率は、その設問の回答者数を基数として小数点以下第2位を四捨五入し、小数点第1位まで表示している（その際に、過去の調査とは異なり、欠損値を基数から除外している）。したがって合計が必ずしも100%にならない場合がある。また複数回答の場合、回答者数に対する割合を表示しているため、構成比の合計が100%を超える。
2. 宗教系の大学は〔宗教系〕、非宗教系の大学は〔非宗教系〕と表記する。なお、宗教系、非宗教系の別は、あとがきの一覧を参照のこと。
3. 15年、12年等とあるのは、2015年、2012年及びそれ以前に行われた調査の数値である。
4. 宗教別のうち「新宗教」に含める教団は、井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教教団・人物事典』（弘文堂、1996年）に記載された教団を基準とした。
5. グラフ中の選択肢表記は、語句を短縮・簡略化している場合がある。

〔I〕回答者の概要

1. 回答者

総回答者数 1,656名 有効回答 1,644名(99.3%)

2. 性別

男性 600(36.7%) 女性 1,017(62.2%) その他 18(1.1%)

3. 卒業した高校

公立	919(56.3%)	その他の宗教系	5(0.3%)
一般の私立	460(28.2%)	大検・高認	10(0.6%)
キリスト教系	98(6.0%)	国外	31(1.9%)
仏教系	95(5.8%)	その他	1(0.1%)
神道系	12(0.7%)		

4. 在学している学校の宗教系・非宗教系の別

宗教系 705(44.5%) 非宗教系 879(55.5%)

5. 学年

1年	705(43.4%)	大学院生	17(1.0%)
2年	439(27.0%)	その他	6(0.4%)
3年	302(18.6%)		
4年	155(9.5%)		

6. 生活形態

親と同居	1,166(71.5%)	その他	42(2.6%)
一人暮らし	379(23.3%)		
寮	43(2.6%)		

【Ⅱ】身の回りの宗教についての意識・関心

1. 宗教への関心

・質問「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」

	20年	15年	12年	10年
1. 現在、信仰をもっている	174(10.7)	(10.2)	(16.1)	(11.9)
2. 信仰はもっていないが、宗教に関心がある	845(51.9)	(35.5)	(37.7)	(38.2)
3. 信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない	406(24.9)	(32.8)	(26.7)	(30.9)
4. 信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない	158(9.7)	(20.1)	(18.3)	(17.9)
5. 回答なし	45(2.8)	(1.4)	(1.2)	(1.1)
空欄 (NA)	16			

*数字は実数、括弧内はパーセンテージを示す。

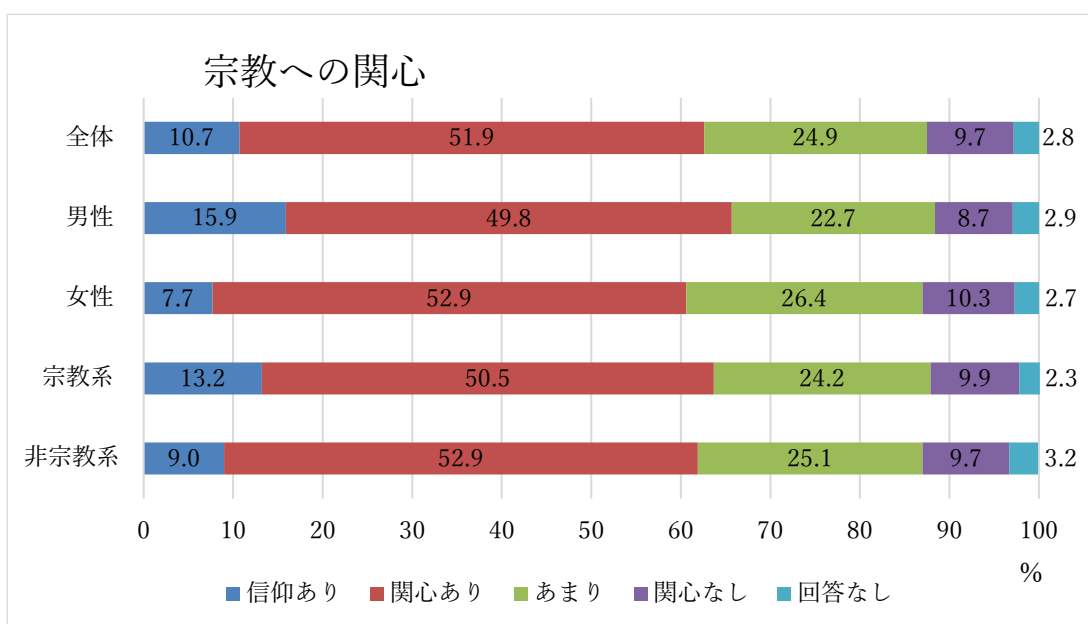
*上記「回答なし」は選択肢の一つ。空欄は欠損値として除外した（凡例参照）。

*「15年」「12年」「10年」は、凡例にあるように、それぞれ2015年、2012年、2010年の調査における比率の数値である。以下同様。数値は『第12回学生宗教意識調査報告書』を参照している。

・男女別、及び宗教系・非宗教系の別による比較

	男性	女性	宗教系	非宗教系	非宗教系15年	非宗教系12年	非宗教系10年
1.	95** (15.9)	78** (7.7)	92 (13.2)	79 (9.0)	(7.7)	(8.0)	(7.5)
2.	297 (49.8)	534(52.9)	353(50.5)	463(52.9)	(38.1)	(50.1)	(46.4)
3.	135 (22.7)	267(26.4)	169(24.2)	220(25.1)	(32.0)	(26.1)	(29.5)
4.	52 (8.7)	104(10.3)	69 (9.9)	85 (9.7)	(20.8)	(15.1)	(15.7)
5.	17* (2.9)	27* (2.7)	16 (2.3)	28 (3.2)	(1.3)	(0.8)	(0.9)

* $p < .05$ 、** $p < .01$ 。以降の表においても左記p値の表記を用いる。以下同様。



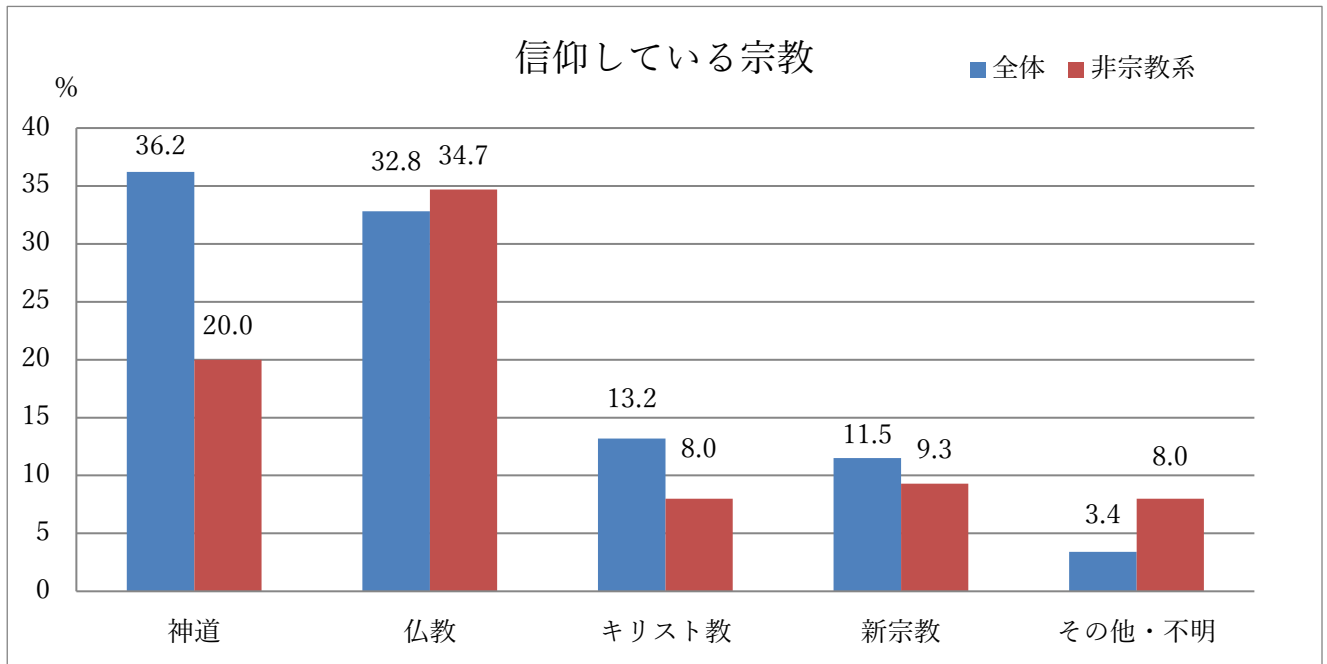
男女別の「現在、信仰をもっている」において1%水準で有意差があり、男性の方が自覚的な信仰を有している傾向がみられた。また、大学別では有意差が認められなかった ($p = .097$)。

2. 信仰している宗教（複数回答）

⇒「現在、信仰をもっている」と回答した人（174名）が対象

	全体	非宗教系	非宗教系15年	非宗教系12年	非宗教系10年
1. 神道	63(36.2)	15**(20.0)	(11.6)	(14.0)	(9.4)
2. 仏教	57(32.8)	26(34.7)	(45.5)	(37.5)	(47.1)
3. キリスト教	23(13.2)	6**(8.0)	(18.5)	(20.6)	(21.0)
4. 新宗教	20(11.5)	7(9.3)	(13.7)	(18.4)	(16.7)
5. その他・不明	6(3.4)	6*(8.0)	(3.9)	(5.1)	(2.2)

*無回答の数値は省略した。

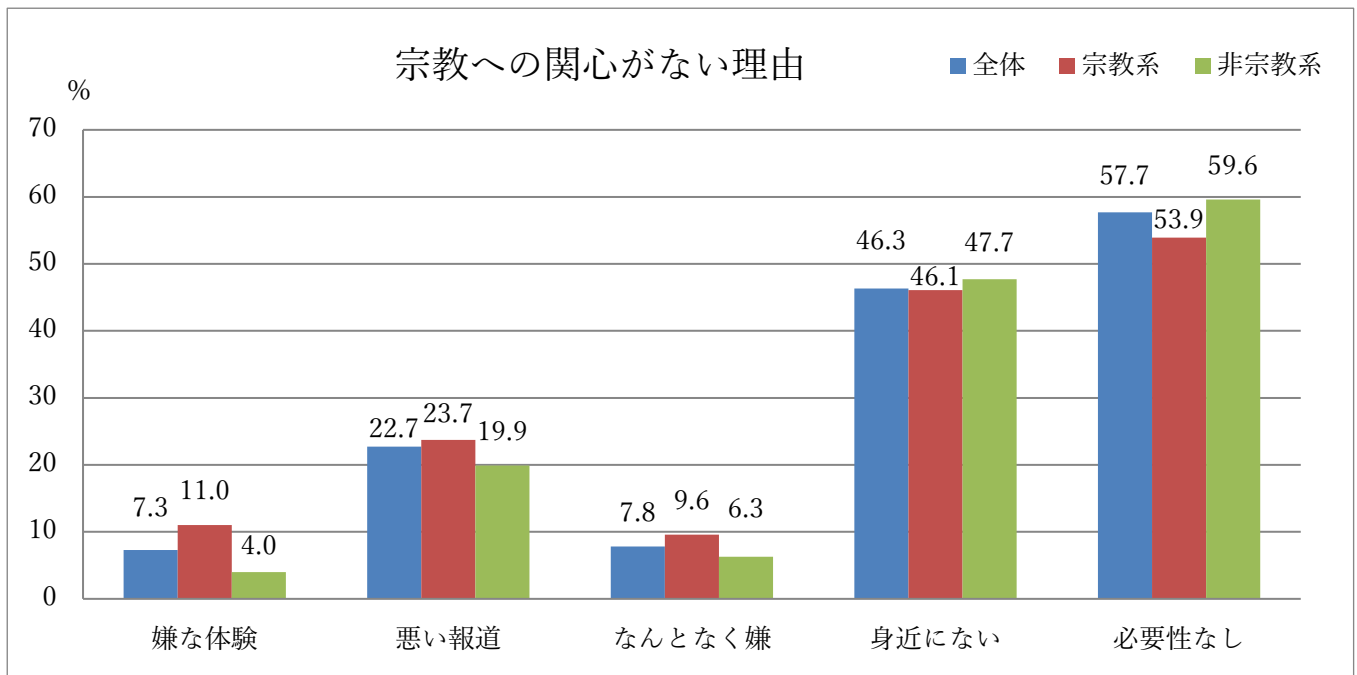


「神道」と「その他・不明」と回答した学生は非宗教系大学に通っており、キリスト教と回答した学生は宗教系大学に通っている傾向が認められた（「その他・不明」については期待度数が5を下回るために χ^2 乗検定をすべきではないが、他の項目と合わせるために検定を行っている）。

3. 宗教への関心がない理由（複数回答）

⇒信仰をもっておらず、宗教にもあまり／まったく関心がないと回答した人（564名）が対象

	全体	宗教系	非宗教系
1. 宗教に関する嫌な体験があるから	40(7.3)	25**(11.0)	12**(4.0)
2. 宗教に関する悪い報道やニュースを見たから	125(22.7)	54(23.7)	60(19.9)
3. なんとなく嫌いだから	43(7.8)	22(9.6)	19(6.3)
4. 身近に接したことがないから	255(46.3)	105(46.1)	144(47.7)
5. 宗教の必要性を感じていないから	318(57.7)	123(53.9)	180(59.6)
空欄 (NA)	13		



「信仰をもっておらず、宗教にもあまり／まったく関心がない」と回答した人のうち、「宗教に関する嫌な体験があるから」と答えた学生に1%水準で有意差があり、宗教系大学に通う学生が多い傾向がみられた。

4.家の宗教（複数回答）

		15年		15年
神道	196(17.2)	(4.8)	新宗教	70(6.1) (3.6)
仏教	733(64.4)	(35.4)	その他・不明	56(4.9) (2.5)
キリスト教	53(4.7)	(2.1)		
空欄 (NA)	505			

5.父の宗教（複数回答）

		15年	12年
あり	157(9.6)	(8.3)	(13.1)
なし	1,321(81.0)	(89.8)	(84.9)
回答なし	152(9.3)	(1.9)	(2.0)
空欄 (NA)	14		

(内訳)		15年	12年
神道	33(21.6)	(18.0)	(14.9)
仏教	69(45.1)	(43.6)	(34.8)
キリスト教	19(12.4)	(12.5)	(9.9)

		15年	12年
新宗教	27(17.6)	(24.0)	(36.1)
その他・不明	5(3.3)	(2.5)	(3.2)
空欄 (NA)	4		

6.母の宗教（複数回答）

		15年	12年
あり	182(11.2)	(10.1)	(15.7)
なし	1,330(81.6)	(86.0)	(81.2)
回答なし	118(7.2)	(3.8)	(3.1)
空欄 (NA)	14		

(内訳)		15年	12年
神道	28(16.6)	(13.2)	(11.2)
仏教	57(33.7)	(37.6)	(30.8)
キリスト教	31(18.3)	(20.2)	(16.5)

		15年	12年
新宗教	53(31.4)	(27.4)	(35.8)
その他・不明	6(3.6)	(1.5)	(3.4)
空欄 (NA)	13		

7. 宗教的習俗への関わり

① 初詣

「あなたの家族は今年の初詣はどうしましたか。」

		15年	12年	10年
1. 家族で行った	819(50.2)	(46.7)	(39.0)	(41.0)
2. 家族とは別に自分だけで行った	230(14.1)	(14.7)	(13.0)	(11.8)
3. 行った家族もいるが自分は行かなかった	179(11.0)	(15.2)	(15.0)	(15.5)
4. 家族の誰も行かなかった	311(19.0)	(21.3)	(26.3)	(23.4)
5. その他	94(5.8)	(1.9)	(6.3)	(7.8)
空欄 (NA)	11	(0.3)	(0.4)	(0.4)

* 上記、選択肢2について、過去調査での選択肢は「自分だけで行った」。

② 墓参り

「あなたの家族は去年のお盆の墓参りはどうしましたか。」

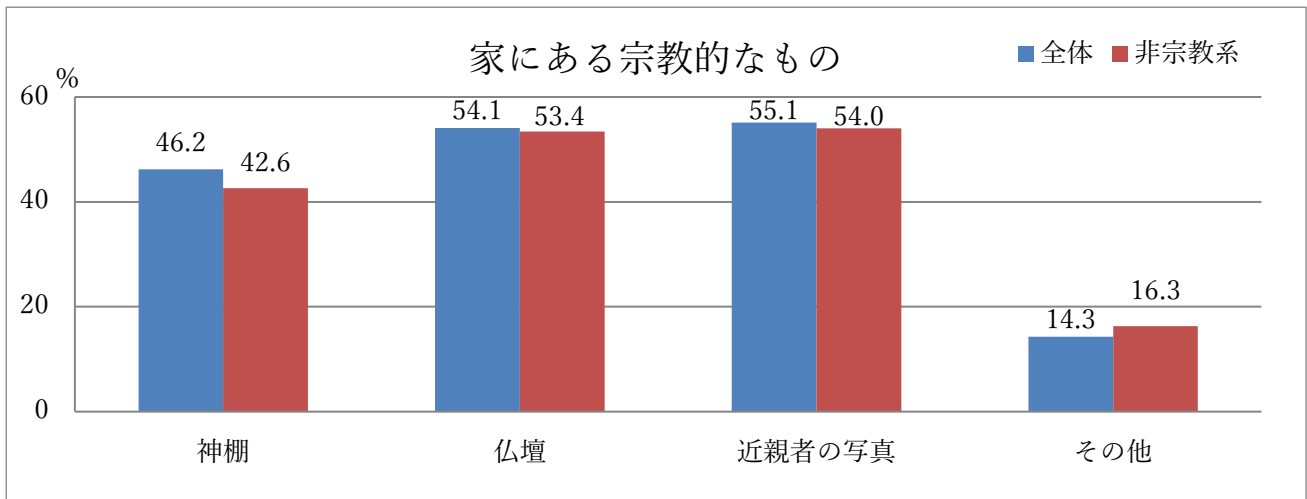
		15年	12年	10年
1. 家族で行った	866(53.1)	(55.4)	(53.0)	(53.2)
2. 家族とは別に自分だけで行った	27(1.7)	(1.0)	(0.9)	(0.8)
3. 行った家族もいるが自分は行かなかった	362(22.2)	(25.1)	(25.5)	(26.7)
4. 家族の誰も行かなかった	316(19.4)	(16.9)	(17.4)	(16.0)
5. その他	60(3.7)	(1.3)	(2.9)	(3.1)
空欄 (NA)	13	(0.4)	(0.3)	(0.3)

* 上記、選択肢2について、過去調査での選択肢は「自分だけで行った」。

③家にある宗教的なもの（複数回答）

「次のうち、あなたの家（一人暮らしの場合などは実家）にあるものすべてを選んで下さい。」

	全体	非宗教系	全体 15年	全体 12年	全体 10年
1.神棚	484(46.2)	235**(42.6)	(32.3)	(30.2)	(33.8)
2.仏壇	566(54.1)	295(53.4)	(41.7)	(48.3)	(44.2)
3.亡くなった近親者の写真	577(55.1)	298**(54.0)	(32.5)	(33.5)	(34.5)
4.その他宗教的なもの	150(14.3)	90(16.3)	(3.6)	(5.1)	(4.6)
空欄 (NA)	597				



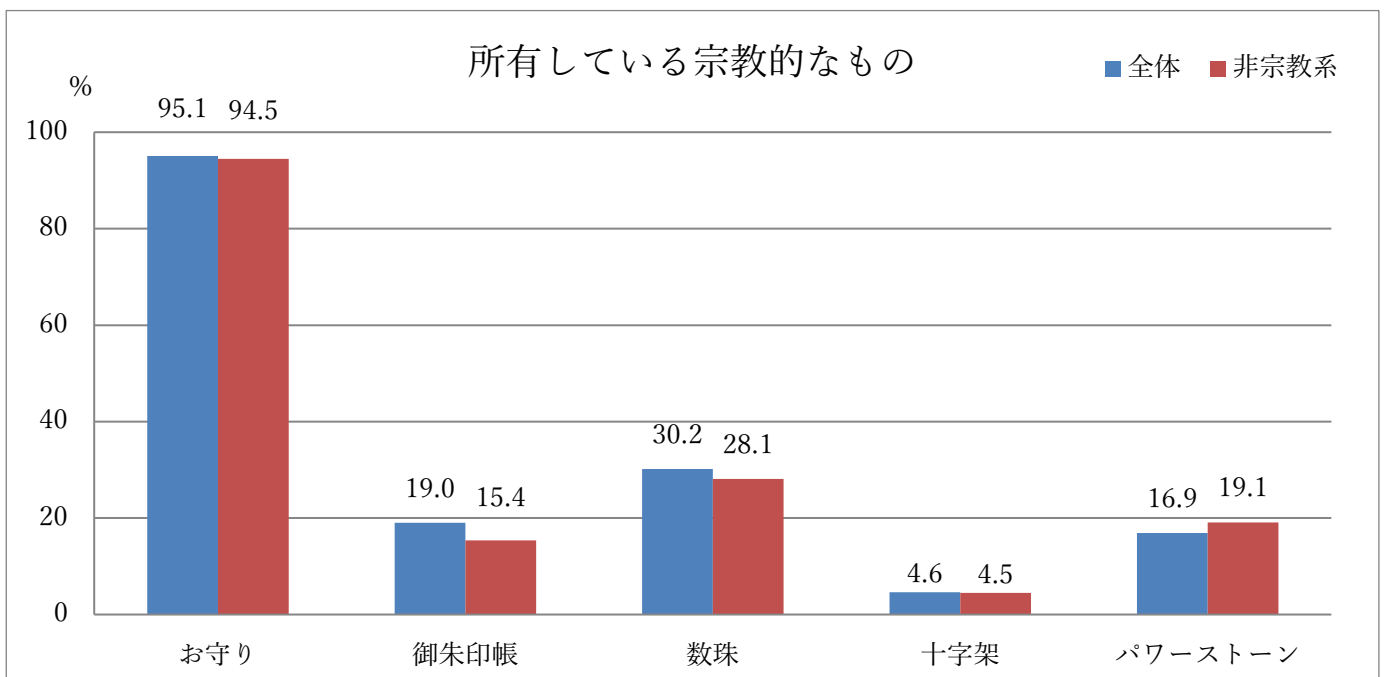
「神棚」「その他宗教的なもの」に相関があり、ともに1%水準で宗教系大学が多い。

④所有している宗教的なもの（複数回答）

「次のうち、あなた個人で持っているものすべてを選んで下さい。」

	全体	非宗教系
1.お守り	1,341(95.1)	707(94.5)
2.御朱印帳	268(19.0)	115**(15.4)
3.数珠	426(30.2)	210*(28.1)
4.十字架	65(4.6)	34(4.5)
5.パワーストーン	238(16.9)	143*(19.1)
空欄 (NA)	234	

*上記は新規調査項目。



宗教系／非宗教系の別による有意差が御朱印帳・数珠・パワーストーンに認められ、御朱印帳で1%水準、数珠とパワーストーンでは5%水準で宗教系が多い傾向がみられた。お守り・十字架には有意差が認められなかった。

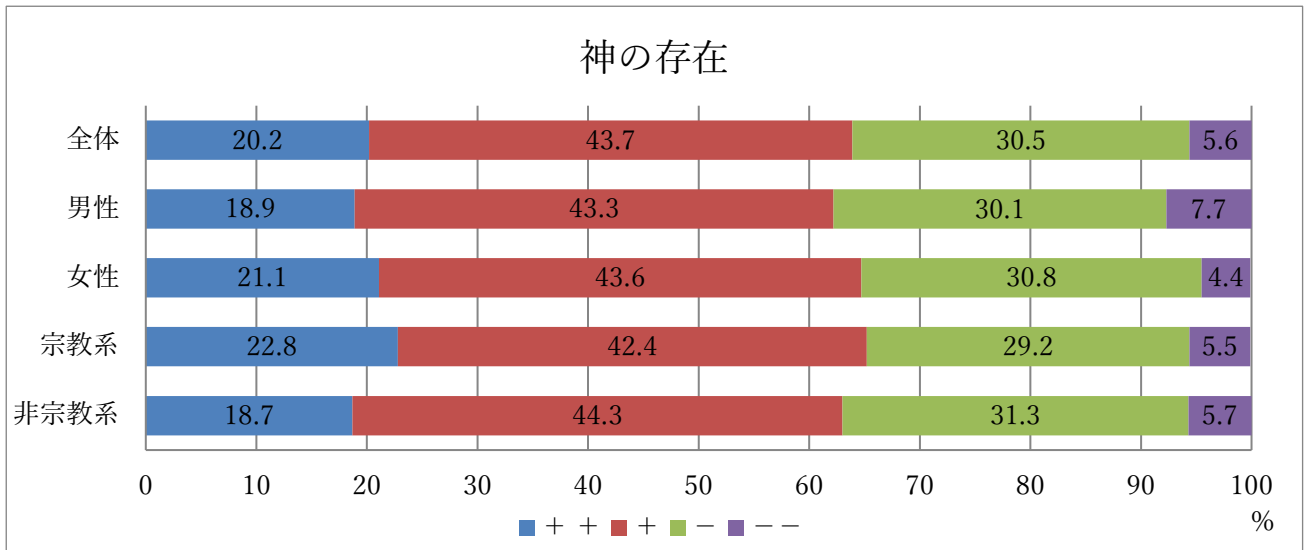
〔Ⅲ〕 宗教や宗教家に関する考え

*回答の選択肢と図表で用いる記号

1.信じる（++） 2.ありうると思う（+） 3.あまり信じない（-） 4.否定する（--）

1.「神の存在」を信じるか

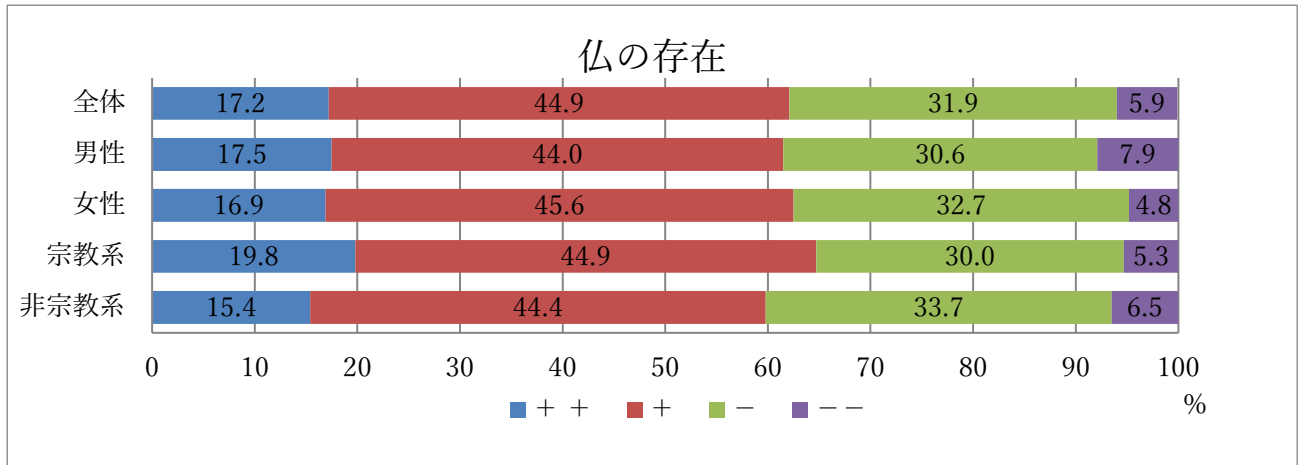
	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系	非宗教系 15年
1.++	331(20.2)	113(18.9)	214(21.1)	161(22.8)	164(18.7)	(20.0)
2.+	714(43.7)	259(43.3)	443(43.6)	299(42.4)	388(44.3)	(37.3)
3.-	498(30.5)	180(30.1)	313(30.8)	206(29.2)	274(31.3)	(31.3)
4.--	92(5.6)	46**(7.7)	45**(4.4)	39(5.5)	50(5.7)	(10.9)
空欄 (NA)	9	2	2	0	3	(0.6)



男女別の「否定する」において1%水準で有意差があり、男性の方が積極的に否定する傾向がみられた。宗教系/非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .251$)。

2. 「仏の存在」を信じるか

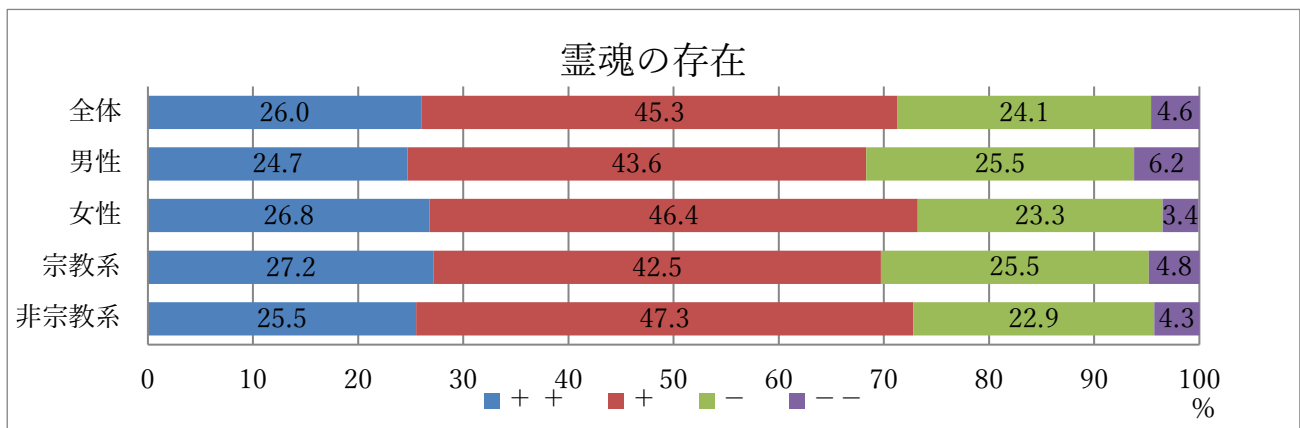
	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系	非宗教系 15年
1.++	280(17.2)	104(17.5)	171(16.9)	139(19.8)	135(15.4)	(14.4)
2.+	733(44.9)	262(44.0)	462(45.6)	315(44.9)	389(44.4)	(38.9)
3.-	521(31.9)	182(30.6)	332(32.7)	210(30.0)	295(33.7)	(35.3)
4.--	97(5.9)	47(7.9)	49(4.8)	37(5.3)	57(6.5)	(10.8)
空欄 (NA)	13	5	3	4	3	(0.5)



男女 ($p = .081$)、宗教系/非宗教系 ($p = .070$)、それぞれに有意差は確認できなかった。

3. 「靈魂の存在」を信じるか

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系	非宗教系 15年
1.++	425(26.0)	147(24.7)	272(26.8)	191(27.2)	223(25.5)	(19.2)
2.+	739(45.3)	260(43.6)	471(46.4)	299(42.5)	414(47.3)	(42.9)
3.-	394(24.1)	152(25.5)	237(23.3)	179(25.5)	201(22.9)	(25.6)
4.--	75(4.6)	37**(6.2)	35**(3.4)	34(4.8)	38(4.3)	(11.8)
空欄 (NA)	11	4	2	2	3	(0.5)

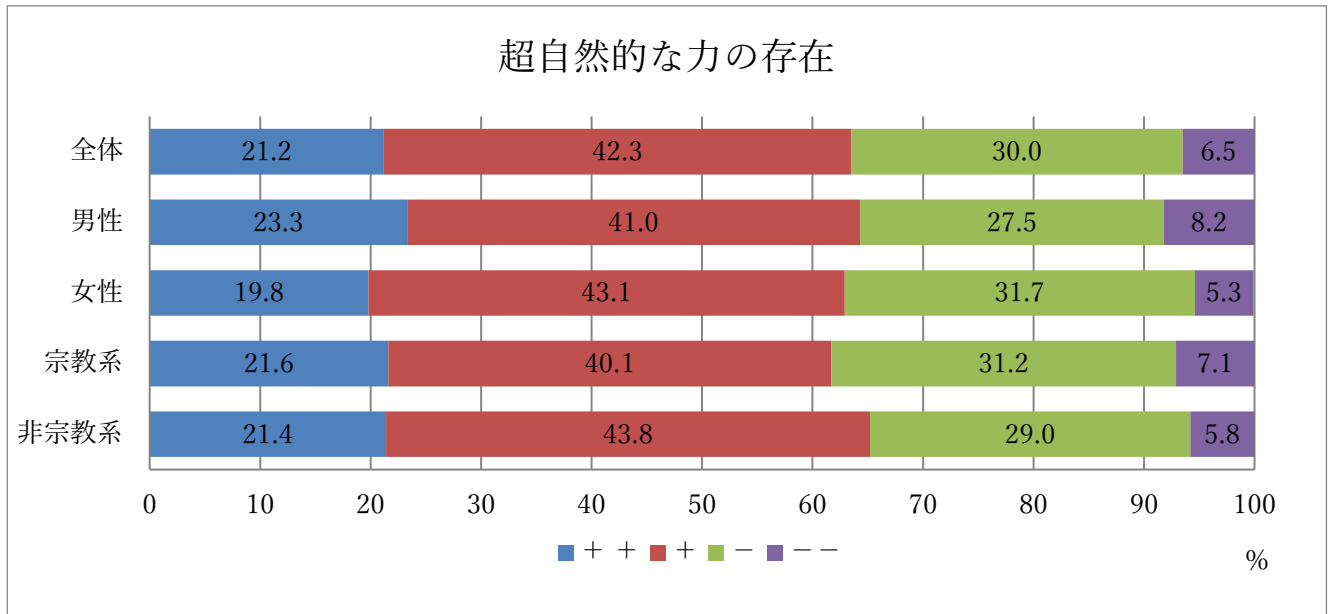


男女別の「否定する」において1%水準で有意差があり、男性の方が積極的に否定する傾向がみられた。

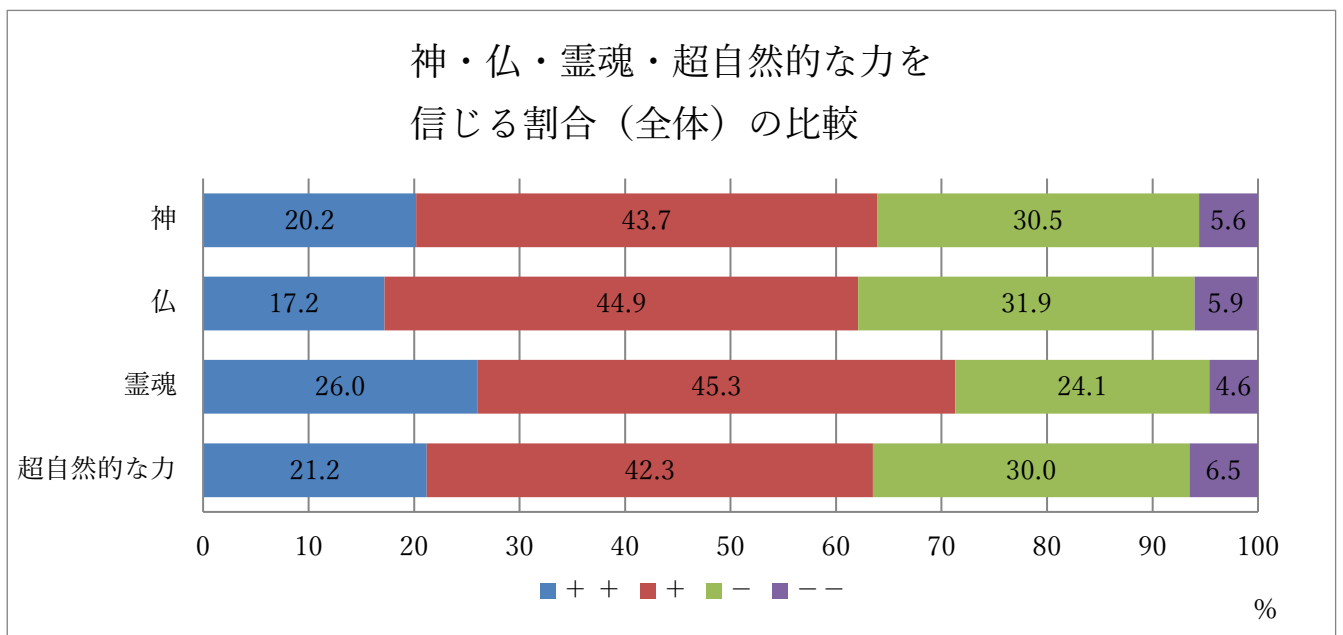
宗教系/非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .307$)。

4. 「超自然的な力の存在」を信じるか

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.++	346(21.2)	139(23.3)	201(19.8)	152(21.6)	187(21.4)
2.+	691(42.3)	245(41.0)	437(43.1)	283(40.1)	382(43.8)
3.-	489(30.0)	164(27.5)	321(31.7)	220(31.2)	253(29.0)
4.--	106(6.5)	49*(8.2)	54*(5.3)	50(7.1)	51(5.8)
空欄 (NA)	12	3	4	0	6



男女別の「否定する」において5%水準で有意差があり、男性の方が積極的に否定する傾向がみられた。宗教系/非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .422$)。



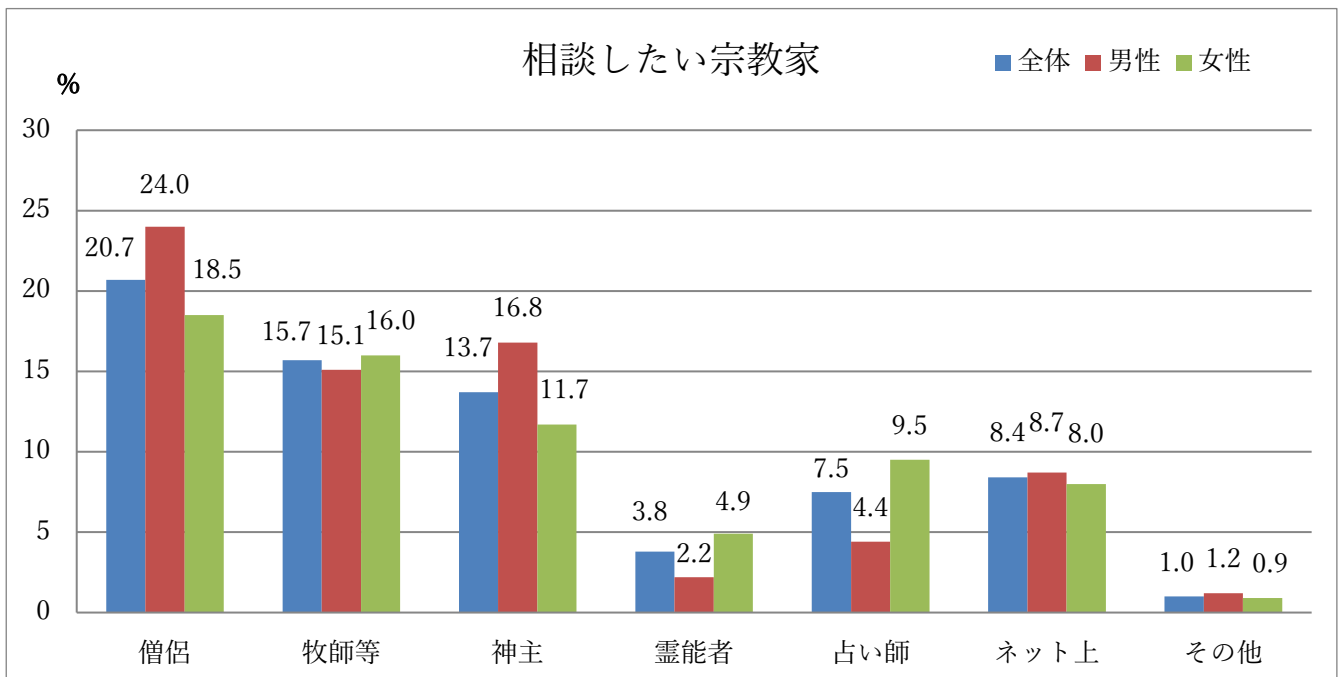
* 上図は本節の表1~4から作成。

5.人生に悩んだとき相談したい宗教家（複数回答）

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.仏教の僧侶	337(20.7)	143**(24.0)	187**(18.5)	155(22.1)	174(19.9)
2.キリスト教の牧師・神父・シスター	256(15.7)	90(15.1)	162(16.0)	107(15.2)	144(16.5)
3.神社の神主	223(13.7)	100**(16.8)	118**(11.7)	108(15.4)	108(12.4)
4.メディアに登場するような霊能者	62(3.8)	13**(2.2)	49**(4.9)	24(3.4)	37(4.2)
5.街の占い師	122(7.5)	26**(4.4)	96**(9.5)	53(7.5)	67(7.7)
6.ネット上で相談に回答してくれる人	136(8.4)	52(8.7)	81(8.0)	59(8.4)	75(8.6)
7.その他の宗教家(新宗教の教師など)	16(1.0)	7(1.2)	9(0.9)	2*(0.3)	13*(1.5)
8.この中に相談したい人はいない	1,015(62.3)	368(61.7)	635(62.9)	441(62.8)	533(61.1)
空欄 (NA)	16				

*選択肢4は過去調査では「テレビに登場するような霊能者」

*選択肢7は過去調査では「その他の宗教家【具体的に： 　】」



*「この中に相談したい人はいない」以外の回答で作成したグラフ。

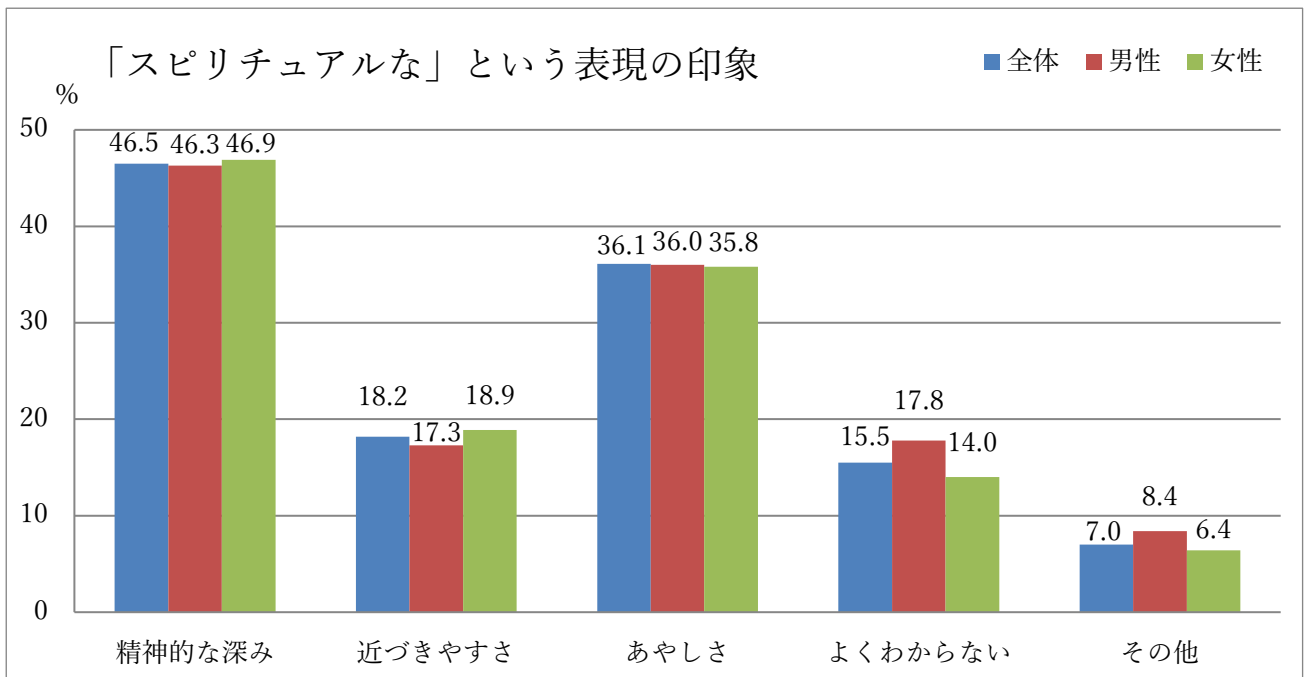
1%有意水準で僧侶・神主に相談する男性が多い傾向があり、同じく1%有意水準でメディア霊能者・街の占い師に相談する女性が多い傾向があった。

宗教系/非宗教系では、唯一「その他の宗教家」が5%水準で有意差が認められた。集計対象のサンプルサイズが15のためフィッシャーの正確確率検定を行ったところ、問題はなかった。なお今回は、以前調査校となったことのある創価大学・天理大学といった新宗教立の大学が調査校に含まれていない。

6. 「スピリチュアルな」という表現の印象（複数回答）

質問「「スピリチュアルな」という表現であなたが感じるのは次のどれですか。」（複数回答）

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.精神的に深みのあると感じる	753(46.5)	275(46.3)	470(46.9)	335(48.1)	394(45.3)
2.近づきやすく感じる	294(18.2)	103(17.3)	189(18.9)	131(18.8)	155(17.8)
3.あやしさを感じる	584(36.1)	214(36.0)	359(35.8)	242(34.7)	323(37.2)
4.なんのことだか、よくわからない	251(15.5)	106*(17.8)	140*(14.0)	106(15.2)	135(15.5)
5.その他	114(7.0)	50(8.4)	64(6.4)	51(7.3)	59(6.8)
空欄 (NA)	26				



男女差では、「よく分からない」のみ5%水準で男性が多かった。

宗教系／非宗教系の別では有意差が認められなかった ($p = .692$)。

〔IV〕 宗教に関わる事柄への意見

1. 宗教に関する意見

次の意見に対して、それぞれどう思うか。

* 実際の設問は「次のような意見について、あなたの考えに近いものを選んで下さい」。

* 以下の回答の選択肢と図表で用いる記号

1. と思う（++）	2. どちらかといえば思う（+）
3. どちらかといえば思わない（-）	4. 思わない（--）

① 「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要なだ。」

	全体	宗教系	非宗教系	15年
1. ++	521(31.9)	218(31.0)	292(33.3)	(17.2)
2. +	740(45.3)	326(46.3)	391(44.6)	(37.2)
3. -	246(15.0)	92(13.1)	143(16.3)	(27.5)
4. --	128(7.8)	68**(9.7)	50**(5.7)	(17.4)
空欄 (NA)	9	1	3	(0.7)

1%水準で宗教系大学が「思わない」を支持する傾向がみられた。

② 「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある。」

	全体	宗教系	非宗教系	15年
1. ++	198(12.1)	87(12.4)	104(11.9)	(17.8)
2. +	701(42.9)	311(44.3)	363(41.4)	(43.8)
3. -	522(31.9)	212(30.2)	296(33.8)	(25.7)
4. --	213(13.0)	92(13.1)	114(13.0)	(12.0)
空欄 (NA)	10	3	2	(0.7)

宗教系と非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .494$)。

③ 「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ。」

	全体	宗教系	非宗教系	15年
1. ++	970(59.5)	436(61.9)	505(57.9)	(50.9)
2. +	542(33.2)	215(30.5)	309(35.4)	(35.2)
3. -	81(5.0)	38(5.4)	40(4.6)	(9.2)
4. --	38(2.3)	15(2.1)	18(2.1)	(4.0)
空欄 (NA)	13	1	7	(0.7)

宗教系と非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .223$)。

④「特定の宗教集団が特定の政党を支持するのはよくない。」

	全体	宗教系	非宗教系	15年
1.++	794(48.9)	351(50.1)	417(47.9)	(47.9)
2.+	512(31.5)	213(30.4)	278(32.0)	(29.9)
3.-	232(14.3)	98(14.0)	129(14.8)	(14.8)
4.--	87(5.4)	39(5.6)	46(5.3)	(6.6)
空欄 (NA)	19	4	9	(0.8)

宗教系と非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .821$)。

⑤「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ。」

	全体	宗教系	非宗教系	15年
1.++	336(20.7)	175** (25.0)	147** (16.9)	(29.1)
2.+	665(40.9)	284(40.6)	363(41.6)	(40.3)
3.-	486(29.9)	181** (25.9)	288** (33.0)	(22.6)
4.--	139(8.5)	60(8.6)	74(8.5)	(7.2)
空欄 (NA)	18	5	7	(0.8)

1%有意水準で、宗教系大学が「そう思う」、非宗教系大学が「どちらかと言えばそう思わない」傾向がみられた。

⑥「宗教を信じると、心のよりどころができる。」

	全体	宗教系	非宗教系	15年
1.++	474(29.2)	191(27.2)	272(31.2)	(16.5)
2.+	757(46.6)	332(47.3)	401(46.0)	(38.5)
3.-	259(15.9)	109(15.5)	141(16.2)	(27.4)
4.--	136(8.4)	70*(10.0)	57*(6.5)	(16.9)
空欄 (NA)	18	3	8	(0.8)

5%有意水準で、宗教系大学が「そう思わない」傾向がみられた。

⑦「災害が起こった際に宗教は人々を支えることができる。」

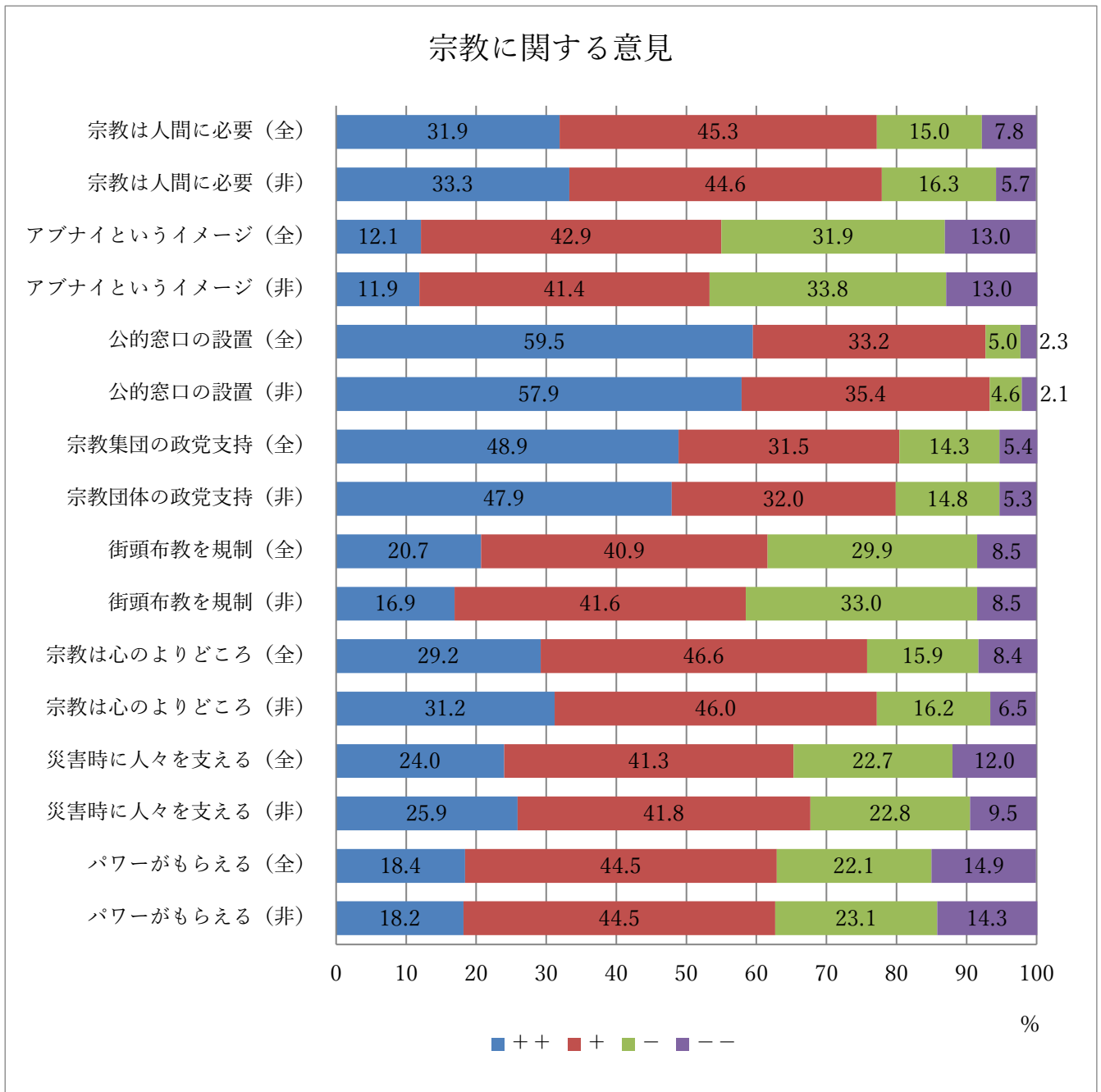
	全体	宗教系	非宗教系
1.++	390(24.0)	158(22.5)	226(25.9)
2.+	672(41.3)	289(41.2)	365(41.8)
3.-	369(22.7)	155(22.1)	199(22.8)
4.--	196(12.0)	100** (14.2)	83** (9.5)
空欄 (NA)	17	3	6

1%有意水準で、宗教系大学が「そう思わない」傾向がみられた。

⑧「パワースポットを訪れると、パワーをもらうことができる。」

	全体	宗教系	非宗教系
1.++	300(18.4)	134(19.1)	159(18.2)
2.+	725(44.5)	314(44.8)	389(44.5)
3.-	360(22.1)	142(20.3)	202(23.1)
4.--	243(14.9)	111(15.8)	125(14.3)
空欄 (NA)	16	4	4

宗教系と非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .523$)。



2. 宗教と教育に関する考え

次の意見に対して、それぞれどう思うか。

* 実際の設定は「宗教と教育に関する意見について、あなたの考えに近いものを選んで下さい。」

* 以下の回答の選択肢と図表で用いる記号

1. と思う（++）	2. どちらかといえばと思う（+）
3. どちらかといえばそう思わない（-）	4. そう思わない（--）

① 「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい。」

	全体	宗教系	非宗教系
1. ++	961(58.8)	397(56.4)	535(61.0)
2. +	514(31.4)	237(33.7)	260(29.6)
3. -	126(7.7)	54(7.7)	66(7.5)
4. --	34(2.1)	16(2.3)	16(1.8)
空欄 (NA)	9	1	2

宗教系と非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .282$)。

② 「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」

	全体	宗教系	非宗教系
1. ++	193(11.9)	105** (15.0)	84** (9.7)
2. +	454(28.0)	197(28.1)	240(27.6)
3. -	623(38.4)	257(36.7)	347(39.9)
4. --	353(21.7)	141(20.1)	199(22.9)
空欄 (NA)	21	5	9

1%有意水準で、宗教系大学が「そう思う」傾向がみられた。

③ 「道徳の授業をもっと充実させた方がいい。」

	全体	宗教系	非宗教系
1. ++	495(30.4)	239(34.1)	249(28.6)
2. +	581(35.7)	235(33.5)	321(36.8)
3. -	367(22.6)	152(21.7)	200(22.9)
4. --	183(11.3)	75(10.7)	102(11.7)
空欄 (NA)	18	4	7

宗教系と非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .130$)。

④ 「いのちの大切さを教える授業を充実させた方がいい。」

	全体	宗教系	非宗教系
1.++	855(52.5)	387(55.1)	446(51.0)
2.+	559(34.3)	222(31.6)	311(35.6)
3.-	148(9.1)	65(9.3)	80(9.2)
4.--	68(4.2)	28(4.0)	37(4.2)
空欄 (NA)	14	3	5

宗教系と非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .376$)。

⑤ 「神社や寺院など、日本の伝統的宗教施設を見学する機会を設けた方がいい。」

	全体	宗教系	非宗教系
1.++	552(33.9)	257(36.7)	283(32.4)
2.+	674(41.4)	275(39.2)	376(43.1)
3.-	301(18.5)	129(18.4)	160(18.3)
4.--	101(6.2)	40(5.7)	54(6.2)
空欄 (NA)	16	4	6

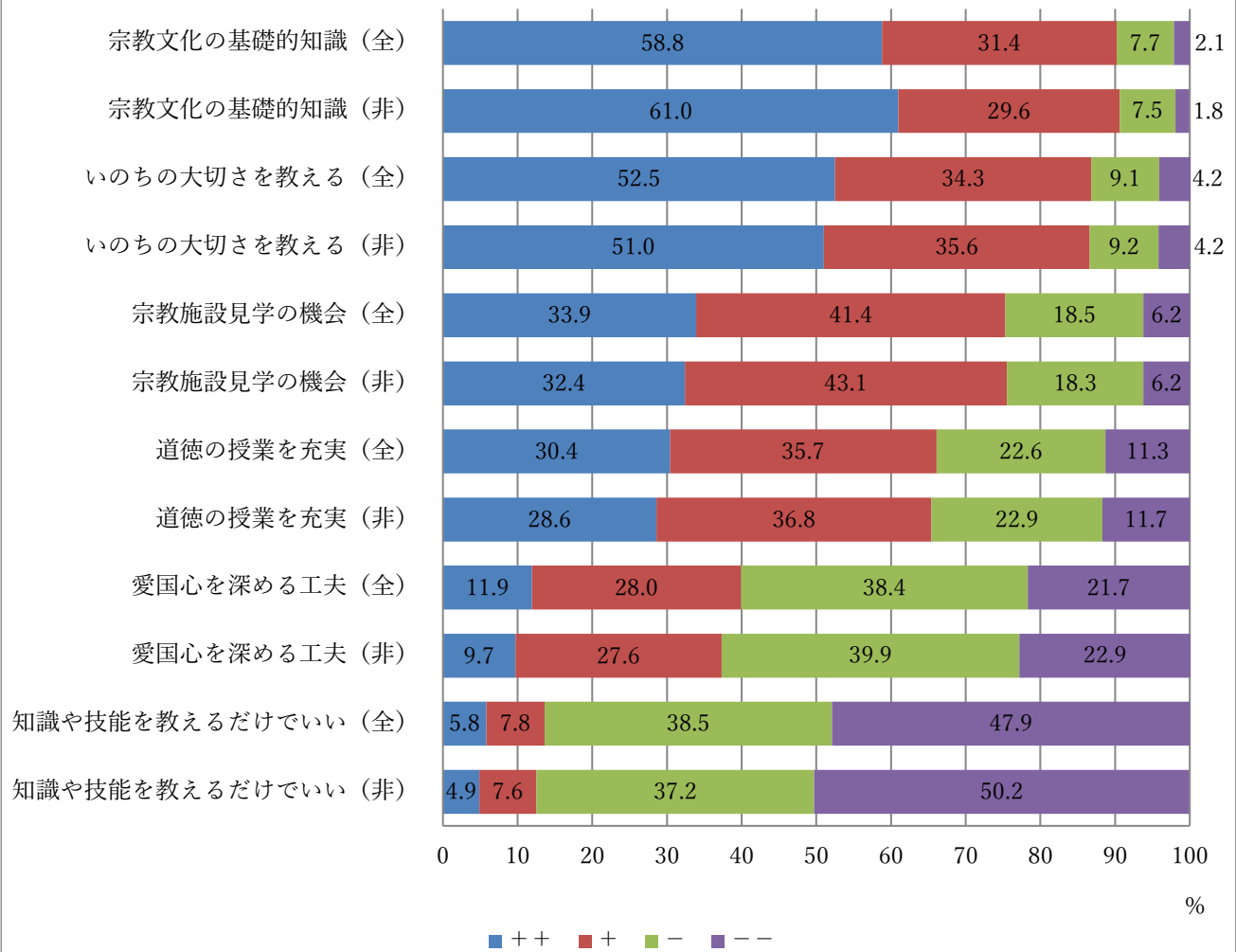
宗教系と非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .311$)。

⑥ 「学校では受験や就職に必要な知識や技能を教えるだけでいい。」

	全体	宗教系	非宗教系
1.++	94(5.8)	49(7.0)	43(4.9)
2.+	128(7.8)	56(8.0)	67(7.6)
3.-	628(38.5)	281(40.0)	326(37.2)
4.--	783(47.9)	317(45.1)	440(50.2)
空欄 (NA)	11	2	3

宗教系と非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .121$)。

宗教と教育に関する考え



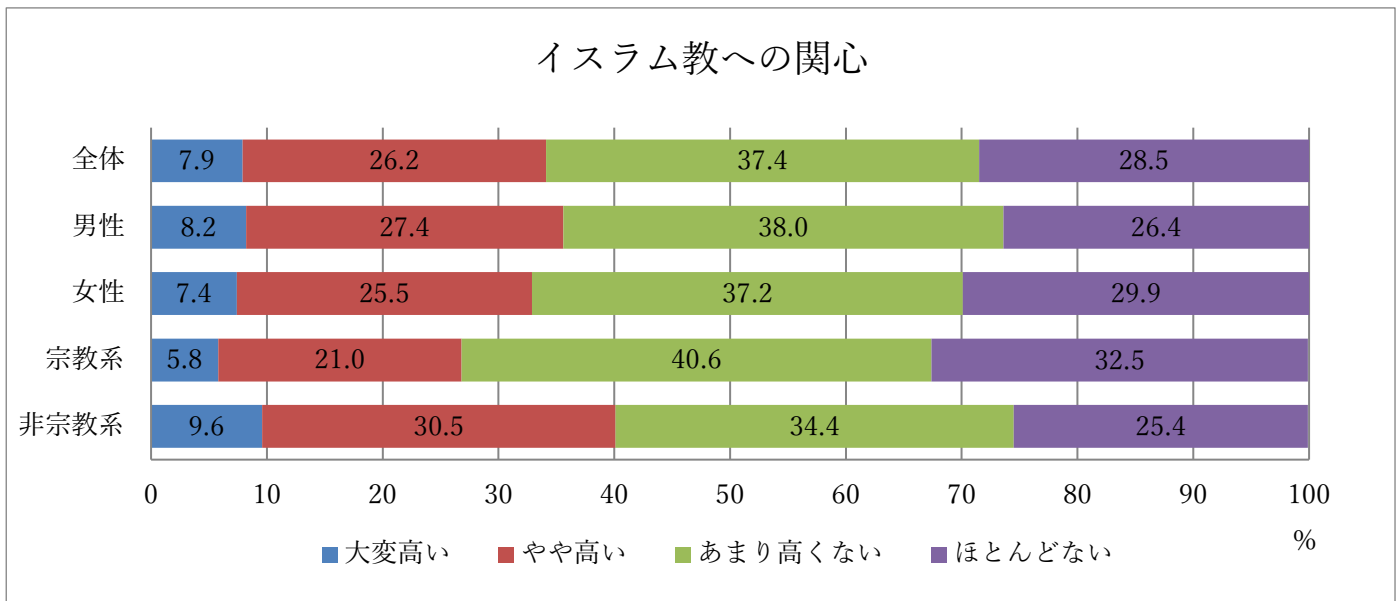
*質問の順番に並べると見にくくなるので、「そう思う/どちらかといえばそう思う」という回答が多い順に並び替えた。

3.イスラム教への関心

イスラム教に関する次の質問に答えて下さい。

質問「最近のあなたのイスラム教への関心は次のうちどれですか。」

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.大変高い	129(7.9)	49(8.2)	75(7.4)	41**(5.8)	84**(9.6)
2.やや高い	428(26.2)	164(27.4)	259(25.5)	148**(21.0)	267**(30.5)
3.あまり高くない	611(37.4)	227(38.0)	377(37.2)	286*(40.6)	301*(34.4)
4.ほとんどない	465(28.5)	158(26.4)	303(29.9)	229**(32.5)	222**(25.4)
空欄 (NA)	11				



総じて宗教系大学の方がイスラム教への関心が低い傾向がみられた。

男女に有意差は確認できなかった ($p = .486$)。

質問「あなたのイスラム教徒（ムスリム）との関わりで、次のうちあてはまるものがあたら選んでください。」（複数回答）

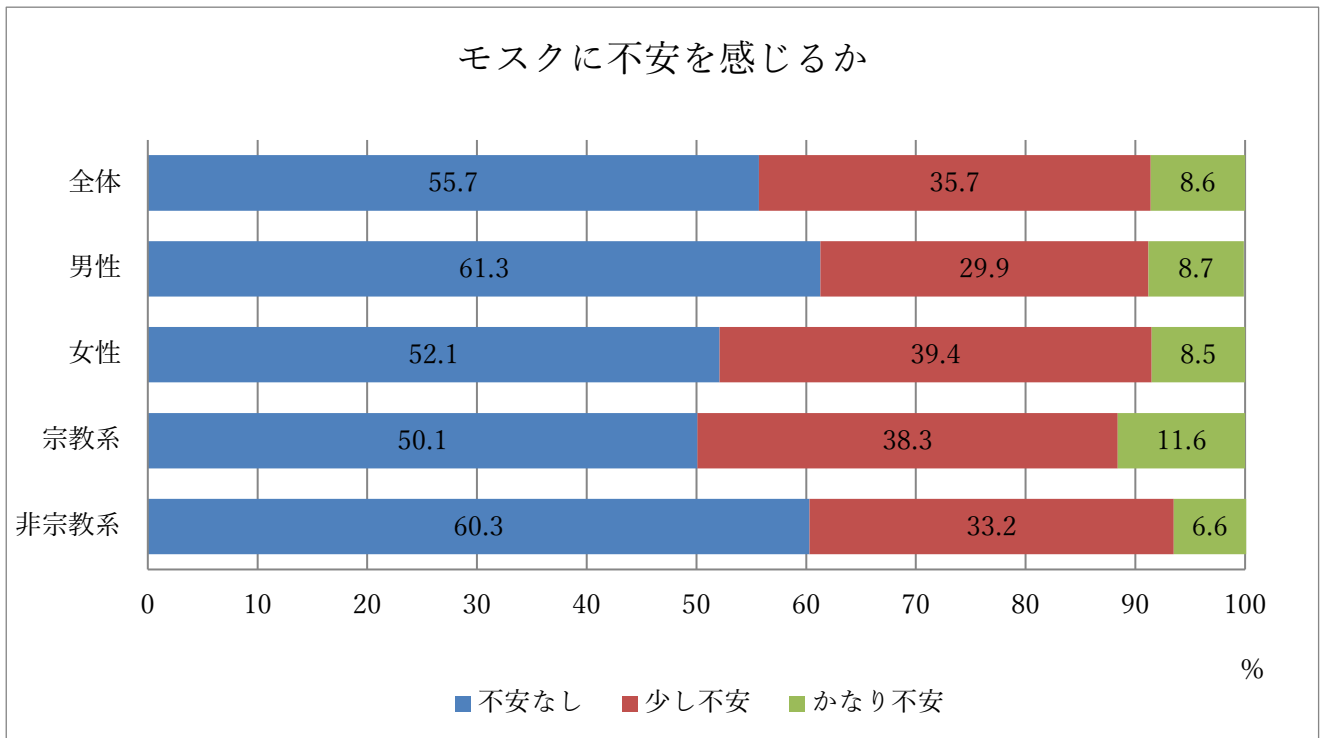
	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.自分はイスラム教徒である	5(0.3)	3(0.5)	2(0.2)	2(0.3)	3(0.3)
2.日本にイスラム教徒の友人がいる	91(5.6)	35(5.9)	54(5.4)	24**(3.4)	63**(7.2)
3.外国にイスラム教徒の友人がいる	81(5.0)	24(4.0)	56(5.6)	17**(2.4)	62**(7.1)
4.近所にイスラム教徒が住んでいる	49(3.0)	21(3.5)	28(2.8)	19(2.7)	29(3.3)
5.近所にイスラム寺院（モスク）がある	38(2.3)	15(2.5)	23(2.3)	18(2.6)	19(2.2)
6.あてはまるものはない	1,405(86.7)	515(86.7)	870(86.7)	636**(91.0)	724**(83.3)
空欄 (NA)	24				

1%有意水準で、非宗教系大学に「日本／外国にイスラム教徒の友人がいる」傾向がみられた。同様に、1%有意水準で、宗教系大学に「あてはまるものはない」傾向がみられた。

男女で有意差は確認できなかった ($p = .561$)。

質問「モスク（イスラム寺院）が近所にできることになったとするとあなたは不安を感じますか。」

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.不安は感じない	900(55.7)	365**(61.3)	520**(52.1)	349**(50.1)	523**(60.3)
2.少し不安を感じる	577(35.7)	178**(29.9)	394**(39.4)	267*(38.3)	288*(33.2)
3.かなり不安を感じる	139(8.6)	52(8.7)	85(8.5)	81**(11.6)	57**(6.6)
空欄 (NA)	28				



1%有意水準で、男性が「不安は感じない」と答え、女性が「少し不安を感じる」と答える傾向がみられた。

1%有意水準で、非宗教系が「不安は感じない」と答え、宗教系が「かなり不安を感じる」と答える傾向がみられた。

同じく5%有意水準で、宗教系が「少し不安を感じる」と答える傾向がみられた。

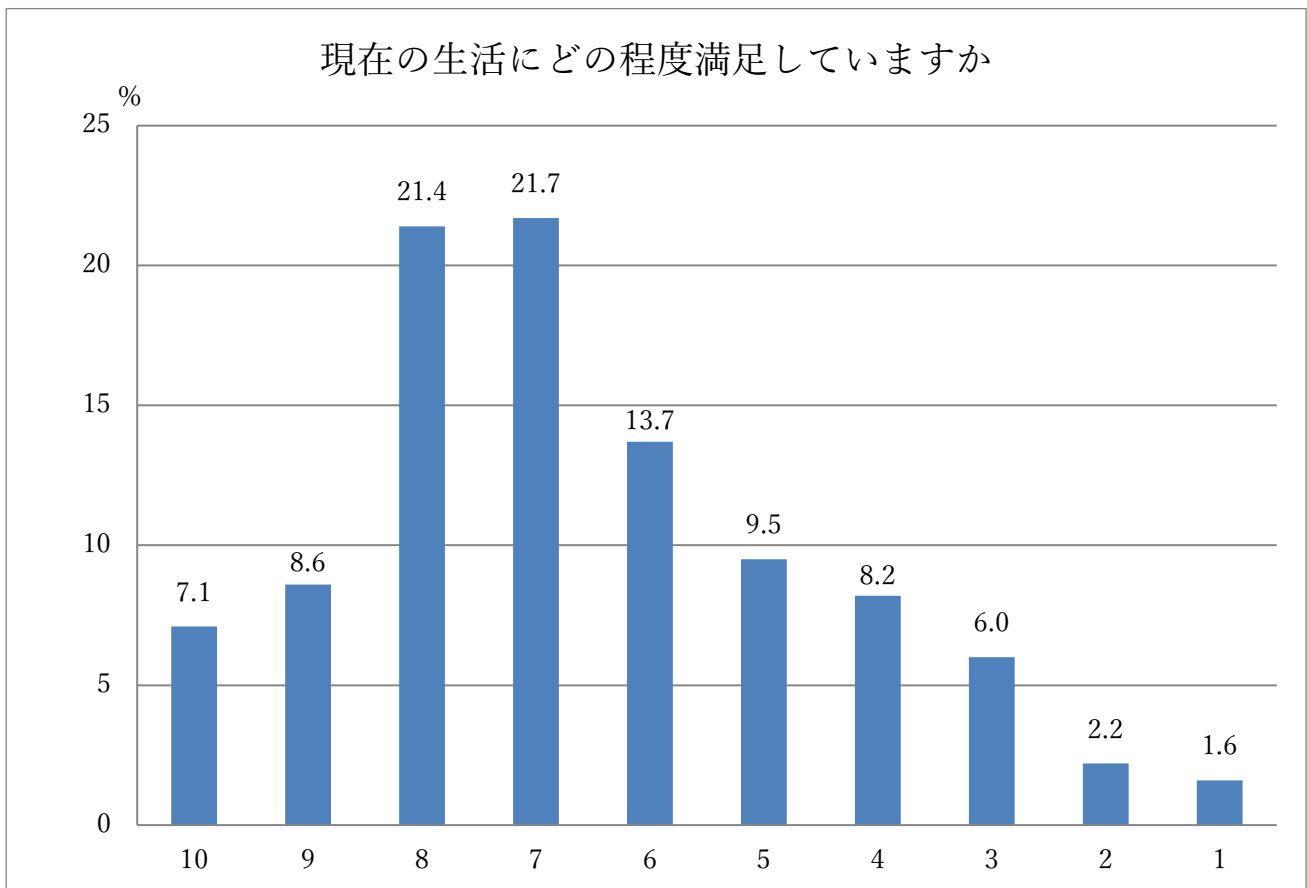
〔V〕ウェルビーイング（主観的幸福感）に関して

ウェルビーイング（主観的幸福感）に関わる次の質問に教えてください。

1.あなたは現在の生活にどの程度満足していますか。

質問「「とても満足」を10点、「とても不満」を1点とすると、何点くらいになると思いますか。」

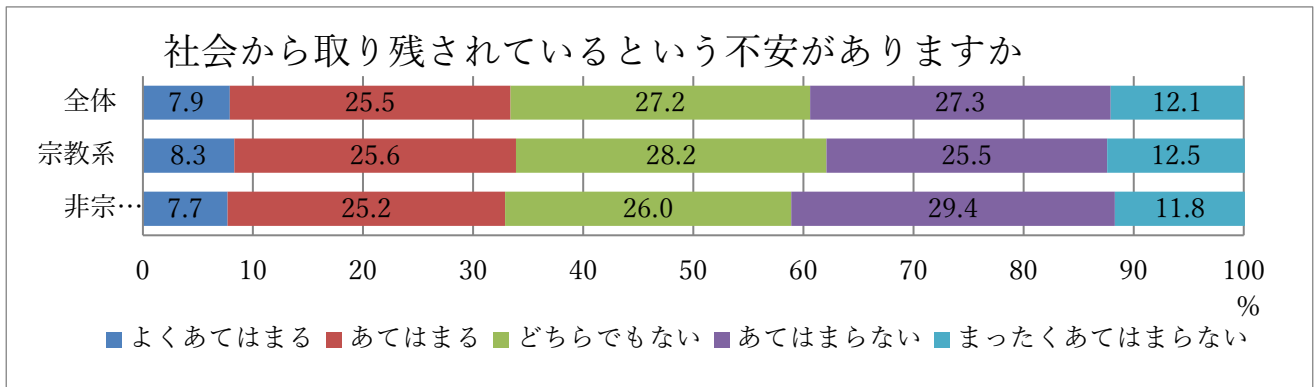
10点	116(7.1)
9点	140(8.6)
8点	349(21.4)
7点	354(21.7)
6点	223(13.7)
5点	155(9.5)
4点	133(8.2)
3点	98(6.0)
2点	36(2.2)
1点	26(1.6)
空欄 (NA)	14



2.あなたの状況にどの程度あてはまるかを教えてください。

質問「あなたは、社会から取り残されているという不安がありますか。次のうちから選んで下さい」

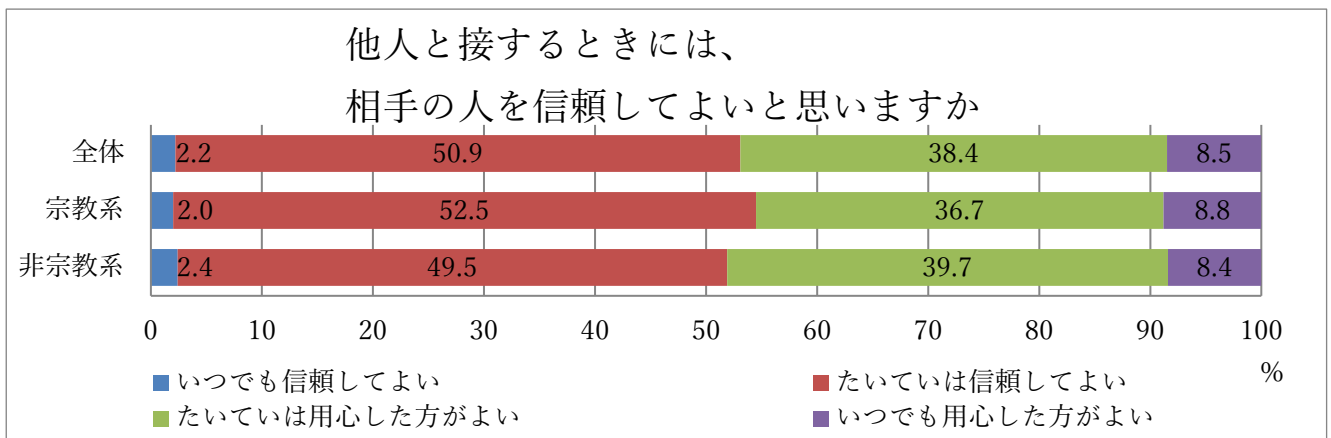
	全体	宗教系	非宗教系
1.よくあてはまる	129(7.9)	58(8.3)	67(7.7)
2.あてはまる	416(25.5)	180(25.6)	220(25.2)
3.どちらでもない	444(27.2)	198(28.2)	227(26.0)
4.あてはまらない	445(27.3)	179(25.5)	257(29.4)
5.まったくあてはまらない	197(12.1)	88(12.5)	103(11.8)
空欄 (NA)	13		



宗教系/非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .516$)。

質問「あなたは、他人と接するときには、相手の人を信頼してよいと思いますか。それとも、用心したほうがよいと思いますか。あなたの考えに一番近いものを次のうちから選んで下さい。」

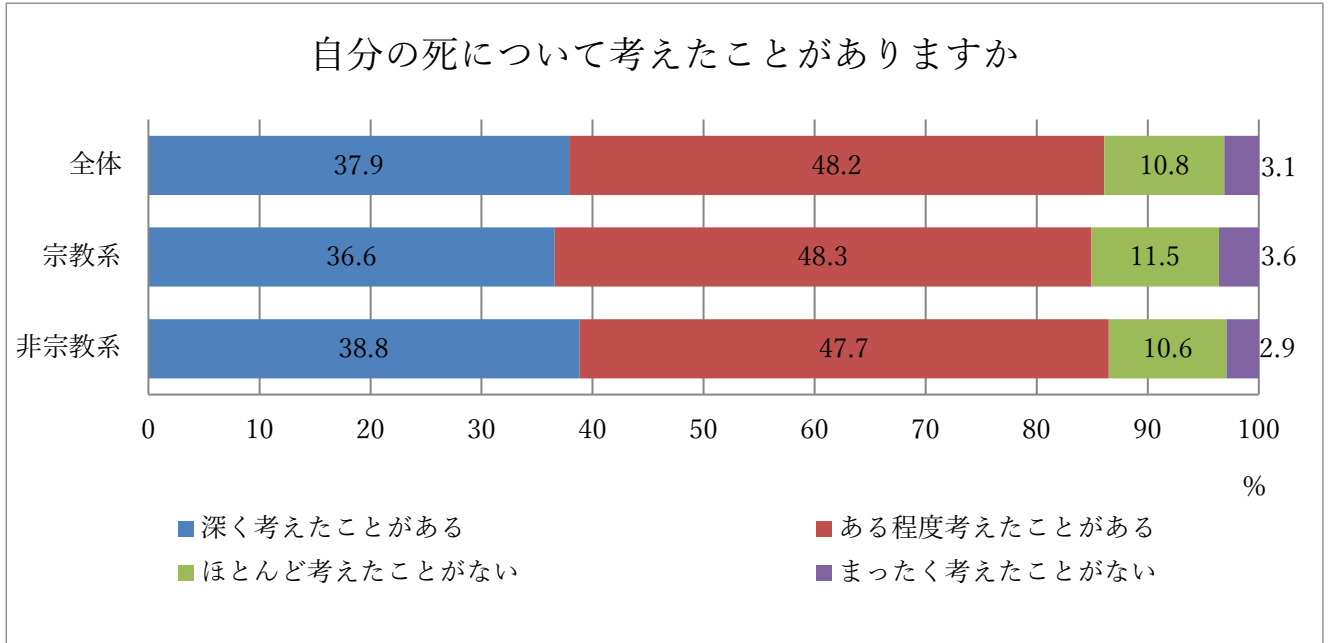
	全体	宗教系	非宗教系
1.いつでも信頼してよい	36(2.2)	14(2.0)	21(2.4)
2.たいていは信頼してよい	829(50.9)	369(52.5)	433(49.5)
3.たいていは用心した方がよい	626(38.4)	258(36.7)	347(39.7)
4.いつでも用心した方がよい	139(8.5)	62(8.8)	73(8.4)
空欄 (NA)	14		



宗教系/非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .577$)。

質問「あなたは、自分の死について考えたことがありますか。一番近いものを次のうちから選んで下さい。」

	全体	宗教系	非宗教系
1.深く考えたことがある	619(37.9)	258(36.6)	340(38.8)
2.ある程度考えたことがある	788(48.2)	340(48.3)	418(47.7)
3.ほとんど考えたことがない	177(10.8)	81(11.5)	93(10.6)
4.まったく考えたことがない	50(3.1)	25(3.6)	25(2.9)
空欄 (NA)	10		



宗教系／非宗教系に有意差は確認できなかった ($p = .708$)。

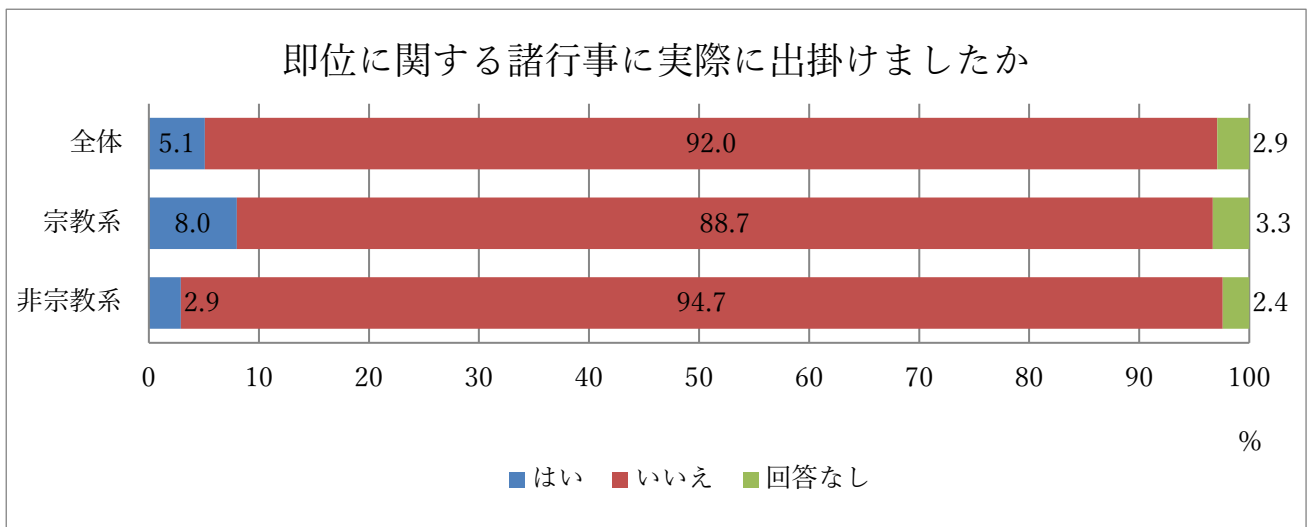
〔VI〕 天皇の即位に関して

1. 天皇の即位に関する儀礼について

天皇の即位に関わる次の質問に教えてください。

質問「即位に関連する諸行事に実際に出掛けましたか。」

	全体	宗教系	非宗教系
1.はい	83(5.1)	56**(8.0)	25**(2.9)
2.いいえ	1,501(92.0)	623**(88.7)	829**(94.7)
3.回答なし	47(2.9)	23(3.3)	21(2.4)
空欄 (NA)	13		

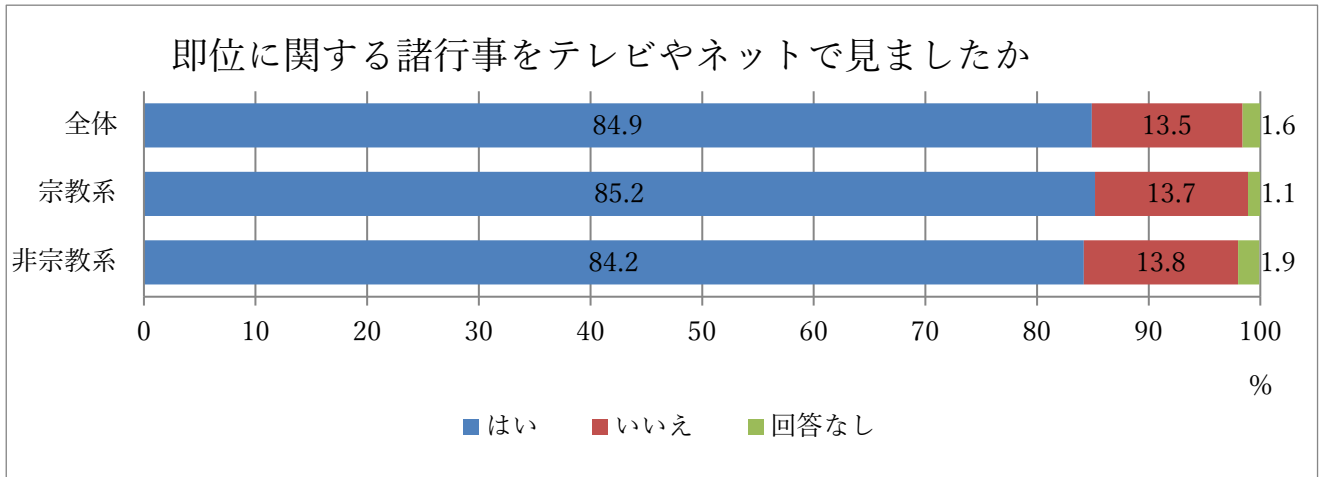


1%有意水準で宗教系大学は即位に関する行事に出掛けたと答える傾向があった。

なお、宗教系大学の別では有意差がみられるが、続く分析論文にて詳細を記す。

質問「即位に関する諸行事をテレビやネットで見ましたか。」

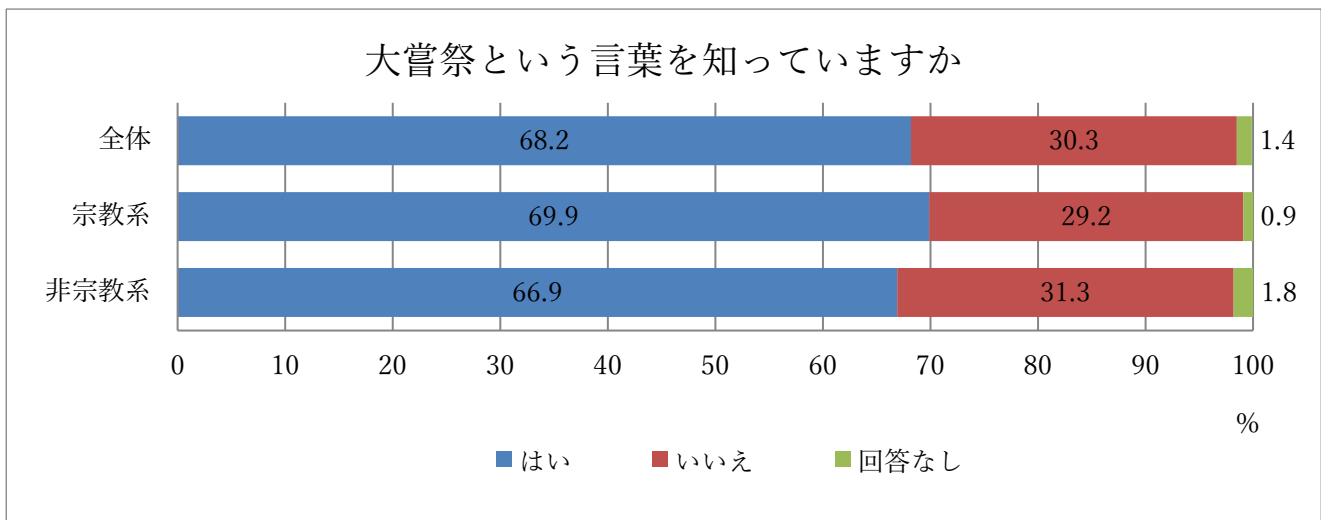
	全体	宗教系	非宗教系
1.はい	1,385(84.9)	598(85.2)	738(84.2)
2.いいえ	221(13.5)	96(13.7)	121(13.8)
3.回答なし	26(1.6)	8(1.1)	17(1.9)
空欄 (NA)	12		



宗教系と非宗教系で有意差は認められなかった ($p = .444$)。

質問「大嘗祭という言葉を知っていますか。」

	全体	宗教系	非宗教系
1.はい	1,113(68.2)	490(69.9)	586(66.9)
2.いいえ	495(30.3)	205(29.2)	274(31.3)
3.回答なし	23(1.4)	6(0.9)	16(1.8)
空欄 (NA)	13		

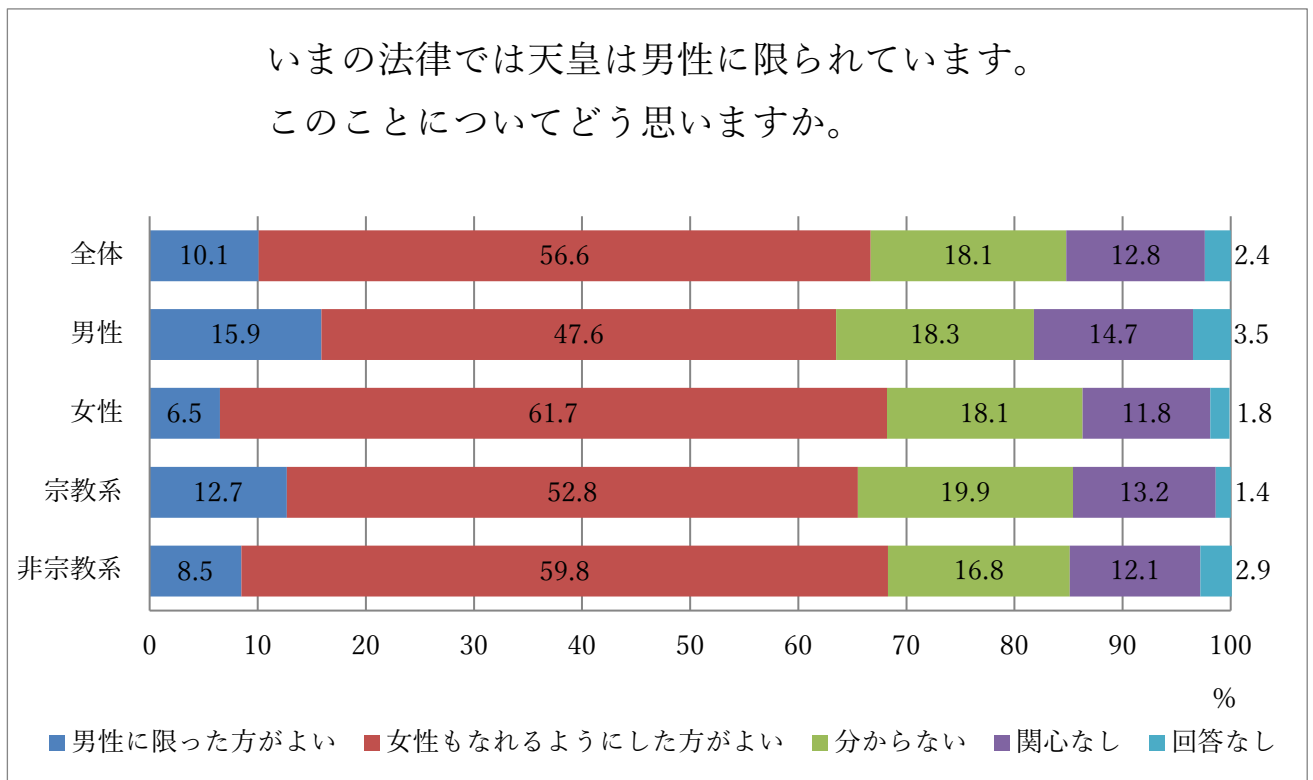


宗教系と非宗教系で有意差は認められなかった ($p = .159$)。

2.女系天皇について

質問「いまの法律では天皇は男性に限られています。このことについてどう思いますか。」

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.男性に限った方がよい	164(10.1)	95**(15.9)	66**(6.5)	89**(12.7)	74**(8.5)
2.女性もなれるようにした方がよい	922(56.6)	284**(47.6)	623**(61.7)	369**(52.8)	523**(59.8)
3.分からない	294(18.1)	109(18.3)	183(18.1)	139(19.9)	147(16.8)
4.関心がない	209(12.8)	88(14.7)	119(11.8)	92(13.2)	106(12.1)
5.回答なし	39(2.4)	21*(3.5)	18*(1.8)	10(1.4)	25(2.9)
空欄 (NA)	16				

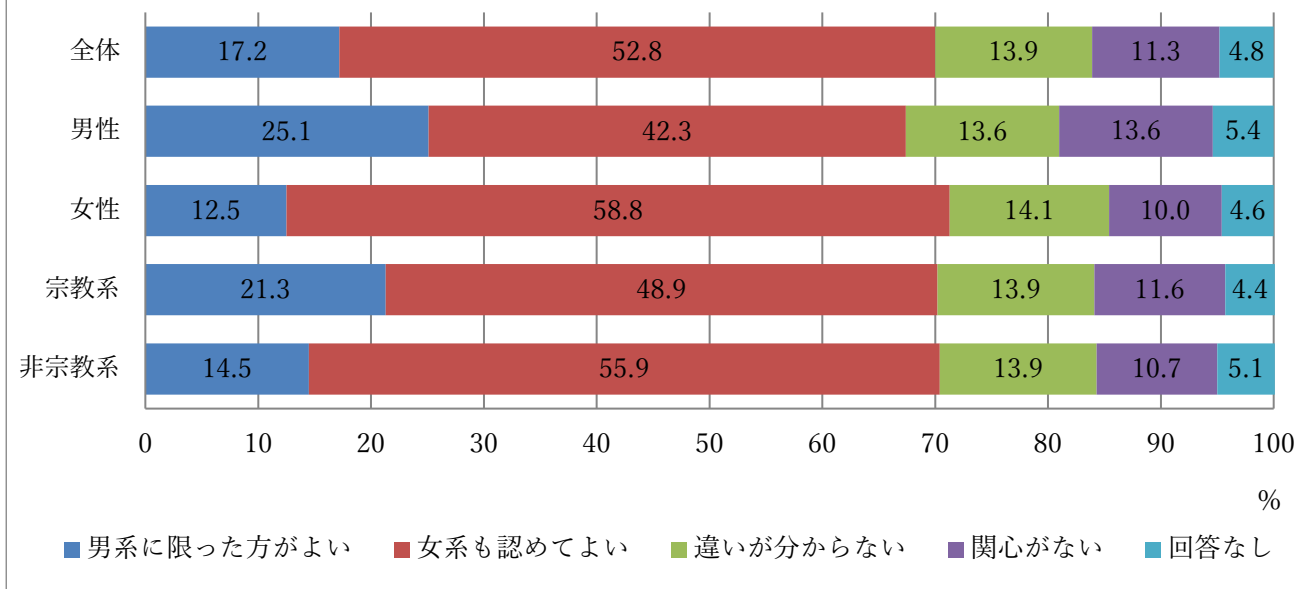


男女別・宗教系／非宗教系大学の別でそれぞれ1%水準で有意差がみられた。「男性に限った方がよい」と答えるのは男女別では男性、宗教系／非宗教系では宗教系大学という傾向があり、「女性にもなれるようにした方がよい」は女性と非宗教系大学でそう答える傾向がみられた。

質問「天皇の位をめぐるのは、男系に限るか女系を認めるかという議論があります。このことについてどう思いますか。」

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.男系に限った方がよい	279(17.2)	149**(25.1)	126**(12.5)	149**(21.3)	126**(14.5)
2.女系も認めてよい	858(52.8)	251**(42.3)	593**(58.8)	342**(48.9)	487**(55.9)
3.違いが分からない	226(13.9)	81(13.6)	142(14.1)	97(13.9)	121(13.9)
4.関心がない	183(11.3)	81*(13.6)	101*(10.0)	81(11.6)	93(10.7)
5.回答なし	78(4.8)	32(5.4)	46(4.6)	31(4.4)	44(5.1)
空欄 (NA)	20				

天皇の位をめぐるのは、男系に限るか女系を認めるかという議論があります。このことについてどう思いますか。



1%水準で男女、宗教系/非宗教系「男系に限った方がよい」「女系も認めてよい」に有意差がみられた。男性、宗教系大学の方が「男系に限った方がよい」と答える傾向にある。また、女性、非宗教系大学の方が「女系も認めてよい」と回答する傾向がみられる。「違いが分からない」には有意差はみられず、「関心がない」は5%有意水準で女性の方が低い。

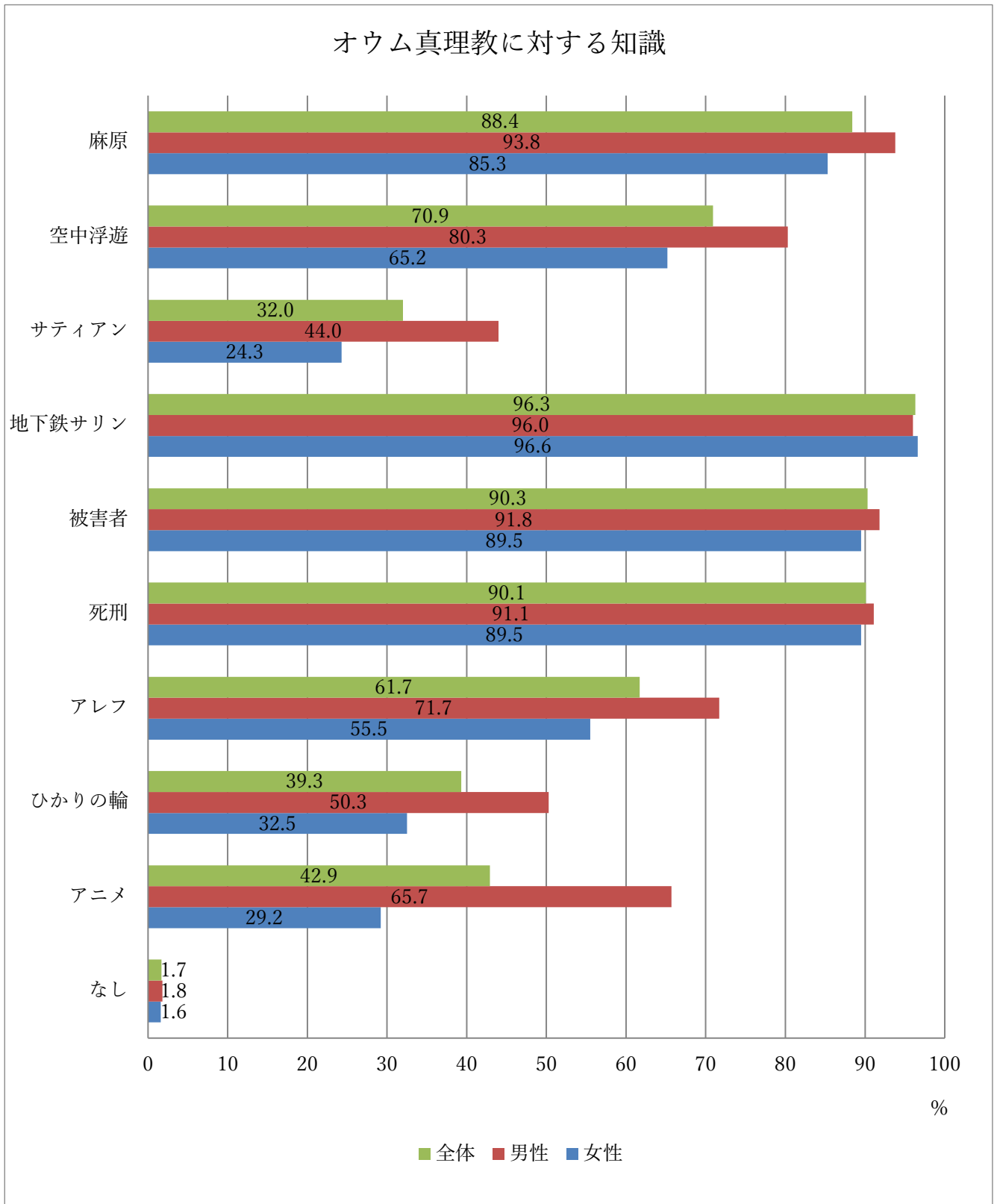
【Ⅶ】 オウム真理教について

質問「オウム真理教に関連する次の事柄のうち、あなたが知っているものを選んで下さい。」

（複数回答）

下記見出し	実際の選択肢
1. 麻原	教祖は麻原彰晃（本名松本智津夫）である。
2. 空中浮揚	教祖は修行によって空中浮揚など超能力が得られると主張した。
3. サティアン	信者たちが修行していた建物は、サティアンと呼ばれていた。
4. 地下鉄サリン	（1995年3月に）東京で地下鉄サリン事件を起こした。
5. 被害者	地下鉄サリン事件では10名以上の死者を含む数千人の被害者が出た。
6. 死刑	サリン事件に関わった教祖と幹部の死刑が執行された。
7. アレフ	オウム真理教の元信者の一部は、現在アレフという団体に所属している。
8. ひかりの輪	麻原彰晃の弟子であった上祐史浩は「ひかりの輪」という団体を作った。
9. アニメ	布教のために作成されたアニメが現在もネット上に存在する。
10. なし	知っていることはない。

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.麻原	1,443(88.4)	561**(93.8)	862**(85.3)	629(89.7)	765(87.2)
2.空中浮揚	1,157(70.9)	480**(80.3)	659**(65.2)	504(71.9)	617(70.4)
3.サティアン	522(32.0)	263**(44.0)	246**(24.3)	260**(37.1)	252**(28.7)
4.地下鉄サリン	1,572(96.3)	574(96.0)	977(96.6)	677(96.6)	842(96.0)
5.被害者	1,475(90.3)	549(91.8)	905(89.5)	630(89.9)	796(90.8)
6.死刑	1,471(90.1)	545(91.1)	905(89.5)	626(89.3)	796(90.8)
7.アレフ	1,007(61.7)	429**(71.7)	561**(55.5)	453(64.6)	519(59.2)
8.ひかりの輪	641(39.3)	301**(50.3)	329**(32.5)	278(39.7)	349(39.8)
9.アニメ	701(42.9)	393**(65.7)	295**(29.2)	327*(46.6)	351*(40.0)
10.なし	27(1.7)	11(1.8)	16(1.6)	9(1.3)	18(2.1)
空欄 (NA)	13				



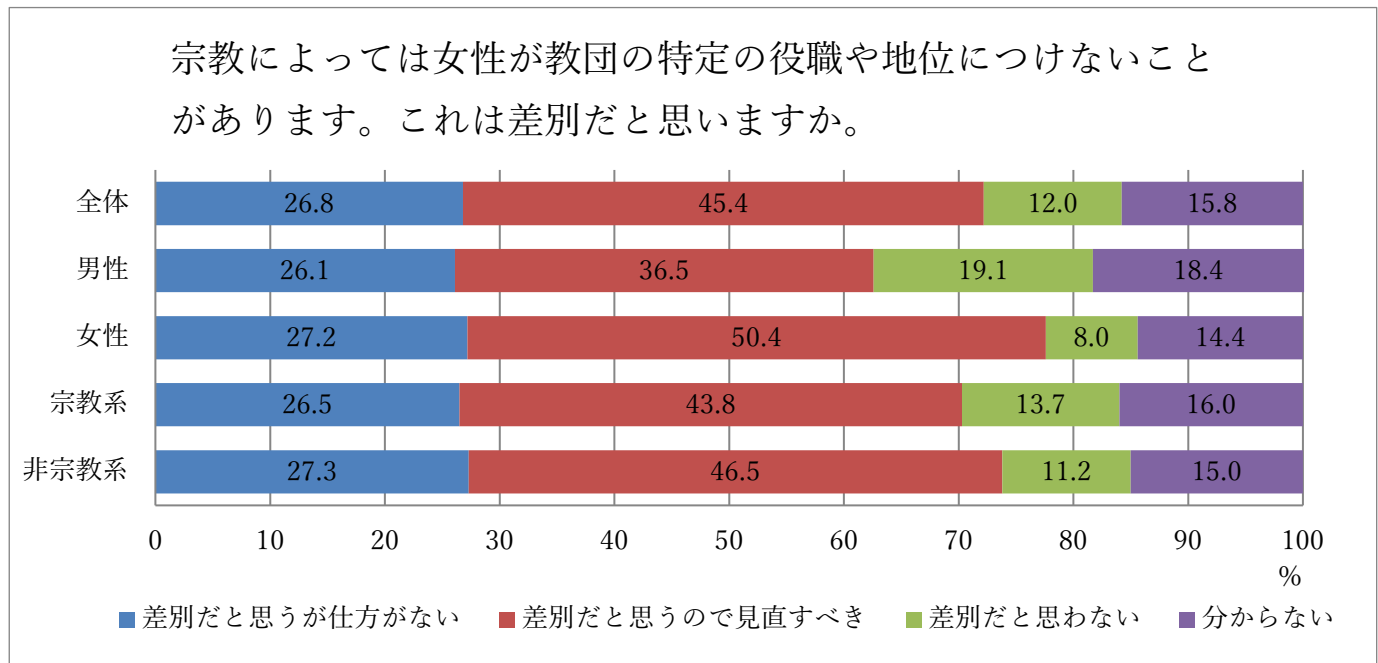
男女差が見られたのは麻原、空中浮揚、サティアン、アレフ、ひかりの輪、アニメで、すべて男性が1%水準で有意に高い傾向がみられた。

大学別で有意差が出たのはサティアンとアニメであり、前者は1%水準、後者は5%水準とともに宗教系大学が有意に多い傾向がある。

〔Ⅷ〕 宗教とジェンダーについて

質問「宗教によっては女性が教団の特定の役職や地位につけないことがあります。これは差別だと思いますか。」

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.差別だと思うが仕方がない	437(26.8)	156(26.1)	274(27.2)	186(26.5)	239(27.3)
2.差別だと思うので見直すべき	739(45.4)	218 ^{**} (36.5)	509 ^{**} (50.4)	307(43.8)	406(46.5)
3.差別だと思わない	196(12.0)	114 ^{**} (19.1)	81 ^{**} (8.0)	96(13.7)	98(11.2)
4.分からない	257(15.8)	110 [*] (18.4)	145 [*] (14.4)	112(16.0)	131(15.0)
空欄 (NA)	15				

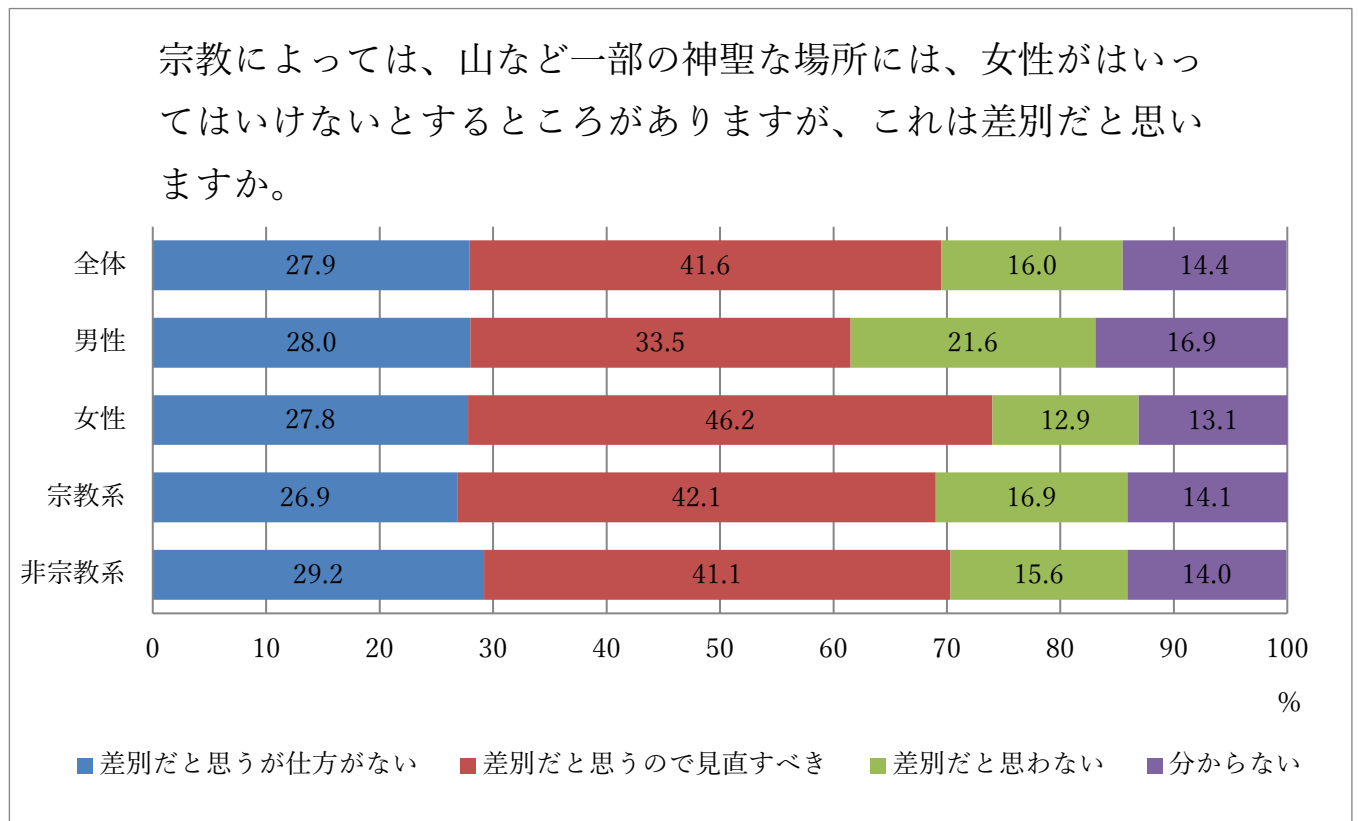


「差別だと思うので見直すべき」と「差別だと思わない」に男女別で1%水準で有意差があり、「分からない」は男女別で5%水準で有意差がみられた。女性は「差別だと思うので見直すべき」を支持する傾向が高い。

宗教系と非宗教系大学では有意差はみられなかった ($p = .408$)。なお、宗教系大学の別では1%水準で有意差がみられた。宗教系大学の別の回答傾向詳細は、続く分析論文にて詳細を記す。

質問「宗教によっては、山など一部の神聖な場所には、女性が入ってはいけないとすることがありますが、これは差別だと思いませんか。」

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.差別だと思うが仕方がない	455(27.9)	167(28.0)	281(27.8)	188(26.9)	256(29.2)
2.差別だと思うので見直すべき	678(41.6)	200**(33.5)	467**(46.2)	295(42.1)	360(41.1)
3.差別だと思わない	261(16.0)	129**(21.6)	130**(12.9)	118(16.9)	137(15.6)
4.分からない	235(14.4)	101*(16.9)	132*(13.1)	99(14.1)	123(14.0)
空欄 (NA)	15				



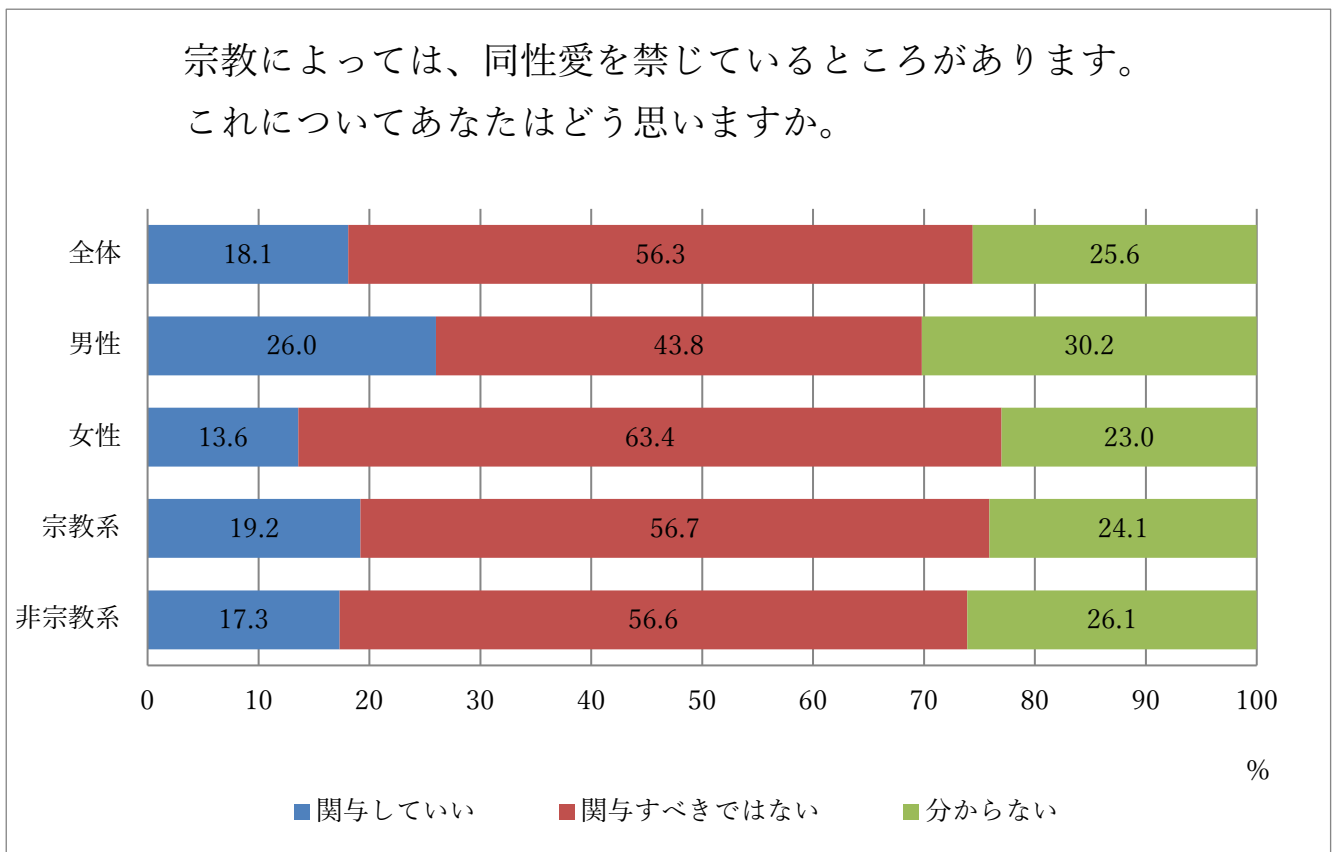
「差別だと思うので見直すべき」と「差別だと思わない」に男女に1%水準で有意差がみられた。男性は「差別だと思わない」、女性は「差別だと思うので見直すべき」を支持する傾向がみられる。また、「分からない」は5%水準で男女に有意差がみられた。

宗教系と非宗教系では有意差はみられなかった ($p = .745$)。

質問「宗教によっては、同性愛を禁じているところがあります。これについてあなたはどのように思いますか。」

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.関与していい	295(18.1)	155**(26.0)	137**(13.6)	135(19.2)	151(17.3)
2.関与すべきではない	917(56.3)	261**(43.8)	641**(63.4)	398(56.7)	494(56.6)
3.分からない	417(25.6)	180**(30.2)	233**(23.0)	169(24.1)	228(26.1)
空欄 (NA)	15				

*実際の選択肢は、「1.関与していい」は「宗教もそういうことに関与していい」、「2.関与すべきではない」は「宗教はそういうことに関与すべきではない」。



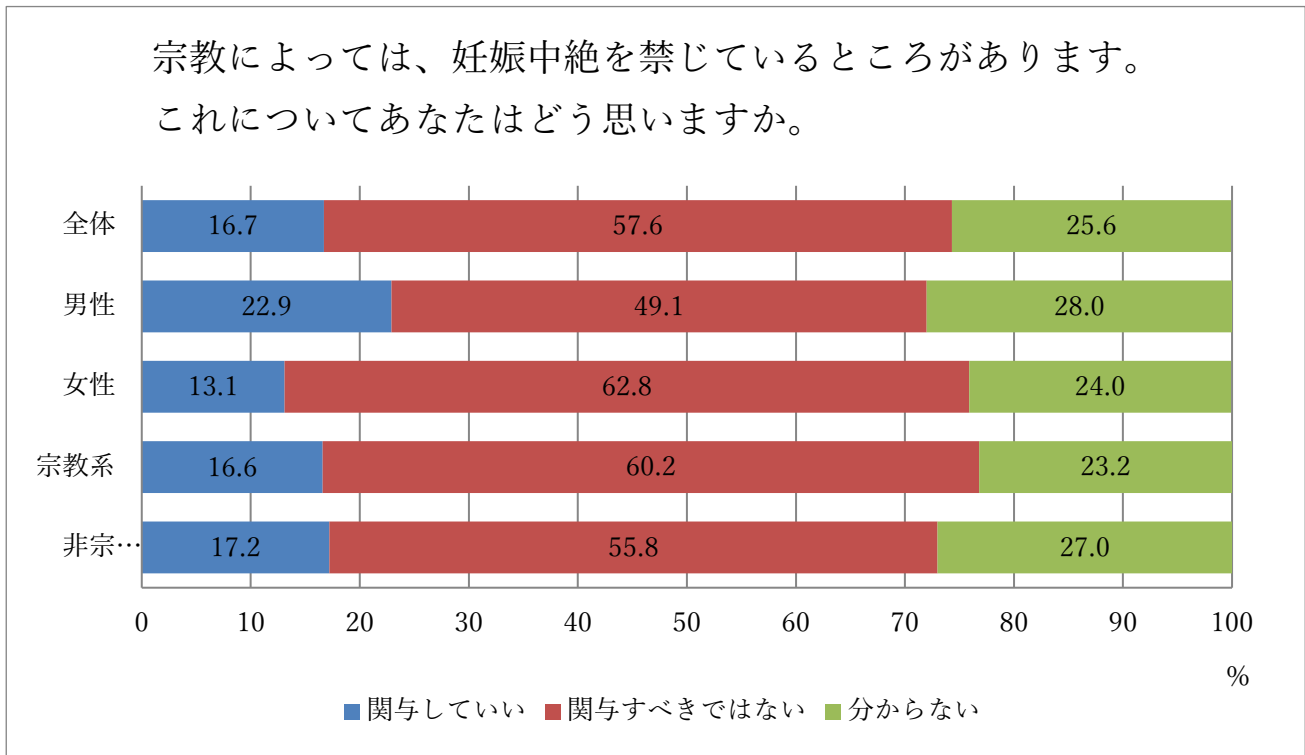
男女別では1%水準で各設問に有意差が確認された。男性は「関与していい」が、女性は「関与すべきではない」を支持する傾向がみられる。「分からない」については女性の方が有意に低い。

宗教系と非宗教系大学では有意差はみられなかった ($p = .485$)。

質問「宗教によっては、妊娠中絶を禁じているところがあります。これについてあなたはどのように思いますか。」

	全体	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.関与していい	273(16.7)	137**(22.9)	133**(13.1)	117(16.6)	150(17.2)
2.関与すべきではない	940(57.6)	293**(49.1)	636**(62.8)	423(60.2)	488(55.8)
3.分からない	418(25.6)	167(28.0)	243(24.0)	163(23.2)	236(27.0)
空欄 (NA)	13				

*実際の選択肢は、「1.関与していい」は「宗教もそういうことに関与していい」、「2.関与すべきではない」は「宗教はそういうことに関与すべきではない」。



男女別「関与していい」「関与すべきではない」において1%水準で有意差がみられ、男性は「関与していい」、女性は「関与すべきではない」を支持する傾向が確認できる。

宗教系と非宗教系では有意差はみられなかった ($p = .168$)。

学生の宗教意識から浮かび上がるもの

— 『第13回学生宗教意識調査』を題材に—

今井信治¹・丹羽宣子²

1. 本稿の目的

本稿は2020年度に行われた『第13回学生宗教意識調査』（以下、「本調査」と呼称）の詳細分析に位置付けられる。本調査は2020年7月から12月に掛けて行われ、総回答者数は1,656名、有効回答者数は1,644名である。

本調査プロジェクトは1995年から定期的に行われてきたが、その分析内容は、単純集計と限られたクロス表から読み取れる内容に限られていた。本調査より紙媒体からGoogleフォームを用いたWebアンケートへと移行したことで集計が簡便化したことも相まって、より統計的な手続きを踏んだ分析を行うことが本稿の目的である。

実施時期は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延により大学教育が大きく変動していた時期であった。そのため、対面にて調査協力を請うことが困難であり、過年度のような講義時間を割いての自記式調査とは異なっていることにも留意しておきたい。本稿の目的から外れるため、過年度調査との比較でbefore / after コロナにおける学生宗教意識の検討をすることは差し控える。

また、本調査プロジェクトの協力メンバーは宗教学に関する教員で構成されているために、回答者は宗教学関連の講義を履修している学生に偏っていると思われる。適切なサンプリングを経ておらず、回答者は「一般的な」学生よりも宗教への親和性が高いことが予想されるが、本調査ではこのバイアスを大きな問題とは捉えない。その理由は、ランダムサンプリングによる郵送調査での有効回答率は概して30%未満であり、回答者は調査内容に対して親和的な態度を有していることが知られていることによる。その点において、回答者の宗教への親和性について大きな瑕疵はないと考える。

本調査内容の単純集計については2020年度末に刊行・公開されている。そして既刊調査報告書に追記する形で、刊行時に表組みされていた内容について χ^2 乗検定の後に残差分析を行った。統計的有意差が確認できた箇所については、アスタリスクで示してショートコメントを付してある。

しかし、ただ単純集計表に印を付けただけでは分析とは言えない。そのため本稿では、主要な箇所を抜粋して分析を加える。その際に逐次先行研究を参照することで、大学生を対象とした『学生宗教意識調査』である本調査の特色が浮かび上がるであろう。

2020年度刊行の単純集計を統計的に洗い直すという目的上、本稿の分析の中心は男女および宗教系／非宗教系大学の別による検定結果報告が主になる。その他については独自の視角において、本分析を担当した今井信治・丹羽宣子が別稿で論じる。

今井は別稿にて、「浮遊する宗教的関心と宗教的文化資本の継承—実証研究に基づく理解を目指して—」と題し、「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1)ならびに「父の宗教」(II-5)と「母の宗教」(II-6)を主な説明変数とする分析を行う。その狙いは本調査の特徴を活用することにある。本調査では信仰の有無を尋ねており、これは他の社会調査とほぼ同水準の10.7%であった。しかし同設問にて「信仰は持っていないが、宗教に関心がある」は回答者の過半数を超えており(51.9%)、巷間に流布している「日本人は宗教に無関心」という言説を覆している。若年の宗教関心層は、今後の日本宗教を語る上で貴重な鉱山と目されるだろう。そして宗教情操

¹ 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所共同研究員

² 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所客員研究員

の形成に父母が与える影響については、主に信仰継承問題として議論が積み重ねられている。そこに異論を差し挟むものではないが、非信者をも含みこんだ実証研究は手薄であると言えよう。そこで別稿ではピエール・ブルデュー由来の文化資本概念を援用しつつ、宗教意識に特化した文化的再生産論を展開したい。

丹羽の別稿では、宗教系学校に所属経験のある学生の宗教意識に焦点を当てる。「2020年度学生宗教意識調査報告(改訂版)」と本稿では、男女と宗教系/非宗教系大学の別による検定結果が示される。本調査では新宗教立の大学からアンケートを取っていないので、宗教系大学として指示されるのは神道系大学・仏教系大学・キリスト教系大学を統合したものである。しかしながら、それぞれの宗教系学校には特色ある校風があることに異論を挟む者はいないだろう。そこで別稿では、宗教系大学の別に有意差がみられる「VI. 天皇の即位に関して」と「VIII. 宗教とジェンダーについて」を中心に検定結果を報告し、そして、宗教系高校の卒業生の回答行動も確認していく。一部の設問では、同じ宗教系の大学と高校で異なる選択肢が支持される傾向が確認できる。この意味を探るため、学校教育とジェンダー研究を参照しながら、宗教教育における正規的教育課程以外に学校における慣行や教職員の規範を伝達する「隠れたカリキュラム」析出へと歩を進めるための試論を提示する。

以下、本稿第2節については今井が、第3節については丹羽が主に担当する。

2. 宗教系/非宗教系大学における宗教の位置付けと宗教意識

2-1 本調査の留意点と先行研究の整理

幸いなことに、本調査では宗教系大学から705名(44.5%)、非宗教系から879名(55.5%)という偏りの少ない有効回答を得ることができた。しかし、「宗教系大学」と括っても神道系・仏教系・キリスト教系・新宗教系に分かれている。また、各教員が講義に紐付けてアンケートを回収した都合上、回答者の所属する学部にも偏りがあることには留意したい。なお、調査を実施した大学一覧は報告書末尾に記載してある。

その上でまず確認せねばならないことは、新宗教系大学や宗教系学部でない限り、学生は自身の所属する大学が宗教系であることはあまり意識していないし、進学動機にもなりにくいという点である。

やや古い調査だが、井上順孝が1992年に行った調査[井上1993:8]によると、宗教系大学に通っている回答者2,363名のうち「受験前に宗教系の大学であること」を「知っていた」のは91.5%であった。ただし、「知っていた」と回答した者のうち70.7%が受験意欲との関係について「別に気にしなかった」という。また、「入学意欲が増した」のは15.1%、「多少気になったが入学することにした」が14.2%であり、井上は「宗教系であることがプラスに作用した人と、ややマイナスに作用した人の割合は、ほぼ半々である」と分析している。

仏教系大学の入学式で壇上に仏壇が置かれて袈裟をまとった僧侶が並んでいること、キリスト教系で式次第に賛美歌が挿入されることに驚く学生などのエピソードはしばしば耳に聞くところである。しかし、それらは入学前に宗教系大学であることをさほど意識していなかった層が受けたカルチャー・ギャップであると解することができよう。入学後の大学生を対象としている井上同調査[ibid.]において「大学に宗教的色彩を感じるか」という設問に66.8%が「感じる」と回答しているが、自由記述での「反応はまちまち」で「必ずしも肯定的評価とは限らない」としている。

上記調査のように、建学の精神に代表されるような校風や、大学構内に宗教施設や宗教者が存在すること、そして各種宗教的行事に参加することで宗教系大学に所属しているという意識は醸成される。しかしそれらがどの程度学生の宗教意識に影響するかを定量的に推し量ることは困難である。

宗教系大学に所属しているとはいえ、回答者には初年次教育等で宗教的必修科目もしくは校史を学んだり、ある程度は大学で催される宗教的行事に参加したりしている以上の期待を持つことは難しいだろう。以下、齋藤崇

徳がまとめた「宗教別宗教的行事の有無」ならびに「学則における宗教別宗教的必修科目」を参照する〔齋藤 2014: 61-63〕。宗教別で頻度が低い順に示すと、新宗教系大学で宗教的行事が 33.33%、宗教的必修科目が 20.00%。仏教系で 92.50%/75.00%。キリスト教系で 94.67%/89.89%。神道系はともに 100%である。新宗教系を除き、宗教的行事と宗教的必修科目の存在は軒並み高い割合であると言える。ただし、齋藤自身が「行事への出席が義務であるか否か、またどの程度の期間行っているものなのかについて特記していないため、例えば出席が義務ではない集会を年に一回行っているだけでもここでは数えている」、「どの程度の内容を、何単位分行っているのかなどの詳細な分析は課題として残っている」ことを認めていることには留意したい。

この点において宗教系大学は、多くの宗教系高等学校のように半強制的に行事へ参加したり、週1コマ以上の頻度で宗教系の授業が行われたりする環境とは異なることが想定される。宗教系高校を卒業していることと宗教系大学に所属していることの別については、別稿の丹羽論文を参照されたい。

2-2 宗教系大学への所属と宗教意識

本調査において、宗教系/非宗教系大学の別と「宗教への関心」(II-1)は独立している ($p=.097$)。そして先行研究を踏まえると、大学が宗教系であることは取り立てて学生の入学動機を後押しするとは言えない。本調査は2020年7月から12月に渡って行われたものであり、多くの場合初年次教育にて行われる宗教的必修科目はほぼ履修し終えているか、履修の最中であることが予想される。それにもかかわらず、宗教的必修科目を履修することによって宗教系大学と非宗教系大学の学生で「宗教への関心」の違いは認められなかった。

ただし、本調査時期はコロナ禍の影響を強く受けており、大学教育および行事はほぼオンライン環境で行われた。そのため、学年が浅い場合は宗教系大学の校風が回答者の「宗教への関心」に作用していない可能性を考慮すべきであろう。また、コロナ禍の影響を抜きにしても、宗教系大学では学年が上がるに連れて校風に染まる可能性が考えられる。そこで回答者の「学年」(I-5)と「宗教への関心」(II-1)をクロスしたものが表1である。

表1 大学属性別回答者の「学年」と「宗教への関心」のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	宗教系 1年	宗教系 2年	宗教系 3年	宗教系 4年
	非宗教系 1年	非宗教系 2年	非宗教系 3年	非宗教系 4年
現在、信仰をもっている	36(-1.819)	34(1.672)	17(1.441)	5(-1.232)
信仰はもっていないが、 宗教に関心がある	28(-.756)	24(1.462)	13(-1.216)	10(.816)
信仰はもっていないが、 宗教にもあまり関心がない	182*(2.035)	100(-.681)	42(-1.372)	28(-.828)
信仰はもっていないし、 宗教にもまったく関心がない	174(-1.770)	121(1.352)	98(-.889)	57*(2.148)
信仰はもっていないし、 宗教にもあまり関心がない	74(-1.164)	44(-1.103)	30(1.817)	20(1.623)
信仰はもっていないし、 宗教にもまったく関心がない	102*(2.151)	44(-1.755)	55(1.106)	13*(-2.487)
信仰はもっていないし、 宗教にもまったく関心がない	34(.358)	23(.812)	4*(-1.972)	7(.451)
信仰はもっていないし、 宗教にもまったく関心がない	37(.513)	17(-1.070)	23(1.016)	7(-.704)

※ $p>.05$ 、 $*p>.01$ 、以下の表についても同様。学年については「大学院生」と「その他」、「宗教への関心」については「回答なし」およびN/Aを除いて集計した(宗教系:n=680、非宗教系:n=823)。

宗教系/非宗教系大学それぞれに有意差が認められたことから、本調査において回答者の「学年」と「宗教への関心」に関わりがある可能性は高い(宗教系: $p=.048$ 、非宗教系: $p=.042$)。ただし問題はその内実である。すべて5%有意水準で、宗教系大学では「宗教に関心がある」1年生が多く、「宗教にまったく関心がない」3年生

が少ない。そして非宗教系大学では、「宗教にあまり関心がない」1年生と「宗教に関心がある」4年生が多く、「宗教にあまり関心がない」4年生が少なかった。

宗教的必修科目を履修するであろう1年次の学生に「宗教に関心がある」傾向が見られるのは喜ばしい。しかし、喉元を過ぎて熱さを忘れてしまい、宗教への関心が卒業まで持続しないことは由々しき問題である。それぞれの大学における建学の精神は主に人格形成に関わるものであろう。しかし、在学中に宗教への関心が薄れてしまえば、特定の宗教に基づく人格形成の達成は困難を極めると思われる。

そこで「宗教への関心がない理由」(II-3)を宗教系/非宗教系大学の別とクロスすることで、宗教系大学で宗教への関心が持たない層の特徴を炙り出すことを試みたのが表2である。

表2 「宗教への関心がない理由」と宗教系/非宗教系大学のクロス表(実数(調整済み残差))

宗教への関心がない理由	宗教系(228名)	非宗教系(302名)
宗教に関する嫌な体験があるから	25** (3.127)	12** (-3.127)
宗教に関する悪い報道やニュースを見たから	54 (-1.059)	60 (1.059)
なんとなく嫌いだから	22 (1.433)	19 (-1.433)
身近に接したことがないから	105 (-.372)	144 (-.372)
宗教の必要性を感じていないから	123 (-1.303)	180 (1.303)

「信仰をもっておらず、宗教にもあまり/まったく関心がない」層から、本設問に関する欠損値を除いて集計した(n=530、複数回答)。

本設問は「信仰をもっておらず、宗教にもあまり/まったく関心がない」層に複数回答で理由を尋ねたものであるが、「宗教に関する嫌な体験があるから」のみ——その割合はせいぜい10%強ではあるが——宗教系大学の学生が1%有意水準で多い傾向が認められた。これは宗教系大学の存在意義に疑義を呈しかねない結果とすら言うだろう。その他の選択肢である「身近に接したことがないから」、「宗教の必要性を感じていないから」は宗教系/非宗教系大学であることによる違いは認められなかった。

上記の結果をまとめると、宗教系大学の学生は非宗教系大学の学生に比して宗教に関心を持っているわけではなく、宗教を身近なものとも必要なものとも思っていない。宗教系/非宗教系大学で宗教への身近さや必要性について差異が認められない事自体も問題であるが、以下、宗教系大学の学生が有意に「嫌な体験」をしていることに焦点を当てたい。

本調査に限らず、アンケート調査の限界として「嫌な体験」の内容は分からない。その「嫌な体験」は執拗な宗教勧誘などという深刻な問題であるかも知れない。あるいは「宗教にあまり/まったく関心がない」層を抽出して尋ねた設問であるため、井上前掲調査でも指摘されているように、興味のない宗教的必修科目を履修せねばならないことを「嫌な体験」と考えたのかも知れない[井上 ibid.:8]。しかし、宗教の理念に基づいて学生を教え導く宗教系大学が、非宗教系大学に比して宗教への悪印象をもたらしている可能性が示唆されたことは強調して然るべきであろう。

宗教系大学の教育が宗教に悪印象を与えている可能性を示唆する結果は他にもある。「宗教や宗教家に関する考え」(III)のうち、「神/仏/霊魂/超自然的な力の存在」を肯定するか否か(III-1~4)については宗教系/非宗教系大学で有意差は認められなかった³。こうした超越的存在への認識については深い宗教情操教育が必要と思

³ 「人生に悩んだとき相談したい宗教家」(III-5)では「その他の宗教家(新宗教の教師など)」のみ5%有意水準で有意差が確認されたが、回答者が多い傾向が認められたのは非宗教系大学の方である。この点については、本調査では創価大学や天理大学といった新宗教立の大学からアンケートを取れていないことが大きいと思われる。

われるため、大学教育のなかで意識を覆すことは難しいかもしれない。ただ、「宗教に関する意見」(IV-1)では、全体的に宗教系大学に所属する学生が宗教をネガティブに捉えている様子が伺える。有意差が認められた項目を抜き出すと、「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要な。」(IV-1-①)では1%有意水準で宗教系大学の学生が「そう思わない」を支持する傾向が認められた(表3)。

表3 「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要な。」と宗教系/非宗教系大学のクロス表(実数(調整済み残差))

	宗教系 (704名)	非宗教系 (876名)
そう思う	218(-1.000)	292(1.000)
どちらかといえばそう思う	326(.664)	391(-.664)
どちらかといえばそう思わない	92(-1.808)	143(1.808)
そう思わない	68**(2.970)	50*(-2.970)
		n = 1,580

「どちらかといえば」の文言を無視して「そう思う/そう思わない」の二値で丸めれば有意差が見られなくなるが($p = 0.742$)、信仰や宗教への関心の有無に関わらず、宗教系大学に所属しながらも宗教の必要性を積極的に否定する層が有意に多い結果が出たことは気に掛かる。

作表は省くが、「宗教を信じると、心のよりどころができる。」(IV-1-⑥)と「災害が起こった際に宗教は人びとを支えることができる。」(IV-1-⑦)では、それぞれ1%と5%有意水準で宗教系大学に「そう思わない」傾向がみられた。あくまで非宗教系大学との比較であるが、平時であれ非常時であれ、宗教系大学の学生が宗教を必要としていない傾向が認められる。それに留まらず、「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ。」(IV-1-⑤)では、1%有意水準で宗教系大学に「そう思う」、非宗教系大学に「どちらかといえばそう思わない」傾向が確認され、非宗教系大学の学生が宗教を擁護する立場になっている。宗教系大学をさらに宗教別で分析した結果については丹羽別稿を参照していただきたいが、全体的に、宗教系大学の理念は一部の学生には受け入れられるどころか拒否されているように読める。

宗教系大学の建学の精神に関する研究は多々あるため、個別具体的な言及は控える。ここでは、当該研究には建学の精神を称揚し、それを如何に具現化していくかという議論に対する慎重論者もいることのみ確認しておきたい。宗教系大学における建学の精神を過度に強調することは「学生や未信徒の教職員には『押し売り』になってしまうのではないか」[中島 2019: 4]という危惧が、慎重論者の見解である。

本調査において宗教系大学で「現在、信仰をもっている」のは13.2%と少数派である。宗教系大学の関心層(50.5%)を加えれば2/3弱と多数派に転じるものの、回答者の信仰や関心の対象が、所属する大学の宗教と合致しているとは限らない。先述した井上調査のように、学生の大多数は宗教に関する信仰や関心とは無関係に大学を選択すると考えるのが自然であろう。しかしそうした学生の実態に反して、昨今の大学には特色が求められ、宗教系大学では母体となる宗教が確固とした特色となっている。本調査において「嫌な体験がある」と答えたり宗教を積極的に否定したりした学生は、まさにこうした「押し売り」に嫌気が差しているのかも知れない。それぞれの大学にはそれぞれの理念があり、またそれに沿ったカリキュラムがあるだろうが、教育の結果として宗教への忌避感が植え付けられては元も子もないだろう。

本調査分析からは、宗教系大学の学生は非宗教系大学に比して宗教を身近とも必要とも思っておらず、むしろ不必要とする意見が多いこと、そして「嫌な体験」をした回答者が有意に多かったという定量的な結果しか分か

らない。だが、各大学では授業評価アンケートのほか、様々なFD活動が行われているはずである。本調査分析が各大学の特色の見直し、ならびに学生の意見を汲み取る一視角となれば幸いである。

2-3 宗教系大学とイスラームとの関わり

前項冒頭で述べたように、宗教系／非宗教系大学と「宗教への関心」は独立している。しかし宗教一般の話ではなく「イスラーム教への関心」(IV-3)に限ると、非宗教系大学に比して宗教系大学は関心が有意に低くなる傾向が認められる(表4)。

表4 「最近のあなたのイスラーム教への関心は次のうちどれですか。」と宗教系／非宗教系大学のクロス表(実数(調整済み残差))

	宗教系 (704名)	非宗教系 (874名)
大変高い	41**(-2.769)	84**(2.769)
やや高い	148**(-4.273)	267**(4.273)
あまり高くない	286*(2.527)	301*(-2.527)
ほとんどない	229*(3.115)	222**(-3.115)

イスラームとの関係で検出される有意差は関心の有無のみに留まらない。上記に続く設問「あなたのイスラーム教徒(ムスリム)との関わりで、次のうちあてはまるものがあったら選んでください。」(複数回答)では、「日本にイスラーム教徒の友人がいる」と「外国にイスラーム教徒の友人がいる」が1%有意水準で非宗教系大学の方が多い傾向が認められた。そして同設問において、宗教系大学は「あてはまるものはない」が1%有意水準で多い傾向が認められた。以上をまとめると、宗教系大学の学生はイスラームへの関心が低く、またムスリムとの交流も少ない。

宗教系大学においてムスリムとの交流が少なくなるのは、自宗教にこだわりを持つ宗教系大学ならば自然な傾向であるのかも知れない。周知の通り日本国内にイスラーム立の大学は存在しない。そしてムスリムの立場からすれば、日本への留学時にあえて他宗教立の大学を選択する動機は薄いと思われる。

ムスリム留学生の留学動機は分からないが、留学の際に、ムスリムに向けたインフラの整備がなされているかどうか重要であることに異論を挟む者はいないであろう。日本では2010年代に訪日外国人の増加を受け、空港等の公共性の高い施設に祈祷室が設けられたり、学生食堂でハラールフードを提供したりする大学が増加した。しかしそうした施策は国公立大を中心としており、2019年度大学生協調べの「ハラールフードを大学生協でご提供している食堂」によると、そこに掲載されている42校のうち宗教系大学は同志社大学と関西学院大学の2校のみである⁴——そして残念ながら、本調査では上記2校からアンケートを取っていない。

祈祷室については上智大学、立教大学、関西学院大学等、キリスト教系大学での設置が目立つ⁵。上智大学が2013年に設置した祈祷室(祈りの部屋)を紹介するWebページの記述が示唆深いため、一部を引用しよう。「本

⁴ 上智大学、東京国際大学、立教大学にも東京法人日本イスラーム文化センターからハラール認証を取得し、ハラールフードを提供する「東京ハラールデリ&カフェ」が開設されている。ただし運営会社がASlink株式会社であるため、生協のリストからは外れている。全国大学生生活協同組合連合会「ハラールメニューの提供について」(<https://www.univcoop.or.jp/service/food/halal.html>, 2021年12月7日最終閲覧)。

⁵ 國學院大學も2019年3月に祈祷室を設置している。

学はキリスト教カトリック系の大学でありながら、イスラーム研究センターを擁するなどイスラーム研究拠点でもある」こと、そして「多様性を尊重したキャンパス環境の更なる充実を目指している」と書かれている⁶。

大学は教育機関であると同時に研究機関でもあるため、そこに附置されている研究センターが学内施設の設置に影響力を持つことは想像に難くない。また、上智大学のようなイスラーム専門の研究センターを擁しておらずとも、たとえば文部科学省による「スーパーグローバル大学創生支援事業」採択校であれば、留学生の獲得ならびに留学生向け施設の設置に積極的になることが考えられる。

まず、同事業中間評価の総括書によると、外国人留学生数は2013年度から2019年度で約1.7倍に増えている。そして、高評価であった東北大学等に与えられた評価内容は「国際共修環境の整備により、多様かつ高度な国際的教育研究の取組が着実に実施されている」であるから、留学生に向けた環境整備の重要性が看取できよう〔スーパーグローバル大学創生支援プログラム委員会 2021: 1〕。

東北大学では2018年度時点での留学生2,017名のうち、「ムスリム人口の多い国であるインドネシア、マレーシア、バングラデシュ、トルコ、エジプト、パキスタン等からのムスリム留学生数を見ると、18ヶ国275人」と、約14%を占めている〔Randani 2020: 102〕。同事業趣旨には「国際化」や「グローバル対応力育成のための体制強化」といった文言が踊る。それらを天下りの受け入れるならば、イスラーム圏からの留学生獲得は重要課題であろう。

同事業採択校37校の内訳は国立大21校、公立大2校、私立大14校で、うち宗教系大学は国際基督教大学、上智大学、立教大学、関西学院大学、創価大学の5校である。宗教系大学ではキリスト教主義が目立ち、かつ神道系・仏教系大学が入っていないことが分かる。ここまでの議論から、神道系・仏教系大学は政府の支援に基づくムスリム留学生の獲得がやや困難であることが理解されるだろう。

本項では宗教系大学においてイスラームへの無関心や関わりの薄さが傾向として見受けられること、そしてムスリム留学生の心情や大学のインフラ等から、宗教系大学はムスリム留学生にとっていささか魅力に欠けるのではないかという指摘を行ってきた。それらに直結させるのは短絡的であるが、「モスク（イスラーム寺院）が近所にできることになったとするとあなたは不安を感じますか。」という設問において、宗教系大学の学生がモスク建設に対してネガティブな印象を抱いている傾向が認められる（表5）。

表5 「モスク（イスラーム寺院）が近所にできることになったとするとあなたは不安を感じますか。」と宗教系／非宗教系大学のクロス表（実数（調整済み残差））

	宗教系 (697名)	非宗教系 (868名)
不安は感じない	349**(-4.030)	523* (4.030)
少し不安を感じる	267* (2.107)	288* (-2.107)
かなり不安を感じる	81** (3.505)	57**(-3.505)
		n = 1,565

各選択肢における割合を見れば、宗教系／非宗教系大学ともに「不安を感じない」を選択した学生が過半数を占める。ただし両者を比較すると、宗教系大学の学生は1%有意水準で「かなり不安を感じる」、5%有意水準で「少し不安を感じる」傾向があり、非宗教系大学の学生は1%有意水準で「不安を感じない」とする傾向が認められた。

先述の通り「日本／外国にイスラーム教徒の友人がいる」傾向は非宗教系大学で有意に高いことが認められ、そのネットワーク故に、モスク建設への忌避感が薄いことは考えられる。ただ同時に、宗教系大学の学生はムスリ

⁶ 上智大学「キャンパスライフ祈りの部屋」(https://www.sophia.ac.jp/jpn/studentlife/support/inori.html, 2022年3月8日最終閲覧)。ただし、立教大学および関西学院大学の祈祷室とは異なり、上智大学にウドゥのための洗い場は室内にない。

ムへの関心および交流が有意に薄く、91%の学生が選択肢の中に「あてはまるものはない」と回答している。かようにムスリムへの興味も関わりもほとんどないにもかかわらず、宗教系大学では49.9%の学生がモスク建設に「少し／かなり不安を感じる」と答えている——非宗教系大学の場合、ムスリムとの関わりにて「あてはまるものはない」の回答が83.3%、「少し／かなり不安を感じる」の計が39.8%である。

宗教系／非宗教系大学どちらであれ、イスラームを悪し様に扱う教育を施しているとは考えにくい。そのためモスク建設に対するネガティブ感情がどこから生じているのか、他の宗教施設であればどのような結果になるのかなど疑問は尽きない。ただ、それらに答える用意は本調査にない。宗教系大学の学生の方が有意にモスク建設に対して不安を感じているという傾向を示すのみである。

そのため有効な分析であるかは疑問が残るものの、ここでは未知ないし無知がイスラモフォビアを呼び起こしているというイスラーム教育の常套句に乗せて考察を締めたい。

欧米諸国に比して日本にはムスリム人口が少なく、ムスリムとの直接的な関わりが少ないのは本調査IV-3の通りである。よって、移民問題等に起因するイスラモフォビアは除外しても良いだろう。また、本調査の対象となった学生のほとんどが2001年のアメリカ同時多発テロの頃を生を受け、物心ついた頃にはISILの起こした諸事件を報道で目にしていたと思われる。しかし、それらメディアの影響は、本調査において宗教系／非宗教系大学で有意差が認められたことの説明にはならない。

改めて確認するが、本節で主題としているのは宗教系／非宗教系大学の別によって生じる学生宗教意識の差異である。そして実際にイスラームに関する関心や意見で有意差が確認できた以上、宗教系／非宗教系大学におけるイスラーム教育に何らかの差異があると考えらるべきであろう。こうした本節の考察を踏まえて提起されるのが、宗教系大学におけるイスラーム教育の不十分さではなからうか。

宗教系大学では宗教的行事も宗教的必修科目も周到に用意されている。しかし当然ながら、それは自大学の宗教を中心としたものであってイスラーム教育の入り込む余地が少ない。セム系一神教に連なるキリスト教主義の大学であれば宗教史においてイスラームとの関わりを学ぶこともあるだろうが、神道史や仏教史にイスラームが登場する機会はほぼないだろう。そして1年次には宗教に関心があった宗教系大学の学生は学年が上がると宗教への関心を失い、逆に非宗教系大学の学生は宗教への関心を強める傾向が認められた。建学の精神を具現化することや自宗教の崇高さを学生に伝え導くことは決して否定されるものではないが、自宗教中心主義にこだわるあまりに学生が興味を失ったり、あまつさえ宗教を不要と考えるようになっていたりしたら本末転倒であろう。

本生意識調査では、総じて非宗教系大学の学生の方が宗教への関心や肯定感があるように思われた。異文化理解や多文化共生が大学教育で掲げられるようになって久しいが、こと宗教においては、イスラームについての教育がその象徴的な位置付けにあるだろう。学生が宗教立であることを理由に大学を選んでいるのではないことを前提とするなら、非宗教系大学の方が社会のニーズに合ったカリキュラムを提供していると言えるのかも知れない。

3. 男女別の宗教の位置付けと宗教意識

3-1 身の回りの宗教についての意識・関心にみる男女差

前掲の調査報告書では一部項目の男女別の単純集計と検定結果は示されていない。これは第12回調査までの報告書との連続性を保つためであったが、本節では既刊報告書にはないものの重要だと思われる箇所の大学生男女の別による検定結果報告を行っていきたい。なお以下で用いる「男性」「女性」の語はそれぞれ「大学生の男性」「大学生の女性」であり、全世代にまたがるものではない。

『学生宗教意識調査総合分析（1995年度～2015年度）』所収の「学生の宗教意識は20年間でどう変わったか—グローバル化と情報化が進行する時代に観察されたこと—」によると、「宗教への関心」については、2000年代に入り宗教への関心を示す非宗教系大学の女性の増加が見られるものの、宗教への関心に男女でさほど大きな差は見られなかったとされる [井上 2018:4]。

2020年度調査ではどうだろうか。下記に再掲するように、「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1)の選択肢2「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」には、男女と宗教系/非宗教系大学に有意差は認められない。指摘されていた非宗教大学の女性についても検定したが、本調査では有意差はみられなかった ($p = .056$)。これには調査時期の影響があるかもしれない。過年度調査は授業が始まって間もない4~5月に実施していたのに対し、宗教の社会・文化的側面や機能を学ぶ授業がある程度進んだ後に本調査は行われている。選択肢4「信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない」も、これまでの調査では約2割前後を推移しているのに対し [ibid.:5] 本調査では約1割だったという結果も、同様の理由があると思われる。

一方で、回答者の宗教的背景を受ける選択肢1「現在、信仰をもっている」に授業の効果による影響は薄い。1%水準の有意差で男性の方が自覚的な信仰を有している傾向が認められる。

「あなたは宗教にどの程度関心がありますか」男女別、及び宗教系・非宗教系の別による比較 [再掲]

	男性	女性	宗教系	非宗教系
1.現在、信仰をもっている	95** (15.9)	78** (7.7)	92 (13.2)	79 (9.0)
2.信仰はもっていないが、宗教に関心がある	297 (49.8)	534 (52.9)	353 (50.5)	463 (52.9)
3.信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない	135 (22.7)	267 (26.4)	169 (24.2)	220 (25.1)
4.信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない	52 (8.7)	104 (10.3)	69 (9.9)	85 (9.7)
5.回答なし	17* (2.9)	27* (2.7)	16 (2.3)	28 (3.2)

とはいえ、この結果をもって男子学生は自覚的な信仰を有していると単純には言えない。宗教系大学を神道・仏教・キリスト教系にわけたうえで男女差を確認しようとしたものが、以下の表6である。

表6 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか」と大学別・男女別による比較 (実数 (調整済み残差))

	神道・男 神道・女	仏教・男 仏教・女	キリスト教・男 キリスト教・女	非宗教・男 非宗教・女
1.信仰あり	30** (7.323) 21** (3.943)	25 (1.320) 7** (-2.632)	2 (-.279) 7** (-2.828)	38 (1.167) 40** (-3.729)
2.関心あり	45 (.119) 55* (1.963)	83 (-1.675) 88 (1.608)	14 (1.128) 64** (-3.205)	148 (-.652) 307 (1.404)
3.あまり関心なし	9** (-3.160) 6** (-4.056)	51 (1.133) 42 (.864)	3 (-1.217) 56** (3.112)	68 (-.791) 150 (1.143)
4.まったく関心なし	1** (-2.767) 7 (-.625)	16 (-.451) 13 (-.534)	3 (.614) 27** (3.157)	32 (.667) 53 (-.447)
5.回答なし	1 (-.959) 0 (-1.658)	6 (.419) 2 (-1.185)	0 (-.806) 7 (1.223)	10 (.633) 18 (.612)

n = 1,555

男子学生の「現在、信仰をもっている」を押し上げているのは、神道系大学の男子学生である。女子学生をみても、神道系大学では信仰を有している傾向が高い。また特徴的なのはキリスト教系大学の女子学生であり、「信仰あり」「宗教に関心あり」が低く、「あまり関心なし」「まったく関心なし」が高い傾向にある。また全体的にいえることだが、非宗教系大学と仏教系大学は似通っている傾向を示している。宗教系大学の別による傾向については、別稿で詳細を論じていく。

同じ「II. 身の回りの宗教についての意識・関心」から興味深い結果も紹介したい。表7は「所有している宗教的なもの(複数回答)」(II-7-④)の男女別実数と割合である。「お守り」「数珠」「パワーストーン」は1%有意水準で女性が所有する傾向が認められるが、「御朱印帳」「十字架」には有意差は確認できない。女性を主体として「御朱印女子」「御朱印ガール」と称される流行がメディアに取り上げられる向きが散見されるが、本調査では、御朱印帳の所有は女性に偏ったものとは言えない。服飾品や装飾品にジェンダー差が垣間見えることはあるだろう。しかし御朱印帳に女性を紐付けることは、女性、引いてはそのパートナーも含めて寺社巡りへと誘おうとする商業戦略としての意味合いが含まれているように思われる。

表7 「所有している宗教的なもの(複数回答)」の男女別による比較(実数(調整済み残差))

	男性	女性
1.お守り	458**(-4.615)	869**(4.615)
2.御朱印帳	89	175
3.数珠	137*(-2.212)	283*(2.212)
4.十字架	18	47
5.パワーストーン	547**(-5.086)	833**(5.086)
		n = 1,396

有意差が認められなかった「御朱印帳」($p = .236$)「十字架」($p = .031$)については残差分析を行っていない。

3-2 宗教に関わる事柄への意見への男女差

「宗教に関する意見」(IV-1)と「宗教と教育に関する考え」(IV-2)には興味深い結果がみられた。以下は男女差が確認された項目である。

宗教は必要だと学生は感じているのかどうかを調べるために設けられたのが、「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ。」(IV-1-①)と「宗教を信じると心のよりどころができる。」(IV-1-⑥)であった。前掲調査報告書にあるように、「宗教と科学」について1%有意水準で、「心のよりどころ」は5%有意水準で、宗教系大学の学生は「そう思わない」を支持する傾向がみられる。

男女別ではどうだろうか。「心のよりどころ」は宗教系/非宗教系と異なり有意差が認められなかったが($p = .446$)、「宗教と科学」は「とてもそう思う」について男性は1%有意水準で支持し、「どちらかといえばそう思わない」について5%有意水準で女性が支持する傾向が確認できる(表8)。

文章として「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ。」は一般的・客観的なニュアンスがあるが、「宗教を信じると心のよりどころができる」はより個人的・内面的なことを尋ねているような印象を受ける。12回調査までは「どんな科学が発達しても、宗教は人間に必要だ。」への肯定的回答(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合算)が5割前後であったのに対し、本調査は全体で77.2%が肯定的な態度を示している。全体的に

肯定的評価が伸びたのは、回答者が授業で宗教の社会的機能や文化的側面を学んでいる最中であった影響もあるだろう。とはいえ2020年度調査において、男性は宗教の社会的・文化的役割に対してより肯定的となり、女性は否定的な傾向が認められたことは指摘しておきたい。回答者は質問文にある「宗教」について制度宗教を想定しているのか、スピリチュアリティや精神文化などを含む幅広い概念を想定しているのか、アンケート調査の限界としてその内実を判定することはできない。とはいえ、大学生の宗教に関する態度・意見に現れたジェンダー差について、今後より検討していくことは必要な作業だろう。

表8 「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要なだ。」の男女別クロス表（実数（調整済み残差））

	男性	女性
1.そう思う	220* (3.343)	292**(-3.343)
2.どちらかといえばそう思う	261(-.998)	469(.998)
3.どちらかといえばそう思わない	73* (-2.463)	170* (2.463)
4.そう思わない	44(-.659)	84(.659)
		n = 1,613

宗教に関連する社会的問題への意見も確認しよう。ここでは「特定の宗教集団が特定の政党を支持するのはよくない」(IV-1-④)と「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ」(IV-1-⑤)で有意差が認められた。

表9 「特定の宗教集団が特定の政党を支持するのはよくない。」の男女別クロス表（実数（調整済み残差））

	男性	女性
1.そう思う	275(-1.552)	505(1.552)
2.どちらかといえばそう思う	170* (-2.056)	337* (2.056)
3.どちらかといえばそう思わない	101* (2.283)	129* (-2.283)
4.そう思わない	50** (4.134)	36** (-4.134)
		n = 1,603

表10 「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ」の男女別クロス表（実数（調整済み残差））

	男性	女性
1.そう思う	142*(2.327)	191*(-2.327)
2.どちらかといえばそう思う	204**(-4.216)	453** (4.216)
3.どちらかといえばそう思わない	180 (.312)	297 (-.312)
4.そう思わない	70** (3.530)	67** (-3.530)
		n = 1,604

表9から、女性は5%有意水準で「そう思わない」を支持する傾向が認められる。他方、男性は5%有意水準で「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を支持する傾向があった。総じて、女性は宗教教団の政党支持に否定的であるといえる。

街頭での布教規制は4件法では回答がばらけた（表10）。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を+とし

て丸め、同様に「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」を一として丸めた二値で改めて検定したものが表11である。

ここからは女性の方が街頭布教を規制すべきと考える傾向があることが確認できる。表9でも、女性は宗教の政治への関与に否定的な傾向があること示されたことと鑑みると、女性は公共から宗教を排除せよとする立場を採る傾向があることが指摘できる。

サブカルチャー的なものへの意見については、本調査ではパワースポットに関する質問を設けている。表12の通り、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」について5%有意水準で女性が多く、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」について1%有意水準で男性が多い傾向がみられる。女性はパワースポットに肯定的であり、男性は否定的である。これは大方の予想通りの結果だろう。

続いて「宗教と教育に関する考え」(IV-2)も確認したい。前掲報告書にもあるように、愛国心を深める教育(IV-2-②)についてのみ1%有意水準で宗教系大学が肯定的回答を支持する傾向が確認できたが、他の設問には有意差はみられない。男女別では、「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」(IV-2-②)、「道徳の授業をもっと充実させた方がいい。」(IV-2-③)、「寺院や神社など、日本の伝統的宗教施設を見学する機会を設けた方がいい。」(IV-2-⑤)にそれぞれ有意差が確認できた。以下はその結果である。

表13のように、愛国心教育の是非について男性は1%有意水準で「そう思う」を、女性は同じく1%有意水準で「どちらかといえばそう思わない」を支持する傾向がみられた。男性の方が愛国心を深める教育に肯定的態度を示し、女性是否定的態度をとる傾向が確認できる。道徳の授業の拡充(IV-2-③)については、男性が「充実させた方がいい」に1%有意水準で「そう思う」と支持する傾向がみられる。愛国心教育ほどではないが、ここでも男性はより肯定的、女性是否定的傾向が見て取れる。

伝統的宗教施設の見学(IV-2-⑤)については肯定的意見が大半を占めるが、男性はより積極的に肯定している。

表11 「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ」を+/-で検定した男女別クロス表(実数(調整済み残差))

	男性	女性
+	346* (-2.323)	644* (2.323)
-	250* (2.323)	364* (-2.323)
n = 1,604		

表12 「パワースポットを訪れると、パワーをもらうことができる」の男女別クロス表(実数(調整済み残差))

	男性	女性
1.そう思う	92* (-2.494)	206* (2.494)
2.どちらかといえばそう思う	245* (-2.275)	473* (2.275)
3.どちらかといえばそう思わない	152** (2.640)	200** (-2.640)
4.そう思わない	108** (2.838)	130** (-2.838)
n = 1,606		

表13 「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」の男女別クロス表(実数(調整済み残差))

	男性	女性
1.そう思う	108** (6.052)	81** (-6.052)
2.どちらかといえばそう思う	174 (.691)	278 (-.691)
3.どちらかといえばそう思わない	189** (-4.206)	426** (4.206)
4.そう思わない	124 (-.530)	221 (.530)
n = 1,601		

表14 「道徳の授業をもっと充実させた方がいい。」の男女別クロス表(実数(調整済み残差))

	男性	女性
1.そう思う	209** (2.942)	282** (-2.942)
2.どちらかといえばそう思う	201 (-1.481)	376 (1.481)
3.どちらかといえばそう思わない	125 (-1.068)	234 (1.068)
4.そう思わない	62 (-.639)	115 (.639)
n = 1,604		

ただし、社会科の地域訪問としてなのか、宗教心に基づく——あるいはそれを養成させることを目的とした——ものを肯定しているのか、回答者が質問文をどのように読み取ったのかは分からない。また、「日本の伝統的宗教施設を見学する」ことの是非を尋ねるにあたって、日本の「伝統的施設」と「宗教施設」のどちらに重きが置かれているのかという疑問が残る。そこで愛国心教育（IV-2-②）とクロスしてみると、愛国心教育に肯定的な者ほど「そう思う」を強く支持する傾向がみられた（表16）。一般的に、「愛国」と接続されるのは「宗教」よりも「伝統」であろう。ならば回答者が支持しているのは「宗教施設」ではなく「伝統的施設」ではないかという推測が成り立つ。ただし、「愛国心」ならびに「伝統」「宗教」という概念は複雑に絡み合い、「寺院や神社など」という文言を含めれば半ば不可分とも言える。だからこそ分析には慎重を期すべきであり、本稿では上記を示唆するに留める。

表15 「寺院や神社など、日本の伝統的宗教施設を見学する機会を設けた方がいい。」の男女別クロス表（実数（調整済み残差））

	男性	女性
1.そう思う	234** (3.459)	312** (-3.459)
2.どちらかといえばそう思う	217** (-3.158)	450** (3.158)
3.どちらかといえばそう思わない	107(-.306)	188(.306)
4.そう思わない	37(.149)	61(-.149)
		n = 1,606

表16 「愛国心」と「日本の伝統的宗教施設を見学する機会」のクロス表（実数（調整済み残差））

		日本の伝統的宗教施設を見学			
		++	+	-	--
愛 国 心	++	132** (10.854)	43** (-5.663)	12** (-4.686)	5* (-2.192)
	+	186** (3.734)	206* (2.086)	53** (-4.473)	9** (-4.380)
	-	144** (-7.168)	305** (5.092)	158** (5.606)	13** (-5.377)
	--	87** (-4.128)	114** (-3.864)	78 (1.938)	73** (12.823)
					n = 1,618

3-3 即位関連行事における男女別の傾向

天皇を男性に限るとすることや女性・女系天皇の是非については前掲調査報告書でも男女別検定を行った。ここでは2019年の新天皇の即位行事に関する質問への検定結果を示す。なおこの設問は宗教系大学別に異なる傾向が示されていたことから、その検定も行っている。

表17 「即位に関連する諸行事に実際に出掛けましたか。」の男女別クロス表（実数（調整済み残差））

	男性	女性
1.はい	47** (3.876)	35** (-3.876)
2.いいえ	530** (-3.810)	950** (3.810)
3.回答なし	21 (1.082)	26 (-1.082)
		n = 1,611

「即位に関連する諸行事に実際に出掛けましたか」(VI-1-1)については1%有意水準で男性は「はい」が多く、女性は同じく1%有意水準で「いいえ」とする傾向がある(表17)。別稿の議論の先取りになるが、神道系大学の学生は22.9%が即位に関連する諸行事に出掛けたと回答している。仏教系大学は4.1%、キリスト教系大学はわずか0.5%に過ぎず、神道系大学が突出している。これは大学の特色を強く反映させている結果であることは容易に想像できる。

「即位に関する諸行事をテレビやネットでみましたか」(VI-1-2)は宗教系と非宗教系に有意差はみられなかったが($p=.444$)、男女も同様であった($p=.270$)。なお、宗教系大学の別にも有意差は確認されない($p=.297$)。新天皇の即位に関する諸行事は各局で中継され、即位を祝した休日となっていたことも重なり、家でテレビを見ていた人の多くが視聴していたためだと思われる。NHKが放映した即位礼の平均視聴率は31.9%、即位パレード中継は27.2%であった。ともに高視聴率を誇っていることから、男女や大学の別を超えた国民的な関心事であったとすることができよう。

また、平成期に生まれた多くの大学生世代にとって「大嘗祭」という言葉は、天皇の代替わりが行われることになるまで聞いたことがなかったものだろう。この「大嘗祭」の認知度を尋ねた設問(VI-1-3)では、知っているとの回答を男性は1%有意水準で選ぶ傾向があり、同じく5%有意水準で女性は知らないとする傾向が認められる(表18)。

表18 「大嘗祭という言葉を知っていますか。」の男女別クロス表(実数(調整済み残差))

	男性	女性
1.はい	431** (2.735)	664** (-2.735)
2.いいえ	156** (-2.934)	335** (2.934)
3.回答なし	10 (.637)	13 (-.637)
n = 1,609		

以上の結果から、次のことが指摘できよう。天皇代替わりに際し、即位関連行事をテレビ等で視聴することには大学生男女、また所属大学の別に有意差は認められない。一方で、テレビやインターネット視聴以上の能動的態度が求められる即位に関する諸行事に実際に出掛けたかどうかについては、男性はより積極的な態度をとっていた傾向が認められる。また「大嘗祭」の認知からも、男性のほうがより強い関心を示していたことが指摘できる。

2019年10月の即位礼正殿の儀を前に行われたNHKによる「皇室に関する意識調査」によると、皇室への関心は男性が67%、女性は76%で、女性でより関心が高い。年齢別にみると「大いに関心がある」「多少は関心がある」が7割を超えるのは40歳以上の年齢層になり、世代が上がるほど関心は高くなり、若いほど低くなる。18~29歳では、「大いに関心がある」は9%、「多少は関心がある」40%で、あわせても5割に届かない。「全く関心がない」は他の世代が5%前後であるのに対し、この世代は25%と突出して高い[荒牧2020: 23] 皇室への関心は男性より女性が高く、年齢が上がるほど関心層の比率は高くなり、若者ほど低い。

本調査の回答者は2020年度に宗教学関連の授業を受けていた大学生である。そのため同世代の者たちより、天皇代替わりやそれに関連する諸儀礼について、授業で説明を受け、関心を持っていた可能性は高いだろう。皇室への関心を計量的に判定するには、各世論調査と調査方法や質問項目が異なるので単純な比較はできない。とはいえ、男子学生はより天皇代替わりについて積極的な反応を示していたことは指摘しておきたい。

さて、最後に本調査から得られた知見も踏まえ、男女の学生宗教意識について次回調査への提言をしてみたい。詳細は今井論文で論じられるが、男性は両親——もしくは親類縁者や菩提寺の住職など——から親の宗教に関する話を聞いている傾向がみられるものの、女性はそうではない傾向が確認できる。また、「父の信仰」の有無は子への影響があることが確認できるが、「母の信仰」の有無には有意差がみられなかった($p=.375$)。新宗教研究などでは家庭内の宗教環境と次世代育成において母親の影響は強いと通説的に捉えられてきたが、「信仰をもっている」の回答者の多数が伝統宗教である本調査では異なる結果が得られた。

この点について、「家の宗教」の継承にかかわる意識を尋ねる設問を新設してはどうだろうか。本調査でも「I

-4]で「家の宗教」を尋ねる設問を設けているが、NA/DKを抜くと男性73.7%、女性65.4%が複数回答で何かしらの家の宗教があると回答している。ここにも明瞭な男女差が現れている。

「家の宗教」が次世代に継承されていくかどうかは、これからの宗教文化の行方を左右するものだろう。「家の宗教」が継承されていく局面として、法事法要や墓参りがある。本調査では、墓参りについての設問が設けられている(II-7-②)。詳細をみると、女性は1%有意水準で「家族で行った」と回答する傾向があり、男性は5%有意水準で「自分だけで行った」と回答している(表19)。

表19 「あなたの家族は去年のお盆の墓参りはどうしましたか。」の男女別クロス表(実数(調整済み残差))

	男性		女性	
1.家族で行った	268**	(-3.256)	543**	(3.256)
2.家族とは別に自分だけで行った	101*	(2.428)	128*	(-2.428)
3.行った家族もいるが自分はいかなかった	63	(-.149)	110	(.149)
4.家族の誰も行かなかった	120	(1.019)	184	(-1.019)
5.その他	43	(1.824)	51	(-1.824)

n = 1,611

墓前で手を合わせたとしても、祖先の見守りに感謝する者もいれば、墓参りを家族イベントのように捉える者もあり、向き合い方はそれぞれだろう。とはいえ、墓参りは祖先から連なる自分の系譜を感じさせる機会であることは間違いない。墓参りをしながら、親は大学生世代の子に何かを伝えているのだろうか。大学生は墓前で何を感じているのだろうか。

さて、表19からは何が読み取れるだろうか。娘は家族行事への参加率が高いということだろうか。息子は自分一人でも墓参りをしている傾向が認められる意味はなんだろうか。本調査からは大学生世代の墓参り実修率は高い水準にあることは示されるが、それ以上のことを指摘するのは難しい。総じて男性は宗教に対して積極的・肯定的傾向が、女性は消極的・否定的傾向が確認されたが、回答者は実家の墓が何教に基づくものであるかを認識しているのであろうか、仏教であるならば菩提寺/檀那寺への挨拶経験はあるだろうか、その男女別回答が気になるところである。

4. おわりに

本稿では単純集計表にて確認された宗教系/非宗教系大学による宗教意識の別、ならびに男女差について、注目すべきと思しき結果について分析を加えてきた。その作業を通じて得られた知見をまとめて結びとしたい。

まず、宗教系/非宗教系大学の別による「宗教への関心」(II-1)に有意差は認められなかった。そして学年とクロスすると、宗教系大学では低い学年で、非宗教系大学では高い学年で有意に関心が高まる傾向が確認された。低い学年で宗教への関心が高いことは、宗教系大学の初年次教育にて行われる宗教的必修科目の成果が認められるとポジティブに捉えることも可能であろう。しかし、自宗教の教義に基づく建学の精神が大学生活を通じて学生に内面化されていないとも言える。宗教への関心が一過性であることは、宗教系大学にとって本意ではないだろう。また、「宗教に関する意見」(IV-1)では全体的に宗教系大学にてネガティブな傾向が認められる。そのため本調査結果を見る限り、宗教系大学で宗教情操の涵養が達成されているとは言い難い状況が看取された。

昨今の大学教育において、宗教は宗教学に特化した領域のみならず、異文化理解や多文化共生を扱う諸領域に

おいても取り上げられる機会が多いだろう。そして多くの日本人にとって馴染みが薄く、しかし世界的なプレゼンスを増しているイスラームは異文化理解に際して格好のテーマである。そこで本稿でも「イスラーム教への関心」(IV-3)に係る諸設問に着目した。その結果、非宗教系大学に比して宗教系大学はイスラームへの関心が有意に低く、モスク建設等への忌避感が強くなる傾向が認められた。宗教系大学が自宗教中心主義になることは当然かも知れないが、だからと言って他宗教への排他性を含む教育を施しているとは考え難い。本調査結果における「日本/外国にイスラーム教徒の友人がいる」傾向が宗教系大学で有意に低いことを傍証とし、宗教系大学にはムスリム留学生が少なく、イスラーム文化に触れる機会が限られると考えるのが妥当であろう。宗教系大学では政府支援を用いたムスリム・フレンドリー対応が立ち遅れ気味であるし、それを抜きにしても、ムスリムが留学先に宗教系大学を選択する動機は薄いと思われる。

「開かれた大学」という言葉を用いると文部科学省が推進する生涯学習支援や地域貢献が思い浮かぶが、より広い意味で、国際的ないし多文化的に開かれた大学でこそ学生の異文化理解が進むはずである。宗教系大学が「開く」ことのメリットとデメリットは慎重に判断すべき問題であるとしても、保守的に過ぎては近年の社会的ニーズに応じきれないであろう。大学のブランディングに際して、本調査では宗教立の矜持が試される分析結果が得られたように思う。

また本稿では、既刊調査報告書にはなかった項目の男女別宗教意識を示してきた。総じて男性は宗教に関する事柄に肯定的・積極的な傾向が確認できる。対して女性は、否定的・消極的な回答を支持する傾向があった。では、スピリチュアリティについてはどうだろうか。「スピリチュアルな」という表現に対する印象(III-6)は、「よく分からない」のみ5%有意水準で男性が多い傾向が認められるが、その他の設問で男女差は確認できない。確かに「パワーストーン」は女性が所有する傾向が確認できるが(II-7-④)、一般的に言われるような「若い女性はスピリチュアリティが好き」といった言説を裏付けるほどの結果は本調査から得られたとは言い難い。むしろ確認されるのは、大学生女性の宗教に対するネガティブな反応である。

「宗教に関わる意見」(IV-1)と「宗教と教育に関する考え」(IV-2)でも、女性は宗教が公に関わることに否定的な傾向が確認できる。この点についても、大学生男女の政治意識に関する他の調査などを参照しつつ、その背景と意味を考えていく必要があるだろう。天皇代替わりについても同じく、男性の態度に積極的傾向が確認できた。

なお本節では触れていないが、オウム真理教に関する知識を複数選択で尋ねる設問(VII)でも、多くの選択肢で男性は1%有意水準で「知っている」と答える傾向があることが認められる。特に「布教のために作成されたアニメが現在もネット上に存在する。」については、女性はわずか29.3%の認知度であるのに対し、男性は65.7%と半数以上が「知っている」と回答している。YouTubeをはじめとした動画サイトの男女の利用・視聴傾向は加味しなければならぬが、男性はより積極的・能動的にオウム真理教に関する情報にアクセスしている可能性は指摘できる。

冒頭でも記したように、本調査は過年度調査とは異なる実施方法であったこと、新型コロナウイルス感染拡大による社会不安のなかで行われたことなどから、大学生の宗教意識の経年変化を検討するにあたっては慎重を期さねばならない。本調査で得られた結果は限定的なものといえるかもしれないが、しかし宗教系/非宗教系大学と男女の別による検定分析から導き出せるものを提示することで、2020年度に大学に通う学生の宗教意識や関心の方向性を浮かび上がらせることはできたと思う。宗教系大学の教育が宗教イメージに悪影響を与えている可能性が示唆されること、「スピリチュアル系女子」「御朱印ガール」と称されるブームが本調査からは析出されないこと、大学生の女性は宗教にネガティブな反応を示す傾向が統計学的に有意に高いことなど、いくつかの新たな知見を提示することができた。大学生という特定の世代に着目する本プロジェクトの成果が活用されていくこと、そして今後より検討が重ねられていくことを願い、稿を閉じたい。

引用文献

- 荒牧央 2020 「新時代の皇室観—『皇室に関する意識調査』から—」NHK 報道文化研究所『放送研究と調査 2020 年3月号』:22-29
- 井上順孝 1993 『「宗教教育に関するアンケート」報告書』國學院大學日本文化研究所
- 齋藤崇徳 2014 「日本における宗教系大学の比較分析—制度的変数を中心として—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』53:55-66
- 中島賢介 2019 「キリスト教大学における建学の精神に関する研究」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』12:1-8
- Randani, Andi Holik 2020 「日本のキリスト教系大学の国際化戦略における「イスラーム」」『文化』83(3,4):97-116

浮遊する宗教的関心と宗教的文化資本の継承

—実証研究に基づく理解を目指して—

今井信治¹

1. 本稿の目的と先行研究の整理

本稿は2020年度に行われた『第13回学生宗教意識調査』(以下、「本調査」)について、「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1)ならびに「父の宗教」(II-5)と「母の宗教」(II-6)を主な説明変数とする分析を行う。本調査の単純集計表、ならびに左表に基づく分析は別稿を参照されたい。

本調査には多数の有益なデータが含まれているため、分析者によって多様な分析が可能である。そのためにまず、本稿の理論的背景から分析の目的を示すことが適当であろう。本稿が信仰および宗教への関心の有無を取り上げる背景には、宗教社会学で長らく議論されている宗教の世俗化論に悼さず狙いがある。とりわけホセ・カサノヴァが『近代世界の公共宗教』において世俗化論を「機能分化」、「私事化」、「衰退」の三要素に分節したこと、そして近代社会において認められるのは機能分化説のみであり、私事化説を部分的に退け、衰退説を批判していることを念頭に置いている [カサノヴァ 1994(1997)]。

私事化論の要諦は、機能分化の帰結として宗教が全体社会のなかでサブ・システムとしての役割しか果たさなくなり、政教分離原則や信教の自由のもと、公共領域ではなく私的領域においてのみ営まれるようになるというものである。そしてカサノヴァの私事化論批判は、宗教のすべてが公共領域から撤退するのではなく、とりわけ市民社会レベルにおける運動として、宗教が公共領域にも布置され続けるというものである。そしてカサノヴァが衰退説を批判する論拠は、簡潔にまとめれば、教会出席率の低下といった衰退を示すデータは西ヨーロッパに限定され、他の地域、とりわけ同じキリスト教圏である北米ですら認められないというものである。

かようにカサノヴァはキリスト教圏やイスラーム圏を事例として「脱私事化」を主張し、宗教の世界的な衰退を否定している。日本ではキリスト教やイスラームは根付いておらず、他国に比して市民活動団体の活動が活発であるとも言えない。グローバリゼーションの号令のもとに世界の法・政治・経済が均質化しつつあることは認められても、日本の宗教事情が他国と同様でないことは明らかである。ならば、西欧と宗教圏を異にする日本のデータを基にして世俗化論を再検討することには一定の価値があるだろう。

本調査において「現在、信仰をもっている」(以下、「信仰層」)と回答した学生は10.7%であり、決して高い数字とは言えない。また、各種世論調査では第二次世界大戦後から信仰者が逡減していることが明らかになっている [石井 2007:1-5]。しかし本調査において、「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」(以下、「関心層」)は過半数を超えている (51.9%)。合理化の進展を近代化の中心に据えたマックス・ウェーバーを世俗化論の理論的淵源とするならば、関心層は宗教という「呪術の園」から脱していないと言いうるだろう。これはカサノヴァによる衰退説批判にも繋がる。

信仰層でなければ宗教に参加しているとは言い難いとの反論が予想されるため、本稿の立場を明確にしておきたい。本稿は『学生宗教意識調査』で得られたデータを分析するものである。そしてよく知られるように、社会調査において、教団への帰属と神仏等の超自然的な力を信じる割合は乖離する。先述の通り、本調査における信仰層は1割強であった。ただし、その信仰層には続いて「信仰する宗教」の別を問うている (II-2)。そのため、回答者は「信仰をもっている≡何らかの教団への所属」を尋ねられていると解釈している可能性が高い。しかし、別途「神/仏/霊魂/超自然的な力の存在」(III-1~4)と問うと、回答者全体で「信じる」の割合

¹ 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所共同研究員

はそれぞれ「神 (20.2%)」、「仏 (17.2%)」、「霊魂 (26.0%)」、「超自然的な力 (21.2%)」であった。総じて、信仰層の2倍程度の回答者が、人間を超えた何らかの存在を信じているとまとめることができよう。また、同設問「信じる」に「ありうと思う」を加えると、それぞれ「神 (63.9%)」「仏 (62.1%)」「霊魂 (71.3%)」「超自然的な力 (63.5%)」であった。

日本では西山茂により1970年代以降の第4次新宗教ブームにおいて「霊術系新宗教」の台頭が指摘されるとともに、オカルトブーム等に牽引された「教団嫌いの神秘好き」の増加が論じられた(西山1988)。本調査は教勢調査や宗勢調査ではなく、主に若年層を対象とした宗教意識調査であるため、教団の外にいる宗教関心層にこそ焦点を当てたい。信仰層、あるいは教団への明確な帰属は減少しているかも知れない。しかし上述の通り、依然として宗教関心層は高い割合で存在している。その関心層こそが、宗教教団のみならず現代宗教を取り扱う学問にとって掘り起こされるべき鉱山であると考えられる。

近代化以前のいわゆる伝統的な社会において、信仰生活はその他の価値体系とともに個々人の生活の中に埋め込まれていたと言えよう。アンソニー・ギデンズは、それが近代化によって掘り崩され、固定的な人間関係からの脱埋め込みが進行したと主張する[ギデンズ1990(1993)]。これはジークムント・バウマンが現代社会を「流動的近代」と特徴付けたことにも繋がる[バウマン2000(2011)]。バウマンによれば、現代人は前近代的な帰属先を失い不安定な立場にある。本調査が対象にしている大学生世代であればなおさら、先行きの不安定さに苛まれることもあろう。こうした脱埋め込みにより帰属が流動化したことに加え、現代宗教に関する情報は文化資源として教団組織の手を離れ、個々人の目的に応じて利用可能な形で拡散・浸透しているとジェイムズ・ベックフォードは論じる。現代社会が宗教という「聖なる天蓋」に覆われていると言われて安易に首肯する者は少なからうが、ベックフォードのように、現代社会には自由に利用可能な宗教的シンボルが溢れていると言うならば頷けるだろう[Beckford2001]。本稿では、関心層をこれら宗教的シンボルへのアクセスを望む存在として捉えている。

ギデンズは、脱埋め込み状態を耐え難く感じる人々が再埋め込みを求めるようになる可能性も示唆している。しかし、ひとたび脱した信仰共同体へと帰属すること、あるいは新たに信仰共同体に参入することは簡単ではないだろう。バウマンが「ペグ・コミュニティ」と表現するように、宗教関心層は信仰層とは異なり、浮遊する宗教的シンボルをペグとして自らの関心をそこに引っ掛けることが想定される。かつて「教団嫌いの神秘好き」という言葉で選好の違いが表現されたように、信仰層と関心層とでは宗教的なニーズが異なるだろう。そこで本稿の第一の目的は、信仰層と関心層の差異を調査結果から導き出すことと約言できる。

先述の通り、当然、国ごとの特色に基づいて日本人の宗教性を考察する必要がある。日本人の宗教性というテーマにおいて看過できないのは「イエ」の存在であろう。本稿の第二の目的は、「イエ」概念を敷衍して現代日本宗教に文化的再生産論の適用を試みることである。

2000年に調査が開始されて以降、信仰の有無に加えて「家の宗教」の有無を継続的に尋ねている調査にJGSS調査がある。本調査との比較のために参照したい(表1)。

表1 あなたは、信仰している宗教がありますか。(実数 (%))

ある	ない	特に信仰していないが、家の宗教はある	無回答
60 (6.2)	773 (79.9)	134 (13.8)	1 (0.1)

[JGSS研究センター2017:143]より作表。調査対象は25~49歳の男女(n=968)。

各国に種々の宗教調査はあるが、JGSS調査のように信仰の有無に加えて「イエ」概念を持ち出すものはほとんどなく、また調査者もその意義を強調している[木村2002、2003]。そして上記2016年調査では、13.8%が「特

に信仰していないが、家の宗教はある」と回答している。これは無視できない数字であろう。

そして本『学生宗教意識調査』では第1回の1995年から「家の宗教」について尋ねており(II-4)、JGSS調査よりも手が早い²。設問と調査対象、および調査時期が異なるために単純比較はできないが、2020年実施の本調査において、何らかの「家の宗教」があると答えたのは「その他・不明」「空欄(NA)」を有効回答数から引いた1,083名であり、約66%に上る。JGSS調査では信仰が「ある」と「特に信仰していないが、家の宗教はある」を足しても20%であるから、本調査で何らかの「家の宗教」があると答えた割合は、JGSS調査の3倍以上である。

この乖離についてはどちらかのデータが間違っているというものではなく、調査対象者の年齢に原因を求めるのが妥当であろう。JGSS調査では25~49歳を対象としているのに対して、本調査の調査対象は大学生である。JGSS調査対象者の多くは親元から離れ、かつ墓を含む祭祀の継承が行われていないと思しき年代³であるが、本調査対象の多くは両親の扶養下にあると思われる。そして本調査において「次のうち、あなたの家(一人暮らしの場合などは実家)にあるものすべてを選んで下さい。」(II-7-③)では、複数回答で「神棚」を46.2%、「仏壇」を54.1%が所持している。「イエ」と切り離された生活を営むことが比較的容易なJGSS調査対象者と、両親の扶養下にある本調査とでは、「家の宗教」への認識が異なることは自然であろう。

年代による「イエ」との断絶が両調査の比較から示唆されることは興味深い。本調査はコホート分析を行う設計を備えていない。設計思想の異なる他種の統計との比較は慎重、主要な分析は本調査の枠内で行うべきであろう。そこで本稿では、他の社会調査にはない父母の信仰の有無(II-5およびII-6)を説明変数とし、回答者の宗教意識に及ぼす影響を分析していく。日本における「家の宗教」そのものは男系継承が主だとしても、父母どちらが子の宗教意識に強い影響を与えるのかは必ずしも明らかではない。また、男系継承であるならば当然、女性は継承の枠組から排除されてしまう。こうした諸問題が学生の宗教意識にいかなる影響を与えているのかを明らかにするため、本調査データを活用したい。

先に本稿の第二の目的として「イエ」概念の敷衍を掲げたのは、男性に偏重した分析にせず、より大きく宗教意識の継承という問題を取り扱いたいがためである。それを換言すれば、現代日本宗教における文化的再生産論の適用を検討する試みと言えよう。

現代社会学で資本と目される概念は、ピエール・ブルデューに倣うならば、経済資本のみならず社会関係資本と文化資本も含まれる。櫻井義秀が簡潔にまとめているように、「文化(言葉遣いや趣味、生活様式一般)は、個人を含む家族、民族・階層により所有されているもの」であるために、他の資本に比して獲得が困難である[櫻井2012:35]。とりわけ「身体化された文化資本」の獲得の困難さは、家族ないし家庭が主な文化的再生産の場になっていることに起因している。文化資本は経済資本や社会関係資本以上に家庭内の系譜で育まれる資本であるために、文化的再生産には「イエ」が大きな役割を果たす。ブルデューがとりわけ強調しているものではないが、「イエ」概念が注目される日本において宗教意識の文化的再生産をテーマにすることは蓋然性が認められるだろう。本稿では様々な設問に対して、父母の信仰の有無がどのような影響をもたらしているのかを分析していきたい。

2. 信仰層と関心層における宗教意識の差異

2-1 本節の目的

まずは本稿の2つの目的、つまり(1)信仰層と関心層の特徴、(2)宗教意識を目的変数とした文化的再生産の

² 過年度調査については2017年発行の『学生宗教意識調査総合報告書(1995年度~2015年度)』を参照されたい。

³ 2016年実施のJGSS調査において、両親と同居している割合は父:23.2%、母:28.6%。死別は父:18.7%、母7.7% [JGSS研究センター ibid.:67]。

双方に関わる検定結果を確認することから始めよう。本稿執筆に際する着想を得た内容であり、議論の前提であるため、丁寧に確認したい。

ブルデューは文化資本を3つに分けて論じている。すなわち、(1)「制度化された文化資本」、(2)「客体化された文化資本」、(3)「身体化された文化資本」である。このうち(1)は一般的に学歴や資格について論じられる文化資本である。本調査では親の学歴や資格を問うていないが、万世一系を重んじる天皇制を例に出すまでもなく、親が神職や僧侶といった宗教専門職であれば、子が階位や僧籍を得て後を継ぐケースが多いことは論じるまでもないだろう。各国／各宗教における世襲の様態や、そのメリットやデメリットについては本稿の意図から外れるためにここでは扱わない。

(2)については「家にある宗教的なもの」(II-7-③)と回答者の信仰の有無によって測ることができよう。結果を表2にまとめる。

表2「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1)と「次のうち、あなたの家(一人暮らしの場合などは実家)にあるものすべてを選んでください」(II-7-③)のクロス表(実数(調整済み残差))

	神棚		仏壇		亡くなった近親者の写真		その他宗教的なもの	
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし
1	85** (5.795)	89** (-5.795)	83** (3.926)	91** (-3.926)	73* (1.981)	101* (-1.981)	36** (5.734)	138** (-5.734)
2	259 (7.17)	586 (-7.17)	287 (-3.59)	558 (3.59)	310 (1.337)	535 (-1.337)	81 (9.17)	764 (-9.17)
3	92** (-3.686)	314** (3.686)	123* (-2.002)	283* (2.002)	130 (-1.550)	276 (1.550)	17** (-3.911)	389** (3.911)
4	37 (-1.870)	121 (1.870)	51 (-0.582)	107 (0.582)	44* (-2.036)	114* (2.036)	8 (-1.811)	150 (1.811)
計	473	1,110	544	1,039	557	1,026	142	1,441

※「1= 現在、信仰をもっている」、「2= 信仰はもっていないが、宗教に関心がある」、「3= 信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない」、「4= 信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない」。以下、宗教への関心とクロスするには上記のように略記する。* $p < .05$ 、** $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,583)。

表2の通り、信仰層はすべての項目において有意に、何らかの宗教的なものが実家にある環境で育っていることがわかる。関心層に有意差は認められなかったが、無関心層では幾らかのケースで有意に宗教的なものが実家にはない。

日本の「イエ」概念と「客体化された文化資本」を架橋する際に興味深いのは、信仰層において宗教的なものが実家にあるケースが有意に多いということだけではない。上表の通り、無関心層に比すれば、関心層においても実家に宗教的なものが多いことが仄見える。そして神棚等がある場合、それはただ自宅の片隅に鎮座しているのではなく、親族らが折に触れて手を合わせたりお供え物をしたりという所作を行っていることが想定される。つまり関心層は、自身に自覚的な信仰はなくとも、親族らの宗教的慣習行動を目の当たりにする機会が相対的に高いと言える。

かように(3)「身体化された文化資本」(≡ハビトゥス)が形成／継承されるのだが、本稿の意図を明確にするためにも、『ディスタンクシオン』の訳者・石井洋二郎による用語説明を引用しておきたい。曰く、ハビトゥスは「ある階級・集団に特有の行動・知覚様式を生産する規範システム」として機能し、「各行為者の慣習行動は、否応なくこれによって一定の方向づけを受け規定されながら、生産されていく」ものである[ブルデュー1979a(1990):vi]。

当然ながら、「客体化された文化資本」と「身体化された文化資本」とは密接に関わっている。とりわけ宗教お

いては親族が何らかの宗教的物品を拝む等の慣習行動を取る際、——幼児語の「のんのん」に代表されるように——幼児ですらそれに倣う様子を見て取ることができる。このようにして宗教に関わる文化資本が家庭内で形成／継承されることに疑義はないだろう。しかし、ハビトゥスは無自覚に形成／継承されて慣習行動に現れる。本調査では信仰層と関心層とを回答よって区別しているが、明確な入信儀礼が少ない日本の宗教状況に鑑みると、関心層を無自覚に宗教的慣習行動を行っている準信仰者と呼ぶ可能性は捨てきれない。参加者の多さから「初詣は世界最大の宗教行事である」と言うことは可能であるし、それに同意できなくとも、初詣が10%前後の信仰層のみで行われている行事でないことは明らかである。

そこで本節では信仰層・関心層・無関心層の宗教意識について、「宗教への関心」(II-1)と「宗教に関わる事柄への意見」(IV-1-①～IV-2-⑥)をクロスさせつつ分析を行う。そして次節にて、両親の信仰(II-5 および II-6)を主な説明変数とする文化資本の継承について論じていきたい。

2-2 「宗教への関心」と「宗教に関する意見」の関係

見通しを良くするために結論から述べると、「宗教への関心」(II-1)と「宗教に関わる事柄への意見」(IV-1-①～IV-2-⑥)計14問について、すべて有意差が認められた。総じて、信仰層および関心層ほど宗教に肯定的であり、無関心層は否定的であるとまとめられよう。それ自体は当然の結果であるが、本節の主目的は信仰層と関心層の差異を検討することにある。以下、本項で「宗教に関する意見」(IV-1-①～⑧)について、次項で「宗教と教育に関する意見」(IV-2-①～⑥)について詳細に確認する。

表3-1 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1)と「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要な。」(IV-1-①)のクロス表(実数(調整済み残差))

	++	+	-	--
1	111** (9.393)	54* (-3.961)	4** (-5.001)	5* (-2.416)
2	342** (7.416)	414** (3.350)	60** (-9.500)	28** (-6.628)
3	47** (-10.384)	203* (2.286)	123** (9.911)	33 (6.54)
4	12** (-7.014)	43** (-4.770)	52** (6.587)	51** (12.597)

※「++ = そう思う」「+ = どちらかといえばそう思う」「- = どちらかといえばそう思わない」「- = そう思わない」。以下、「宗教に関わる事柄への意見」(IV)とクロスする際には上記のように略記する。** $p < .05$ 、* $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,582)。

表3-2 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1)と「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある。」(IV-1-②)のクロス表(実数(調整済み残差))

	++	+	-	--
1	23 (0.520)	61* (-2.239)	57 (.194)	33* (2.533)
2	84* (-2.711)	325** (-3.890)	310** (4.173)	126** (2.562)
3	48 (-.135)	209* (4.010)	118 (-1.525)	31** (-3.668)
4	35** (4.176)	85* (2.975)	23** (-4.937)	14 (-1.567)

※** $p < .05$ 、* $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,582)。

表3-1は信仰あるいは関心の有無が設問への賛同に相関⁴している結果と言えよう。そして表3-2では宗教への信仰・関心との逆相関に近い傾向がみられ、表3-1と同様に、信仰層と関心層が宗教を擁護する形になってい

⁴ 両設問は信仰の有無や賛否について問う質的な尺度のため、厳密に統計的な意味での相関関係を示すものではない。可読性を優先してこうした表現を用いていることを付記しておきたい。

る。

ただし表 3-2 からは、信仰層は関心層よりも設問を強く否定していない様子が見えてくる。これを信仰者だからこそ宗教の危うさを知っていると解釈するか、それとも設問の「一般的に」という文言も相まって、信仰者であると表明しながら生活することで、他者から抱かれる「宗教はアブナイ」というイメージを内面化していると解釈するかが難しい。ともあれ、信仰層よりも関心層の方が宗教を擁護しているという傾向は注目に値するだろう。信仰層は決して妄信的な存在ではないことが理解される。

表 3-3 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1) と「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ。」(IV-1-③) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	++	+	-	--
1	107(.651)	52(-.920)	12(1.144)	2(-.957)
2	512(1.021)	277(-.276)	37(-1.422)	17(-.396)
3	231(-1.267)	150(1.877)	21(.049)	4(-1.879)
4	91(-.530)	45(-1.318)	11(1.103)	11*(4.392)

※** $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,580)。

単純集計では 9 割強の回答者が公的窓口の必要性を認めていることしか分からなかったが、検定を施したことで「宗教にまったく関心がない」層のみ有意に強く否定していることが明らかになった。無関心層が宗教を危険視していることは前設問から読み取れるが、宗教的トラブルへの窓口設置は不必要だとみなす傾向が認められるために一見矛盾する結果である。完全な無関心層は宗教に関する文化・施設等は不必要だと考える傾向があるのかも知れないし、「公的な窓口」というワーディングが、宗教を公的領域から遠ざけるべきというイデオロギーに接続されている可能性も考えられるだろう。

表 3-4 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1) と「特定の宗教団体が特定の政党を支持するのはよくない。」(IV-1-④) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	++	+	-	--
1	86(.150)	39**(-2.751)	37**(2.820)	12(.973)
2	420(.943)	264(-.116)	113(-.935)	43(-.405)
3	191(-.752)	151**(2.920)	46(-1.893)	16(-1.424)
4	73(-.632)	43(-1.184)	28(1.366)	13(1.732)

※** $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,575)。

関心層と「まったく関心がない」層には偏りが認められなかったが、信仰層と「あまり関心がない」層に対比される偏りが認められた。どちらも消極的な否定と肯定ながら、信仰層ならば特定の政党支持にさほど違和感を持たず、宗教にあまり関心があればその逆とまとめられよう。

本検定結果のみを取り出してもさほど面白味はないが、ブルデューは宗教的慣習行動と政治的意見に強い相関関係を見出している。少々長くなるが、以下、引用する。

政治教育は、その婉曲化された一形式である宗教教育と同じく、かならず子供の頃から家庭においてある程度はおこなわれるものなのだから。〔中略〕宗教教育というものがその内容においてもそれを教え込む方法に

においても政治的・社会化的の婉曲された一形式であるからだけでなく、ある慣習行動やはっきりした信仰を押しつけた場合、当人はどうしてもある階級に所属させられ、したがって特定の社会的アイデンティティを与えられてしまうからである。そしてこのアイデンティティは、これに対応する教え込みの内容がどのようなものであれ、「非信者」という補集合との対立によって関係的に規定され、ある時点においてこの補集合から排除されているあらゆる特性〔中略〕を担わされることになるのである。〔ブルデュー ibid. : 298-9、傍点ママ〕

ブルデューが対象としたフランス社会において、信仰を表明することが非信者との政治的／宗教的な対立を孕むことは理解できよう。日本の家庭内で政治ないし宗教教育が「かならず」行われているのかははなはだ疑問だが、本調査においても、信仰層と非信者との政治感覚の違いが析出された。また、宗教に「まったく関心がない」層に有意な偏りが認められないのは、政治と宗教の関わりにも無関心であるからかも知れない。

表3-5 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1) と「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ。」(IV-1-⑤) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	++	+	-	--
1	43(1.442)	69(-.372)	44(-1.455)	18(.962)
2	136**(-4.570)	335(-.934)	292*(4.350)	77(1.118)
3	97(1.937)	175(1.017)	104*(-2.265)	30(-0.879)
4	48** (3.277)	67(.460)	34*(-2.419)	8(-1.586)

※** $p < .05$, * $p < .01$. 「空欄 (NA)」を除く (n = 1,577)。

前設問に続き、政治と宗教に関わる内容である。本設問がややダブルバーレル質問——「街頭での布教は迷惑だ」と「街頭での布教は法律によって規制すべき」で二重化されている——であることを念頭に置きつつ、分析を進めたい。

まず、問題が街頭布教の迷惑さであれ法規制であれ、非信者において宗教への関心の強さと設問への賛成度合いが逆相関し、「まったく関心がない」層からは、宗教にとにかく関わりたくないという意思すら感じられるように思われる。また本設問は、宗教は危ないかを問うた表3-2以上に信仰層と関心層との差異が浮き彫りになっていると思われる。信仰層が比較的フラットであるのに対して、関心層は有意に設問に反対している。ここにも信者と非信者との政治的見解の差異を見出すことが可能であろう。信者と非信者との差異については「街頭布教の迷惑さ」の内実へと踏み込んで、信仰層として一枚岩ではないという可能性に目を向けたい。

「街頭布教の迷惑さ」を考えるには、信者と非信者にとっての迷惑は質が異なることを考慮に入れる必要があろう。信仰層と関心層との差異、特に関心層による宗教擁護は、信者と非信者による「迷惑」の解釈枠組みが異なることに起因するものと考えられる。以下、宗教への信頼と公共領域において果たす役割について、各種調査を用いて論じていく。

そもそも街頭布教はどのような宗教が行っているのだろうか。2000年に行われた本プロジェクト調査では学生が勧誘を受けた宗教名を尋ねており、上位5つは順に(1)エホバの証人、(2)キリスト教、(3)創価学会、(4)法の華三法行、(5)幸福の科学であった。そして井上は、(2)の「大半は、エホバの証人である可能性が高い」と指摘している〔井上 2003 : 30〕。ここから、勧誘を行っている宗教は新宗教に多いことが分かる。

このように実態として新宗教が勧誘に熱心なのはもちろんのだが、問題視されるべきは宗教勧誘のマイナス・イメージが市井に定着していることであろう。そのマイナス・イメージは勧誘の場面のみならず、宗教団体が社

会貢献活動を行う際のネックにもなっている。たとえば櫻井らは2009年、各種宗教団体に「社会活動上の問題点があるか」を尋ねるアンケート調査を行い、新宗教団体が「宗教団体であるがゆえに、被災地での救援活動を布教活動と誤解され、断られる場合がある」という回答が寄せられたことから「外部社会からの不理解」があることを指摘している〔櫻井ほか 2011：130-131〕。

ここで述べられている「外部社会」とは宗教団体の外部、つまり非信者たちの生活世界を指すものと考えて差し支えなかろう。そして本調査「現在、信仰を持っている」層で「信仰している宗教」(II-2)に「新宗教」を挙げたのは11.5%と少ない。信仰層のマジョリティを占める伝統宗教らの信者にとって「迷惑」なのは、一部の新宗教によって社会問題視される強引な布教・勧誘が、宗教全体のイメージを悪化させていることによるものと考えられる。そして伝統宗教は街頭布教を行うことが少なく、それはむしろ社会的信頼を損なう行為であると考えている節があるだろう。ここでブルデューに倣って「界」概念を議論に導入するならば、宗教界において、伝統宗教は自らの伝統に基づく「外部社会」からの信頼を賭け金とし、他宗教団体との象徴闘争において卓越化と差異化を図っていると言いうる。

上記櫻井らの調査は2009年のものだが、2011年に起きた東日本大震災以降の宗教者／宗教団体の活動について、稲葉圭信は以下のように述べている。

被災地での宗教者の活動に、布教に來たのではないかという見方もなかったわけではない。事実、プロテスタントの一部の教会は、布教の機会ととらえて、支援活動と布教活動をセットで展開しようとしたところもある。しかし、現実には受け入れられていない。そして、多くの宗教者・宗教団体が布教活動は一切しないという方針で、救援活動・支援活動に徹した。そのような宗教者の姿勢が被災者に受け入れられ、また、他の支援組織もそのことを理解しており、連携の輪が広がったのである。〔稲葉 2012：42〕

2018年のISSP調査によれば、日本社会で宗教団体を信頼している人の割合は30%強であった。これは法律制度や教育制度への信頼がともに60%を超えていることに鑑みると高い数字とは言えない〔小林 2019：65〕。法的福祉ならば信頼度の高さから容易に受け入れられるが、非常事態とはいえ、信頼度の低い宗教団体は受け入れられにくいことは想像に難くないだろう。先述の通り、宗教団体には「外部社会からの不理解」を嘆く向きがある。しかし布教という「下心」を持った支援活動が一部とはいえ認められた以上、「不理解」の種を蒔く者が宗教界にいることは認めざるを得ない。よって、問題は「外部社会からの不理解」だけではなく、宗教界の内部にも存在する。

そこで話を宗教界に絞って、庭野平和財団が2019年に行った世論調査を参照する。同財団調査の「宗教団体を神道(神社)、仏教(寺院)、キリスト教(教会)、新しい宗教団体に分けたときに、それぞれの宗教団体を信頼できると思えますか」という設問では、信頼度が高い順に仏教が71.3%、神道が65.1%、キリスト教が38.6%、新しい宗教団体が4.1%であった〔庭野平和財団 2019：8〕。異なる社会調査を安易に並べるべきではないが、「仏教(寺院)」と「神道(神社)」に限っては、ISSP調査における法律制度や学校制度に引けを取らない信頼を勝ち取っていると言えよう。

街頭布教の主体は一部の新宗教団体が突出しているものの、「外部社会」は宗教を1つの総体として捉える傾向を持ち、宗教界に属する信仰層は自らの宗教と他宗教を区別するであろう。かように信者と非信者にとっての「街頭布教の迷惑さ」は、意味するところが異なる。信仰層は、強引な勧誘を行う一部の宗教団体が宗教のイメージを損なうことを懸念して、街頭布教を肯定しきれずにいるのかも知れない。関心層は、——宗教法人法第2条に定められているように——布教を宗教団体の主たる目的の一つと認めて肯定しているのかも知れない。その内実については推測の域を出ないが、回答者が属する界とそこから生じる解釈枠組みの違いを認識することは、信仰

層と関心層の差異を捉える貴重な論点となるであろう。

宗教は「危ない」であるとか「迷惑」であるというネガティブな設問が続いたが、ここで宗教の肯定的な機能についても確認したい。稲葉は宗教が持つ3つの力を、宗教施設が持つ「資源力」、信者らの「人的力」、安寧を与える「宗教力」として記述している。また、稲葉らは宗教と社会貢献に関する調査を継続的に行い、2019年から2020年に掛けての調査で「災害協定を締結している自治体は121、指定避難所は661宗教施設で、2014年の調査時の95自治体、272宗教施設から大幅に増加している」ことを明らかにした〔稲葉 *ibid.*:41、稲葉ほか 2020:25〕。このように稲葉は、宗教はフィジカルとメンタルの両面で社会の役に立ち、また被災時には公的シェルターの役割を果たしていると主張する。筆者はそこに異論ないが、無関心層は上述のような機能を宗教に認めない傾向が確認される(表3-6および3-7)。

表3-6 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1)と「宗教を信じると、心のよりどころができる。」(IV-1-⑥)のクロス表(実数(調整済み残差))

	++	+	-	--
1	97 ^{**} (8.217)	57 ^{**} (-3.759)	9 ^{**} (-3.990)	9(-1.523)
2	287 ^{**} (4.364)	418 ^{**} (2.610)	101 ^{**} (-4.279)	35 ^{**} (-6.309)
3	60 ^{**} (-7.524)	206(1.923)	99 ^{**} (5.604)	41(1.572)
4	20 ^{**} (-4.839)	54 ^{**} (-3.240)	38 ^{**} (3.099)	45(9.798)

※^{**} $p < .05$ 、^{*} $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,576)。

表3-7 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1)と「災害が起こった際に宗教は人々を支えることができる。」(IV-1-⑦)のクロス表(実数(調整済み残差))

	++	+	-	--
1	96 ^{**} (10.132)	59 ^{**} (-2.129)	11 ^{**} (-5.437)	8 ^{**} (-3.141)
2	233 ^{**} (3.516)	396 ^{**} (4.894)	154 ^{**} (-4.328)	58 ^{**} (-6.515)
3	38 ^{**} (-8.085)	158(-1.183)	142 ^{**} (6.936)	68 ^{**} (3.537)
4	14 ^{**} (-4.668)	40 ^{**} (-4.212)	49 ^{**} (2.781)	53 ^{**} (9.001)

※^{**} $p < .05$ 、^{*} $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,577)。

IV-1-⑥および⑦は設問の意図が近く、信仰層から無関心層にかけて逆相関になる傾向も同様である。両設問の差異を詳らかにするならば、前者は日常生活におけるメンタルヘルスに資するもので、稲葉のいう「宗教力」に相当する。後者は非常時におけるフィジカルも含めての支えであるために、「資源力」と「人的力」に当たるものとして議論を接続できよう。信仰層ないしは関心層ならば、稲葉の論じる宗教の諸機能を肯定し、十分に活用できるであろう。しかし無関心層は、こうした宗教の力に懐疑的であるとまとめられる。

「信じる者は救われる」という常套句が無関心層に響かないことは半ば当然であるし、已む無くもあろう。しかし災害の折、宗教の持つ「資源力」や「人的力」は万人に開かれているはずである。無関心層を信仰に導くことは難しくとも、被災者を支える努力が行われていることは広く見聞されて然るべきであろう。

上述の通り、宗教への信心や関心があればその諸機能についても肯定する傾向が認められた。しかしパワースポットとなると、「パワーをもらうことができる」という機能と「宗教への関心」は分かりやすい傾向を示さない(表3-8-1)。

表 3-8-1 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1) と「パワースポットを訪れると、パワーをもらうことができる。」(IV-1-⑧) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	++	+	-	--
1	47 ^{**} (3.217)	61 ^{**} (-2.599)	31(-1.498)	35(1.874)
2	165(1.599)	366(-.703)	194(0.786)	117(-1.650)
3	51 ^{**} (-3.340)	205 ^{**} (3.028)	92(0.280)	56(-.926)
4	23(-1.162)	66(-0.525)	34(-0.151)	33 [*] (2.143)

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,576)。

まず、宗教関心層が比較的フラットな態度になる傾向を示しており、宗教とパワースポットを同列に扱うことが困難であることが確認される。信仰層は強い肯定が有意に多いのだが、5%有意水準にわずかに届かないながら強い否定もみられるという両極端な形になる傾向が確認された。

宗教とパワースポットとが同列でない示唆として、「あまり関心がない」層にて強い肯定が有意に少なく、弱い肯定が多いこと、そしてさほど否定的な傾向が認められない結果がみられた。そこで、宗教によって「心のよりどころができる」こととパワースポットによって「パワーがもらえる」ことの間関係をクロスしたものが表 3-8-2 である。

表 3-8-2 「宗教を信じて、心のよりどころができる。」(IV-1-⑥) と「パワースポットを訪れると、パワーをもらうことができる。」(IV-1-⑧) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

		パワースポットを訪れる			
		++	+	-	--
宗教を信じる	++	141 ^{**} (7.572)	175(.411)	84 ^{**} (-3.922)	73 ^{**} (-2.731)
	+	108 ^{**} (-4.037)	380 [*] (-2.295)	172 ^{**} (4.335)	96(0.548)
	-	30 ^{**} (-3.024)	126(-1.735)	71(1.641)	29 [*] (2.346)
	--	20(-1.175)	41 ^{**} (5.737)	32 ^{**} (-3.529)	43(0.406)

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,576)。

両者ともに強い肯定を示す層に偏りが確認されるが、両者の肯定度合いが単線的な相関になっていないように見受けられる。特に注目すべきは、パワースポットを弱く肯定する層に宗教を強く否定する傾向があることと、宗教を弱く肯定する層にパワースポットを弱く否定する傾向が認められることだろう。

宗教とパワースポットはともに超自然的なもののみならず、メンタルへ一部重複する機能——稲葉の分類を借りれば安寧を与える「宗教力」——をもたらすと信じられていると解してもよかろう。それゆえに宗教とパワースポット両者を強く肯定する層は有意に多いのだが、両者を区別して各々の機能を肯定もしくは否定する傾向がみえる。本調査のみから決定づけるのは勇み足だが、この宗教とパワースポットに対する意見の差異を先行研究と接続するならば、宗教を否定しつつパワースポットを肯定する層を「教団嫌いの神秘好き」、宗教を肯定しつつパワースポットを否定する層を「宗教伝統保守層」とラベリングすることは可能であろう。

学生宗教意識調査において、宗教とパワースポットの機能が峻別される可能性が統計的に析出されたことは意義深い。こうした結果は、現代の若者ないし消費文化に焦点を当てた概念である「ポップ・スピリチュアリティ」[堀江 2019] や「軽い宗教」[山中 2017] と接続しうらう。改めて表 3-8-1 を見れば、宗教に「あまり関心がない」層であっても、「ポップ」なパワースポットに「軽く」コミットする傾向が認められるのである。

2-3 「宗教への関心」と「宗教に関する考え」の関係

前項に続き、本項では「宗教への関心」が「宗教教育に関する考え」に関係していることについて確認していく。

表 4-1 から、信仰層および関心層は強い肯定をする傾向にあり、全体的に正の相関がみられると言ってよいだろう。ただし、無関心層であっても全否定するとは限らず、消極的賛成への偏りも確認される。

表 4-1 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1) と「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい。」(IV-2-①) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	++	+	-	--
1	135 ^{**} (5.233)	28 ^{**} (-4.611)	10(-.968)	1(-1.311)
2	582 ^{**} (8.389)	212 ^{**} (-5.786)	45 ^{**} (-3.627)	6 ^{**} (-3.562)
3	169 ^{**} (-8.352)	184 ^{**} (7.011)	46 ^{**} (3.310)	7(-.188)
4	51 ^{**} (-7.255)	73 ^{**} (4.227)	19 [*] (2.225)	15 ^{**} (7.569)

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,583)。

宗教教育は一般的に (1) 宗教知識教育、(2) 宗教情操教育、(3) 宗派教育に分類される。その分類に従うならば、本設問は宗教知識教育の必要を問うたものと換言されよう。どちらかと言えば宗教情操に関する意見を問っていた前項の設問群に比して、本設問の結果からは宗教知識を学ぶことに対する抵抗は弱めであり、回答者らが宗教情操と宗教知識とを切り離している様子が見受けられる。もっとも、宗教学者らが学生に回答を求めた本調査において、——「高校までに」という時限が付いていたとしても——宗教知識教育を不要と断ずることは感情的に難しいという点には考慮の必要があろう。

それでは情操教育に関する意見は信者と非信者、関心層と無関心層とではどのように異なるのであろうか。以下3問では信仰層と関心層とに最も深い溝が認められたので、まとめて示す。

表 4-2 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1) と「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」(IV-2-②) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	++	+	-	--
1	47 ^{**} (6.409)	58(1.797)	49 ^{**} (-3.014)	20 ^{**} (-3.457)
2	108(1.033)	219(-1.412)	338(1.423)	174(-.967)
3	29 ^{**} (-3.525)	117(.678)	170(1.594)	89(.168)
4	6 ^{**} (-3.303)	40(-.523)	51(-1.548)	58 ^{**} (5.009)

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,573)。

表 4-3 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1) と「道徳の授業をもっと充実させた方がいい。」(IV-2-③) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	++	+	-	--
1	85 ^{**} (5.689)	46 ^{**} (-2.600)	26 ^{**} (-2.603)	16(-.881)
2	259(.429)	275 ^{**} (-2.462)	206(1.669)	100(.886)
3	88 ^{**} (-4.318)	174 ^{**} (3.726)	99(.939)	42(-.607)
4	46(-.362)	64(1.382)	29(-1.425)	19(.327)

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,574)。

表4-4 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1)と「いのちの大切さを教える授業を充実させた方がいい。」(IV-2-④)のクロス表(実数(調整済み残差))

	++	+	-	--
1	109**(3.112)	40*(-3.256)	15(-.252)	8(.327)
2	417*(-2.420)	297(.681)	89(1.893)	42(1.684)
3	213(.190)	152(1.544)	32(-1.084)	8*(-2.571)
4	85(.517)	52(.002)	10(-1.311)	8(.604)

※** $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く (n = 1,579)。

「愛国心」「道徳」「いのちの大切さ」それぞれの教育について、信仰層は強く肯定する傾向が認められた。信仰と愛国心を等号で結ぶと議論が紛糾し、本稿の趣意から外れるために詳説に踏み込むことは避けたい。ただし取り急ぎ、どの宗教においても道徳や命の大切さは重んじられるであろうことは確認しておこう。よって、信仰層にとっては、これらに関する教育は宗教情操教育に係る枠組みで捉えられるものと思われる。しかし、信仰層と同様に宗教知識教育について有意に積極的賛成をしていた関心層は、上記3問、特に「いのちの大切さ」において無関心層よりも肯定する傾向が低いことが看取される。

この齟齬とも取れる結果については、ブルデューの界概念から分析できるように思われる。ブルデューは、宗教界に属する人間が社会界の政治問題を自宗教の倫理規範に基づいて捉える様子を以下のように説明している。

アイデンティティーおよびそれを分かちもつ人々への忠実さを(「私はキリスト教徒です」と口に出すことで)守るならば、こうして公言された信仰には現在の生活条件にたいする大きな自律性が与えられるであろう。また宗教的メッセージの内容そのものが及ぼす固有の効果についていえばそれは社会界を「個人的救済」という「人格主義」的論理において考え、貧困や苦難を宿命としてそれも病気や死と同じような個人的宿命としてとらえようとするもとの傾向を、さらに強めるものであると考えることができる。[ブルデュー 1979b(1990) : 299]

本調査では「愛国心」「道徳」「いのちの大切さ」がどのような規範に則ったものであるのかは曖昧なまま、回答者のイメージに委ねている。そして上記引用の通り、信仰者ならば自らの信仰に基づいた「愛国心」「道徳」「いのちの大切さ」と接続して設問を解釈し、自ら受けている宗教情操教育と齟齬のないものとして強く賛同することは想像に難くない。

しかし非信者は、「道徳の授業」と言われれば義務教育時に受けていたそれを思い浮かべるであろう。周知の通り、公立校にて行われる「道徳の授業」は宗教性を排したものであるし、宗教立校においては「道徳」に代えて「宗教」の授業を行うことができると学校教育法施行規則第50条第2項⁵にて規定され、同項は第79条にて中学校にも準用されている。よって、非信者が想定する「道徳」は宗教情操教育と乖離していると考えられる。道徳教育と宗教教育の乖離について、もう少し掘り下げてみよう。

本調査回答者の生年中央値は2000年であり、第1四分位点と第3四分位点それぞれが1999年、2001年と偏りが小さい⁶。よって、回答者の多くが「道徳」で教材『心のノート』を用いたであろうことが推察される。弓山

⁵ 「私立の小学校の教育課程を編成する場合は、前項の規定にかかわらず、宗教を加えることができる。この場合においては、宗教をもって前項の特別の教科である道徳に代えることができる」とされ、「特別の教科」とは「道徳、外国語活動、総合的な学習の時間並びに特別活動」を指す。

⁶ 本来ならば平均年齢ならびに標準偏差や尖度を提示して偏りの小ささを示したいが、調査で尋ねたのは生年であり、調査時期に半年程度の幅があるために平均年齢を算出できない。なお、生年の標準偏差は3.434、歪度は114.415である。1970年

達也は、「文部行政によって喧伝された「目に見えないものを大事にする」教育を官製スピリチュアル教育」と呼び、『心のノート』が教育現場に登場した背景とその限界を指摘した [弓山 2010]。『心のノート』に代表される官製スピリチュアル教育は宗教性が漂白されていることはもちろん、「大いなるもの」や「人間の力を超えたもの」という表現が用いられており、抽象性が高い。信仰者であれば自宗教の解釈枠組みと接続して理解することもあろうが、非信者の小中学生は、その抽象性を内面化する方策を持たずに戸惑いを覚えるであろう。現場教員は理解を促すために特定宗教を持ち出すことはできず、結果として、道德教育は普遍的なモラルの涵養に落ち着くものと思われる。

宗教関心層が無関心層に比して「道德」や「いのちの大切さ」を教育することに消極的な態度をみせている理由は、第一にこれらの項目を宗教に関するものと捉える解釈枠組みが作られていないこと、第二に宗教への関心はモラルとは異なる何かによって引き起こされていることと推察されよう。それは科学では解決できない何か(表 3-1) かも知れないし、メンタルやフィジカルを支える何か(表 3-6 および表 3-7) かも知れない。その「何か」を特定する用意は本論にないが、宗教関心層は宗教に関する知識を欲する一方で、道德や命の大切さにはさしたる関心を示さないことは特筆すべきであろう。換言すれば、宗教関心層にとって宗教と道德、ならびに宗教と命の大切さは接続されていないものと思われる。宗教職能者や宗教学者が宗教関心層に何かを講ずる際は、こうした意識のズレを意識する必要があるだろう。

表 4-5 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1) と「神社や寺院など、日本の伝統的宗教施設を見学する機会を設けた方がいい。」(IV-2-⑤) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	++	+	-	--
1	98** (6.616)	48** (-3.993)	15** (-3.508)	13 (.809)
2	323** (4.054)	359 (0.926)	126** (-3.645)	32** (-4.039)
3	92** (-5.564)	193** (2.787)	102** (4.108)	19 (-1.377)
4	22** (-5.554)	57 (-1.434)	46** (3.745)	32** (7.894)

※** $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く ($n = 1,577$)。

本設問では「伝統的宗教施設」の「伝統」に重きをおくか「宗教」に重きをおくかで回答者の反応が異なることが想定され、質問が二重化している向きがあるかもしれない。ただ、「神社や寺院など」という具体例が示されているために、しばしば宗教学で講じられる「日本の伝統宗教」という単元を想定すれば不自然ではないだろう。

そして、これらについては信仰および関心の有無との相関が確認される。「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要な。」(表 3-1) の結果に近似した傾向と言えよう。歴史や伝統に基づく宗教施設の力強さと同時に、「ま

表 4-6 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1) と「学校では受験や就職に必要な知識や技能を教えるだけでいい。」(IV-2-⑥) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	++	+	-	--
1	22** (4.505)	7 (1.857)	55* (-2.021)	90 (.916)
2	30** (-3.449)	40** (-4.511)	316 (-1.094)	459** (5.003)
3	15 (-1.718)	44** (2.971)	183** (3.182)	162** (-3.893)
4	18** (3.534)	28** (5.120)	57 (-.699)	55** (-3.616)

※** $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く ($n = 1,581$)。

代以前生まれの十数人が正規分布を大きく歪めていることは確認されるが、議論を妨げるものではないと判断し、外れ値として処理していない。

まったく関心がない」層の宗教アレルギーには取り付く島もないことを感じさせる結果であった。

表 4-6 は本項最後の設問であるが、信仰層と関心層とで大きく傾向が割れたことが興味深い。信仰層は学校に社会生活に関する知識を強く求める傾向が確認され、関心層はそれを否定する傾向があるというコントラストが認められた。

再度ブルデューを援用すれば、信仰者にとって宗教に関する知識や情操は、家庭内の信仰や自宗教に付随するコミュニティで継承されるものと言えるだろう。そうであれば、学校は知識や技術を学ぶ場所と規定しても差し障りがない。それに対して関心層は、——本調査が宗教学関連教員に託されていることを前提として——学校教育が宗教に接近する身近な手立てである。宗教へのアクセスと言うべき環境の差異が、こうした結果をもたらしたものと考えられる。

なお、本設問のみを取り出せば、学校で培われるべきものは「知識や技能」のみならず、生活を送る上で必要な常識や社会関係資本も想定されよう。しかし、回答者は本調査が『学生宗教意識調査』であることを認識しているため、その点は議論から外すものとする。

さて、本節の目的は信仰層と関心層との差異を浮かび上がらせることであった。第 2 節第 2 項の冒頭にて確認したように、全体としては信仰もしくは関心があれば宗教に対する肯定的な意見を持つという至極当然な結果が析出された。しかし本設問のように、信仰層と関心層で傾向が分かれるケースが散見されたこともまた事実である。

各設問に関する分析を繰り返すことは控えるが、設問によっては信仰層よりも関心層の方が宗教に肯定的な回答をしていたこと、ならびに信仰者ならば自宗教の文脈で捉えうる道徳や命の大切さについて、関心層はあまり肯定的な感触を持っていなかったことを思い起こしていただきたい。宗教とパワースポットを支持する者は必ずしも一致しないということもまた、注目すべき論点であろう。

本稿では宗教に関心を寄せる人々がどのような宗教的シンボルを欲しているのかを解き明かす狙いがあることは先述した通りである。仮に宗教市場というものが存在するならば、本節の分析が宗教関心層のニーズを掴み取る一助となれば幸いである。

それでは、本節で扱っている「宗教に関する意見」の背後には、どのような心情が潜んでいるのであろうか。本調査は何らかの仮説を持った上で設計されたものではないために学術的作法からは外れるが、補論として、次項に因子分析の結果を示す。

2-4 「宗教に関する意見」の背後に潜むもの

表 5 は「宗教に関する意見」全 14 項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を実施した結果である⁷。4 件法のうち肯定的な意見から順に 4、3、2、1 と得点化したため、明らかに因子負荷量が負となる 5 項目については反転項目とした。因子数の決定についてはスクリープロットで示された値が 1 以上となるカイザー基準を用い、5 因子を採用した。

第 1 因子は心身ともに宗教が生活の支えとなり、それは科学では代替できないという観点から「宗教の主観的価値」因子といえよう。第 2 因子は「いのちの大切さ」と「道徳教育」がクロスアップされているため、「情操教育」因子とみなせる。第 3 因子は学校での宗教教育に関する事柄であるため「宗教知識教育」因子とする。第 4 因子は「愛国心」を筆頭に「伝統的宗教施設の見学」が続くことから、「日本の伝統保守」因子であろう。第 5 因子はいずれも公共領域における宗教活動や意識に関わる事柄であるため、「公共宗教」因子としたい。

⁷ 近年主流となっている最尤法を採用しなかった理由は、本調査結果に正規分布を仮定することの困難さによる。また、前項までの議論にて各項目に相関があることは十分に仮定出来るために斜交回転とした。

注目に値するのは、まず、「パワースポットを訪れると、パワーをもらうことができる。」(IV-1-⑧)のみが上記5因子に絡んでいないことである。強いて言えば第4因子での値が高めであるが、近年ではパワースポットを売りにする寺社仏閣が散見されることから理解できる範疇であろう。本分析におけるパワースポット項目の独自性は0.860と最も高く、「宗教に関する意識」調査項目において、パワースポットが宙に浮いた質問項目であることが理解される。換言すれば、——第2節第2項でも触れた通り——パワースポットは宗教とも道徳とも同一視しにくい概念であると言えよう。

また、本分析の結果として強調したいのは、因子間相関における第2因子「情操教育」が目立って他因子と負の相関を示していることである。筆者が第2因子を「宗教情操教育」ではなく、単に「情操教育」とした理由はここにある。繰り返しになるが、宗教職能者ないしは宗教学者であれば、ともすると宗教と情操教育の結び付きを自明としてしまうかも知れない。しかし、この結果からは、「宗教の主観的価値」は「情操教育」によって高まららないと言えよう。

もっとも、学校教育における「道徳」から宗教が排除されている現状に鑑みれば、納得の結果である。そして「情操教育」は「愛国心」に代表される第4因子「日本伝統の保守」との相性が非常に悪く、「公共宗教」因子とのみ、弱い正の相関をみせている。本論の趣意から外れるために深追いはしないが、「道徳」の授業では近代的モラルの教示が行われているものと推察されよう。『心のノート』が抽象的に過ぎることは先述したが、「情操教育」で育まれているのは宗教的情操ではなく、せいぜい宗教を含む異文化への寛容性とみるのが妥当であろう。

表5 「宗教に関する意見」に対する因子分析結果

	f1	f2	f3	f4	f5
宗教は心のよりどころ	0.799				
災害時に人々を支える	0.776				
宗教は人間に必要	0.539		0.180		
いのちの大切さを教える		0.937		-0.112	
道徳の授業を充実		0.597		0.167	
宗教文化の基礎知識			0.640	0.128	
知識や技能を教えるだけでいい(R)			0.520	-0.178	
愛国心を深める工夫	0.105			0.751	
宗教施設見学の機会			0.386	0.404	
街頭布教を規制(R)	0.103				0.537
宗教団体の政党支持(R)				0.107	0.484
アブナイというイメージ(R)			0.155		0.307
公的窓口の設置(R)		-0.206			0.304
パワーがもらえる	0.162	-0.120	0.279		
寄与率	0.114	0.091	0.069	0.065	0.052
累積寄与率	0.114	0.205	0.275	0.340	0.392

※質問項目の略記は2020年度刊行の報告書に倣った。「(R)」は逆転項目を示す。空欄は寄与率の絶対値が0.1未満の項目。

因子間相関

	f1	f2	f3	f4	f5
f1	1.000	-0.110	0.505	0.197	0.330
f2		1.000	-0.314	-0.501	0.235
f3			1.000	0.242	0.246
f4				1.000	-0.087

周知の通り、因子分析は多変数の相関を要約する手法である。よって本項は、14 項目の「宗教に関する意識」調査を 5 因子に圧縮したに過ぎないとも言える。しかし要約することによってパワースポットが他の「宗教に関する意識」から独立していることが明らかになり、「情操教育」は「宗教の主観的価値」を高めるものではないという知見が得られた。宗教的ニーズがどこにあるのか、またどうすればニーズを高めることができるのかという本稿の目的に照らせば、具体性の乏しい「情操教育」よりも「宗教文化教育」に注力する方が効果的であると約言されよう。

3. 宗教意識に関する父母の信仰の影響

3-1 本節の目的

父母の信仰は子の宗教意識に影響を及ぼす。これは半ば自明であろう。ただし、影響を及ぼすのは自明であるが、どのような影響を及ぼすのかは必ずしも明らかでない。近年、とりわけ新宗教団体にとって二世ないし三世に信仰を継承することは火急の課題であり、これには創価学会を取り扱った猪瀬優理の研究を筆頭に幾つかの論考が挙げられよう [猪瀬 2011]。

本調査は猪瀬のように高度な統計分析を行うに耐える設計をしておらず、クロス表の作成と χ^2 乗検定および残差分析のような初歩的な分析に留まる。ただし本調査には、活発な信仰実践をしている現役信者に調査対象を絞ることなく、前節で焦点化した非信者ら——「宗教に関心がある」層のみならず、「まったく関心がない」層まで——を含めた宗教意識も探ることができるという強みがある。

また、「イエ」による信仰の継承は必ず行われるわけではない。たとえば実録マンガ『よく宗教勧誘に来る人の家に生まれた子の話』（いしい 2017）が話題になって久しいが、同作では母が宗教に入信し、父は無関心、そして二世信者である著者は宗教から離脱している。これは「イエ」単位での教勢維持戦略を取りがちな日本宗教に対し、信仰様態がバラバラなケースを提示したドキュメンタリー作品といえるだろう。

また、同作の主人公である著者は、社会生活のなかで二世信者である自らをマイノリティとして自覚し続けている。本調査において「信仰をもっている」とした回答者は、無回答および「回答なし」を除くと 11.0% であり (II-1)、同様に父母それぞれの信仰の有無を尋ねると、「信仰あり」は父 10.6% (II-5)、母 11.2% (II-6) であった。伝統宗教と新宗教を合わせても、本人および父母それぞれで信仰者は 1 割程度である。これは過年度調査や他の社会調査と見比べても、さして違いはない。このように、自覚的信仰を持つ者はマイノリティであると約言されるのが現代日本の宗教状況である。そのため、非信者も含み込んだ本宗教意識調査には一定の価値が認められるであろう。

上記の信仰状況を確認した上で、父母の信仰の有無は回答者の宗教意識にどのような影響を及ぼすのかを検討することが本節の目的である。次項にて父母の信仰が回答者の信仰にもたらす影響を示し、続いて、宗教習俗等の宗教的慣習行動への影響を検討していく。

3-2 父母の信仰が宗教への関心および宗教行動に及ぼす影響

まず、父母の信仰が回答者の「宗教への関心」に及ぼす影響を確認する。表6が「宗教への関心」と父母の信仰の有無とのクロス表である。

表6の通り、父に信仰があると子ども信仰がある傾向が確認された。それに対して母の信仰とのクロスでは有意差が認められなかった。新宗教研究においては母——正確には専業主婦というジェンダー役割——の存在がしばしば注目され、実際、本調査においても母の新宗教への参与率は父と比較して有意に高い(表7)。

表6 「あなたは宗教にどの程度関心がありますか。」(II-1) と「父の宗教」(II-5) および「母の宗教」(II-6) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	あり	なし	あり	なし
1	81 ^{**} (18.848)	61 ^{**} (-18.848)	21	135
2	62 ^{**} (-3.578)	715 ^{**} (3.578)	90	673
3	10 ^{**} (-5.899)	369 ^{**} (5.899)	41	314
4	1 ^{**} (-4.105)	144 ^{**} (4.105)	15	127

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。設問の選択肢は「はい/いいえ」だが、可読性を考慮して「あり/なし」とした。宗教への関心と「母の宗教」の有無については有意差が認められなかったため ($p = .886$)、残差分析は行わない。「空欄 (NA)」を除く、父の信仰の有無とのクロス表 ($n = 1,601$)、母の信仰の有無とのクロス表 ($n = 1,574$)。

表7 「父の宗教」(II-5) および「母の宗教」(II-6) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の宗教	母の宗教
神道	33(1.293)	28(-1.293)
仏教	69 [*] (2.327)	57 [*] (-2.327)
キリスト教	19(-1.331)	31(1.331)
新宗教	27 ^{**} (-2.659)	53 ^{**} (2.659)
その他・不明	5(-0.081)	6(0.081)

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く ($n = 328$)。

表7より、新宗教研究が女性に注目することの必然性ととも、父母は必ずしも信仰を同じくしていないことがわかる。そして父母どちらの信仰が子に影響が及ぼすかと言えば、表6から、父の信仰が強く関わっていることがわかる。よって第1節で仮説的に示したように、信仰継承については家父長制に基づく「イエ」概念が有効であり、父の信仰を受け継ぐ男系継承が行われていることが示唆されるだろう。

家父長制が今なお現役であるならば、男性は「イエ」の信仰を継ぐ者としての自覚が求められ、父母の信仰について関心を持つものと予想される。そこで性別と父母の信仰の有無をクロスした結果が表8である。

表8 性別 (I-2) と「父の宗教」(II-5) および「母の宗教」(II-6) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	あり	なし	あり	なし
男	85 ^{**} (4.922)	449 ^{**} (-4.922)	90 ^{**} (3.981)	451 ^{**} (-3.981)
女	71 ^{**} (-4.922)	856 ^{**} (4.922)	92 ^{**} (-3.981)	863 ^{**} (3.981)

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く、父の信仰の有無とのクロス表 ($n = 1,461$)、母の信仰の有無とのクロス表 ($n = 1,496$)。

父母の信仰について、どちらも男性が1%有意水準で「あり」と答える傾向がみられた。直感的に考えるならば、回答者の性別と父母の信仰の有無は独立して然るべきである。男女のどちらが生まれるかはほぼ半々のランダムであるし、信仰は「親から子へ」という因果関係の方向に異論はないだろう。そのため、子の性別が父母の信仰に影響を与えるとは考えがたい⁸。

本調査は回答者の宗教意識を問うものであり、回答者の「父母が信仰を持っているか」ではなく、回答者が「父母の信仰の有無を知っているか」に結果が左右される。そのため、女性は父母が信仰を持っているようがいまいが、それを知らずに「なし」と回答している可能性が考えられる。家父長制に基づき、女性はいつかどこかの「イエ」に嫁ぐという前提で眺めれば、女性よりも男性の方が父母の信仰——自らの「イエ」の宗教——を意識する機会が多いと言いうるだろう。

そして「イエ」を意識することで、彼/彼女らが頼りにする宗教家にも偏向があることを説明できる分析結果がある。表9は回答者の性別と「人生に悩んだとき相談したい宗教家」をクロスしたものであり、男性は僧侶や神主といった日本の伝統宗教に属する者に、女性は霊能者や占い師といった民間霊能者に相談する傾向が確認できる。ここで男女の生得的な性向を持ち出して「女性は占い好きで民間信仰の担い手である」という分析も可能であるし、それが通俗的な理解でもあろう。しかし本稿では宗教の supply-side theory を用いて、宗教/信仰の供給側に目を向けたい。換言すれば、「宗教職能者は男女どちらの方を向いているのか」という問題である。

表9 回答者の性別 (I-2) と「人生に悩んだとき相談したい宗教家 (複数回答)」 (III-5) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	男性	女性
1.仏教の僧侶	143 ^{**} (2.625)	187 ^{**} (-2.625)
2.キリスト教の牧師・神父・シスター	90	162
3.神社の神主	100 ^{**} (2.880)	118 ^{**} (-2.880)
4.メディアに登場するような霊能者	13 ^{**} (-2.682)	49 ^{**} (2.682)
5.街の占い師	26 ^{**} (-3.756)	96 ^{**} (3.756)
6.ネット上で相談に回答してくれる人	52	81
7.その他の宗教家(新宗教の教師など)	7	9
8.この中に相談したい人はいない	368	635

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除き、各設問の回答者数は1,617名。有意差が認められなかった項目については残差分析を行っていない。「キリスト教の牧師・神父・シスター」($p=0.670$)、「ネット上で相談に回答してくれる人」($p=0.640$)、「その他の宗教家」($p=0.609$)、「この中に相談したい人はいない」($p=0.697$)。

家父長制が生きているならば、家督を継ぐのは男性である。男性が家督を継ぐならば、「イエ」に結びついている日本の伝統宗教がターゲットにするのは男性であって女性ではない。宗教的慣習行動は幼少期より家庭で育まれるというブルデューの言は既に確認したが、ここで言う「家庭」は、父母による教育のみを指すものではないだろう。

たとえば本調査において過半数が「家族で行った」と回答したお盆の墓参り (II-7-②) であれば、男性は親類縁者から墓を継ぐものと眼差されることが想像に難くないし、場合によっては檀那寺/菩提寺の住職に挨拶するこ

⁸ 男女差については「宗教への関心」(II-1)において男性の方が有意に「現在、信仰をもっている」傾向が認められるため、疑似相関の可能性がつきまとう。近年では男女差が縮まっているものの、本調査の回答者は大学院を含む4年制大学の在籍者である。ランダム・サンプリングによらない本調査から推測するべきではないかも知れないが、根本的に、女性信仰者は男性信仰者に比して4年制大学に進学する割合が有意に低いとも考えられる。あるいは大学進学率にまで話を広げずとも、女性の方が宗教学関連科目を受講しうる学部を選択しがちで、相対的に男性信仰者が目立つ調査結果になっている可能性もあろう。本稿では上記可能性の示唆に留め、性別と信仰の有無が大学進学率にもたらす影響についてはこれ以上踏み込まない。

ともあろう。戦後の民法改正により祭祀承継者は家督相続人に限らなくなったが、墓などは民法 897 条の規定で「慣習に従って祖先の祭祀を主宰すべきものが承継する」とされている。市井の「慣習」からすれば、家督の相続と祭祀の承継は未だ不可分であろう。そのためこうした墓の相続や寺社との関係を男性に帰す風潮は未だ認められ、宗教者側もまた、男性側と接触する機会が増えるものと考えられる。宗教市場に「イエ」が絡む伝統宗教ならばそのメイン・ターゲットは男性であり、民間信仰者はそこから遊離した女性をターゲットとしていることが本調査結果に反映されていると言えよう。

昨今の少子化による男系相続の袋小路化や永代供養墓の増加は上記の傾向に歯止めを掛けるかも知れない。ただし本調査結果においては、子は父の信仰の影響を受け、男性の方が父母の宗教を意識している。明治民法によって規定された家父長制の残滓が今後も存続するのか、それとも宗教の個人化によるパラダイム・シフトが起こるのかは分からないが、現状では父母の信仰が男性に色濃く受け継がれている様子が看取された。

しかしながら、宗教習俗に関する質問での初詣 (II-7-①) とお墓参り (II-7-②) では、父母の信仰による影響が解釈しにくい結果であった。表 10-1 に結果をまとめる。

表 10-1 父母の信仰の有無と「あなたの家族は今年の初詣はどうしましたか。」(II-7-①) に関する行動のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
1	61*(-3.253)	692*(3.253)	73*(-3.008)	689*(3.008)
2	25(0.741)	181(-0.741)	23(-0.539)	187(0.539)
3	12(-1.396)	149(1.396)	11*(-2.260)	154*(2.260)
4	40*(2.290)	236*(-2.290)	57*(4.377)	234*(-4.377)
5	19*(4.094)	58*(-4.094)	18*(3.000)	61*(-3.000)

※選択肢は「1= 家族で行った」、「2= 家族とは別に自分だけで行った」、「3= 行った家族もいるが自分は行かなかった」、「4= 家族の誰も行かなかった」、「5= その他」。 $p < .05$ 、 $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 (n = 1,473)、母の信仰の有無 (n = 1,457)。

上記選択肢中、家族で初詣に行った割合は過半数に上る。そこに「自分だけで行った」を加えると初詣に行った割合は 6 割を超え、これは他の社会調査と齟齬のない数字であろう。興味深いのは初詣という宗教行動への参与率が父母の信心によって増加するどころか、父母が信仰を持っていると「家族で行った」が有意に低く、「家族の誰も行かなかった」が有意に高いことである。信仰の有無による偏りがなければ、初詣は現代日本において宗教行動というよりもレジャー活動に属するとでも言えよう。しかし、それは本結果から強弁できる解釈ではない。そこでやや強引ながら、回答者の多くが初詣を神社への参拝のみと解している可能性を提示する方が説得的だと考えられる。

父母の信仰の内訳を見ると、ともに仏教が神道の倍以上の割合を示している(「父の宗教」では「神道」21.6%、「仏教」45.1%。「母の宗教」では「神道」16.6%、「仏教」33.7%)。よって設問の意図に反して、仏教徒の家庭では神社参拝を行わなかったことを理由に「家族で行った」が少なく、「家族の誰も行かなかった」が多くなったと考えられる。

なお、初詣については父母それぞれの信仰の影響から大きく異なる特徴を示したものはないように思われる。強いて言えば「母の信仰の有無」の「3.行った家族もいるが自分は行かなかった」において 5%有意水準で差異が認められたため、初詣においても、父に比べて母の信仰は子ないし家族の宗教行動への影響が少ないことが認められる。

それではお盆での墓参に父母の信仰の影響はあるのだろうか。表 10-2 にまとめる。

表 10-2 父母の信仰の有無と「あなたの家族は去年のお盆の墓参りはどうしましたか。」(II-7-②) に関する行動のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
1	77(-1.002)	701(1.002)	88(-1.141)	704(1.141)
2	9*(4.141)	16*(-4.141)	7*(2.604)	17*(-2.604)
3	29(-1.189)	298(1.189)	32(-1.489)	299(1.489)
4	36(1.081)	254(-1.081)	47*(2.066)	257*(-2.066)
5	6(0.159)	47(-0.159)	7(0.165)	48(-0.165)

※選択肢は「1= 家族で行った」、「2= 家族とは別に自分だけで行った」、「3= 行った家族もいるが自分は行かなかった」、「4= 家族の誰も行かなかった」、「5= その他」。 $p < .05$ 、 $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 (n=1,473)、母の信仰の有無 (n=1,507)。

初詣と同様に「家族で行った」が過半数を占める。その上で父母ともに有意差が認められたのは「家族とは別に自分だけで行った」ケースのみであり、父母が信仰を有していると回答者が単独で墓参する割合が有意に高い。大学生ともなれば、家族で都合を擦り合わせずとも、帰省したタイミングで墓参することは不自然ではないだろう。そして親が信仰者であれば墓参を促し、そうでなければ特に何も言わずに墓参が見送られるといったところであろうか。ただし「自分だけで行った」ケースは全体の2%以下であるから、全体の趨勢からすれば強調するものではない。

父母それぞれの信仰を見比べると、母が信仰者であるケースで「家族の誰も行かなかった」が有意に多い。これは、男系相続を基本とする日本の墓制では回答者が母方の祭祀承継者になりにくいことから理解できるだろう。母方の墓守は回答者でも回答者の母でもない誰かであって、母が信仰を持っていたとしても、回答者の家族が母方の祭祀を承継している可能性は低いと思われる。

本項の議論をまとめると、母よりも父の信仰が色濃く継承され、また男女では男性の方が強く影響を受けていることが明らかになった。初詣や墓参といった宗教行動の多くは家族の単位で行われるが、詳らに見れば、男系相続の傾向が認められる。「家にある宗教的なもの」(II-7-③)が回答者の信仰や宗教への関心に影響を及ぼしていることは第2節第1項にて確認し、それが「客体化された文化資本」であることは述べた。墓は「家にある宗教的なもの」ではないが、日本宗教において、最も重要な制度化ないし客体化された文化資本の一つであることは間違いない。ならば男性が「人生に悩んだとき相談したい宗教家」(III-5)に伝統的な宗教職能者を挙げ、女性は民間霊能者を挙げる傾向が認められたことも、男女の生得的な性向の違いとしてのみ片付けるべきではないだろう。本稿の視点からすれば、男性は家督と墓を継ぐことを前提に育てられ、結果、伝統的な宗教職能者に接近するようなハビトゥスが身に付いたとすることができる。

3-3 父母の信仰が「宗教に関する意見」に及ぼす影響

本項では父母の信仰と「宗教に関する意見」(IV-1-①)との関係を、次項で「宗教と教育に関する考え」(IV-2-⑥)との関係を確認する。本項の意図は、信仰が名目のみならず情操的にも継承されるのか、継承が認められるならば父母どちらの影響が強いのかを確認するものである。「身体化された文化資本」の継承というブルデュー的な観点を、とりわけ信仰と宗教への意見に特化させて検証する作業と言えよう。

表 11-1 父母の信仰の有無と「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ。」(IV-1-①)に関する行動のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
++	88*(6.516)	385*(-6.516)	84*(4.468)	395*(-4.468)
+	53*(-3.099)	618*(3.099)	73(-1.623)	618(1.623)
-	13*(-2.561)	212*(2.561)	16*(-2.465)	209*(2.465)
--	5*(-2.175)	106*(2.175)	9(-1.476)	107(1.476)

※* $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 (n = 1,478)、母の信仰の有無 (n = 1,511)。

父母ともに、信仰があれば「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ」と強く考える傾向が認められた。それは回答者の信仰ないし関心の有無が父から強く受け継がれているであろうという表 6 の検定結果と矛盾しない。しかし注目すべきは、表 6 では父母のうち父の影響しか確認できなかったにもかかわらず、当設問では母の信仰でも有意差が認められたことである。宗教への参与、あるいは明確な関心/無関心は父からの影響が色濃いとしても、情操的な部分では母の影響もあるとすることができるだろう。

続く「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」(IV-1-②)は、父母の信仰の有無とクロスさせても有意差が認められなかった。そのため作表を省き p 値のみ提示する (父: $p = .114$ 、母: $p = .087$)。

有意差が認められなかった理由として、表 3-2 で分析したように、信仰者の子は「一般的に」宗教は危ないというイメージを持たれていることを内面化している可能性がある。日本社会では信仰を表明する者がマイノリティであることについては既に言及した。そして父母が信仰者であるが故に、周囲から異端視されることもあるかも知れない。ならば「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」という設問に有意差が認められなくとも不思議ではないだろう。

「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ。」(IV-1-③)についても、父母の信仰の有無で有意差は認められなかった (父: $p = .311$ 、母: $p = .665$)。現代日本において父母とこうした話をする機会がある家庭は一握りであろうから、こちらも有意差が認められなかったことに疑問はない。ただ、同じく宗教が公共空間に進出するものと解される「特定の宗教団体が特定の政党を支持するのはよくない。」(IV-1-④)について、父の信仰の有無では有意差が確認されなかったが ($p = .097$)、母の信仰の有無に有意差が確認された ($p = .007$)。

表 11-2 父母の信仰の有無と「特定の宗教団体が特定の政党を支持するのはよくない。」(IV-1-④)に関する行動のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
++	74	657	95(.652)	656(-.652)
+	41	412	38*(-2.993)	420*(2.993)
-	31	179	36*(2.255)	179*(-2.255)
--	11	65	13(1.169)	67(-1.169)

※* $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 (n = 1,470)、母の信仰の有無 (n = 1,504)。

本設問は宗教団体の政党支持に係る問題であるから、父母で有意差が認められるかどうかの説明には新宗教への参与率を見るのが適切であろう。表 7 で確認したように、信仰を持つ父母のうち新宗教への参与率は父が 27 名

で17.6%、母が53名で31.4%と母が有意に高い。そして政党支持に特に関わっていると目される創価学会を抜き出すと、その信者数(会員数)は父12名、母22名であった。

本検定は新宗教の信者に限ったものではないが、母が信仰を有しているケースにおいて、弱い肯定が1%有意水準で少なく、弱い否定が5%有意水準で多い。弱い賛否ながら、母が信仰を持つと子が宗教団体の政党支持に違和感を抱きにくいと解されよう。そしてこの傾向は、回答者本人が信仰を有しているケースと同様である(表3-4)。ブルデューが宗教教育を婉曲化された政治教育とみなす見解については先に引用した通りだが、本調査では、父よりも母が子の宗教・政治的見解に影響をもたらす傾向が確認された。

果たしてこの原因を上述の女性の新宗教参与に帰して良いのか、また他国では宗教・政治的教育は父母どちらの影響が強いかなど興味は尽きないが、それは本調査の手に余る課題である。そのため、上記結果のみを提示して次の議論へと進みたい。

続いて「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ。」(IV-1-⑤)とのクロス表を示す。こちらは先程と転じて父の信仰の有無に有意差が認められ、母には認められなかった(父: $p=.041$ 、母: $p=.255$)。

表11-3より、父が信仰を有しているケースでは5%有意水準で弱い否定が多く、それにわずかに届かないながらも強い肯定が確認された。前設問では母が信仰を持つケースで弱く宗教・政治活動を肯定していたことと対照的に、本設問では父が信仰を持つケースで街頭布教を否定していると約言できる。

表11-3 父母の信仰の有無と「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ。」(IV-1-⑤)に関する行動のクロス表(実数(調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
++	41(1.957)	256(-1.957)	41	268
+	63(-0.270)	542(0.270)	74	538
-	35*(-2.242)	407*(2.242)	46	408
--	18(1.336)	109(-1.336)	21	109

※ $p<.05$ 、* $p<.01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 (n=1,471)、母の信仰の有無 (n=1,505)。

結果が対照的であるならば、原因もまた同様に考えられよう。前設問ならびに表3-5にて言及したように、父の信仰対象は母と比較して新宗教が少ない。そして、街頭布教を行う主な宗教は一部の新宗教に限られる。回答者の父は伝統宗教に属する割合が高いため、母と比較して、街頭布教を行う宗教は父自身の信仰とはそぐわないように思われる。ならば、大学に在籍している子への宗教教育として、信仰を持つ父が街頭布教への注意喚起を行うことは自然であろう。

表11-4 父母の信仰の有無と「宗教を信じると、心のよりどころができる。」(IV-1-⑥)のクロス表(実数(調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
++	75**(5.638)	351*(-5.638)	79**(4.589)	362*(-4.589)
+	61(-1.903)	624(1.903)	70*(-2.233)	633*(2.233)
-	6*(-4.366)	230*(4.366)	12*(-3.541)	224*(3.541)
--	13(-.020)	111(.020)	19(1.130)	107(-1.130)

※ $p<.05$ 、* $p<.01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 (n=1,471)、母の信仰の有無 (n=1,506)。

表 11-5 父母の信仰の有無と「災害が起こった際に宗教は人々を支えることができる。」(IV-1-⑦) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
++	69 ^{**} (6.294)	281 ^{**} (-6.294)	80 ^{**} (6.749)	281 ^{**} (-6.749)
+	64(-.076)	541(.076)	67(-1.200)	550(1.200)
-	7 ^{**} (-5.855)	333 ^{**} (5.855)	19 ^{**} (-4.334)	330 ^{**} (4.334)
--	17(-.534)	162(.534)	16(-1.422)	165(1.422)

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 (n = 1,474)、母の信仰の有無 (n = 1,508)。

表 11-4 と表 11-5 とともに、父母双方の信仰の有無で有意差が認められた。回答の傾向もほぼ同様であるため、父母どちらか一方の信仰が回答者に影響を与えているとは認められない。メンタルとフィジカルの両面において、父母双方の信仰が回答者の宗教情操に引き継がれている様子が看取される。

さて、それでは回答者の宗教との関心と明確な結び付きが確認できなかったパワースポットについてはどうであろうか。これについては父の信仰の有無には有意差が認められず、母の信仰の有無にのみ有意差が認められた (父 : $p = .121$, 母 : $p = .018$)。

表 11-6 父母の信仰の有無と「パワースポットを訪れると、パワーをもらうことができる。」(IV-1-⑧) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
++	37	224	42 [*] (2.099)	222 [*] (-2.099)
+	63	606	65 ^{**} (-2.804)	619 ^{**} (2.804)
-	30	294	40(.069)	288(-.069)
--	27	191	35(1.583)	195(-1.583)

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 (n = 1,472)、母の信仰の有無 (n = 1,506)。

母が信仰を持つケースにおいて、5%有意水準で強い肯定が多く、1%有意水準で弱い肯定が少なかった。なお、パワースポットに対する意見を+/-の二値として母の信仰の有無と 2×2 で検定すると有意差が認められなくなる ($p = .216$)。4×2 の上表でも否定については有意差が認められないため、母の信仰は肯定の強弱に影響していると言える。本人の信仰ないし関心がパワースポットに対する意見と影響関係にあった表 3-8-1 に比して、パワースポットは父母の信仰からやや引き離された存在であると解釈できよう。

3-4. 父母の信仰が「宗教と教育に関する考え」に及ぼす影響

引き続き「宗教に関わる事柄への意見」から、「宗教と教育に関する考え」(IV-2-①~⑥) を父母の信仰とクロスし、傾向を確認していく。

表 12-1 父母の信仰の有無と「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい。」(IV-2-①) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
++	120 ^{**} (4.596)	758 ^{**} (-4.596)	126 ^{**} (2.901)	771 ^{**} (-2.901)
+	27 ^{**} (-3.918)	429 ^{**} (3.918)	40 ^{**} (-2.792)	428 ^{**} (2.792)
-	9(-.984)	105(.984)	10(.047)	101(-.047)
--	1(-1.309)	29(1.309)	2(-1.017)	30(1.017)

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 (n = 1,478)、母の信仰の有無 (n = 1,512)。

父母ともに、信仰を有しているケースで強い肯定が多く弱い肯定が少ない傾向が確認された。ただし否定についてはともに有意差が認められず、+/-の二値に丸めると父母ともに有意差が検出されなくなる(父: $p = .132$ 、母: $p = .184$)。4×2の上表から父母が信仰を持つと宗教知識教育への強いモチベーションになると解釈することも可能であるし、二値化した2×2の結果から影響関係は認められないと解することもできる。恣意性を排するため、これ以上は踏み込まないこととする。

表 12-2 父母の信仰の有無と「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」(IV-2-②) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
++	36 ^{**} (4.509)	139 ^{**} (-4.509)	37 ^{**} (3.819)	140 ^{**} (-3.819)
+	40(-.482)	358(.482)	46(-.605)	362(.605)
-	50(-1.928)	522(1.928)	70(-.097)	513(.097)
--	31(-.739)	293(.739)	29 [*] (-2.197)	306 [*] (2.197)

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 (n = 1,469)、母の信仰の有無 (n = 1,503)。

父母ともに信仰を持つケースで強い肯定をする傾向が認められた。父母の差異については、母が信仰を持つケースにおいて5%有意水準で強い否定が少ない。ただし、父が信仰を持つケースでも5%有意水準に少し届かないながら弱い否定が少ない。否定の強弱傾向にいささかの偏りがあったという程度とも解せるため、強調して分析すべき事項であるか悩ましい。

表 12-3 父母の信仰の有無と「道徳の授業をもっと充実させた方がいい。」(IV-2-③) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
++	67 ^{**} (3.739)	374 ^{**} (-3.739)	79 ^{**} (4.166)	377 ^{**} (-4.166)
+	44 [*] (-2.028)	479 [*] (2.028)	55(-.918)	483(.918)
-	27(-1.741)	309(1.741)	30(-1.604)	309(1.604)
--	18(-.036)	153(.036)	17 [*] (-2.043)	155 [*] (2.043)

※^{**} $p < .05$, * $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 (n = 1,471)、母の信仰の有無 (n = 1,505)。

父母ともに信仰を持つケースで強い肯定をする傾向が認められた。そして前設問と同様に、母が信仰を持つケースにおいて5%有意水準で強い否定が少ない。前設問と合わせて調整済み標準化残差を見ると、愛国心ならびに道徳教育については、母の信仰の有無によって子の意見が極端な方向に偏る可能性が示唆されよう。

続く「いのちの大切さを教える授業を充実させた方がいい。」(IV-2-④)では、父母の信仰の有無によって有意差が確認されなかったために作表を省く(父： $p = .185$ 、母： $p = .068$)。

因子分析を行った第3節4項において、道徳教育と命の大切さを教える教育を「宗教情操教育」ではなく「情操教育」と解したことを思い起こしていただきたい。そしてその「情操教育」は、因子間相関において他の因子と負の相関を持つケースが認められていた。前節ならびに本節では「宗教に関する意見」への回答を扱っているはずであるが、「いのちの大切さ」については父母の信仰の影響が確認されない。これもまた、回答者の心情において宗教と命の大切さとが結び付いていないことの傍証として捉えられるだろう。

「神社や寺院など、日本の伝統的宗教施設を見学する機会を設けた方がいい。」(IV-2-⑤)については、父の信仰の有無については有意差が認められたが、母には認められなかった($p = .101$)。

表 12-4 父母の信仰の有無と「神社や寺院など、日本の伝統的宗教施設を見学する機会を設けた方がいい。」(IV-2-⑤)のクロス表(実数(調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
++	73*(3.653)	420*(-3.653)	74	427
+	54(-1.914)	557(1.914)	66	560
-	17*(-2.825)	266*(2.825)	29	258
--	13(1.424)	72(-1.424)	13	78

※* $p < .05$ 、* $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 ($n = 1,472$)、母の信仰の有無 ($n = 1,506$)。

表 12-4 「伝統的宗教施設を見学する機会」については、表 11-2 および表 11-3 同様に、父母の片方にのみ有意差が認められた。ならば分析の一貫性を保ち、伝統宗教に属する割合の高い父と新宗教に属する割合の高い母という対立構造を本結果に適用するのが自然であろう。そのように考えれば、父に信仰があるケースで「伝統的宗教施設」を重んじることは理解できる。また、この結果から再び、伝統を保守する家父長制の影響を見出すことも不可能ではない。

本設問に議論を特化すると、「見学」という文言を回答者がどのように解釈したのかが気に掛かる。たとえば、墓参りや自宗教の集会に赴くことを「見学」とは言わない。前後に教育に係る設問が並んでいるのだから、回答者は学外実習や修学旅行を思い浮かべただろうか。解釈の内実は分からないが、過去に訪れた宗教施設での経験を有意義と思っているか否かによって意見が分かれることに異論はないだろう。ならば「宗教施設の見学」を学校行事等に限らずに、本節の趣意である父母の影響、つまり家族旅行での経験が回答に影響している可能性を視野に入れたい。

家族旅行の決定権はどちらかと言えば女性が握っているとされるもの(JTB 総合研究所 2014)、観光地を巡る際に、配偶者の意見が取り入れられないとは考えにくい。旅行する地域そのものは母が決めたとしても、その地域内で父が提案した「宗教施設の見学」が採用されることもあるだろう。そして信仰を持つ父が宗教施設の意義を子に伝えるシチュエーションは、さして困難な想像ではないと思われる。

こうした旅行を含む幼少期の文化的活動はブルデューの文化的再生産論において重要な論点であり、本設問で

は父の影響の強さが看取された。ただし旅行先の決定について、信仰者に限った統計は管見の限り見たことがない。宗教情操の継承を考える際に宗教とツーリズムの関係は根深いものと察せられるが、ブルデューが問題にした階層等に比して実証研究の蓄積は少ない。ここで表 12-4 を基にして仮説に仮説を重ねるような言葉を連ねているのは、何らかの分析結果を提示するというよりも、分析視角の提示を目的にしていると解していただければ幸いである。

本項最後の設問である「学校では受験や就職に必要な知識や技能を教えるだけでいい。」(IV-2-⑥)についても、母の信仰の有無による有意差が認められなかった ($p = .091$)。

表 11-2-5 父母の信仰の有無と「学校では受験や就職に必要な知識や技能を教えるだけでいい。」(IV-2-⑥) のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	父の信仰の有無		母の信仰の有無	
	はい	いいえ	はい	いいえ
++	16 ^{**} (2.628)	67 ^{**} (-2.628)	17	67
+	5 [*] (-2.351)	113 [*] (2.351)	11	110
-	55(-1.049)	519(1.049)	67	515
--	81(1.088)	620(-1.088)	87	636

※^{**} $p < .05$, ^{*} $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除き、父の信仰の有無 ($n = 1,476$)、母の信仰の有無 ($n = 1,510$)。

父が信仰を持つケースにおいて、1%有意水準で強い肯定が多く、5%有意水準で弱い肯定が少ない。ただし本設問も、本項冒頭の表 12-1 同様に+/-の二値に丸めると有意差が検出されなくなる ($p = .936$)。強いて解釈するならば、信仰を有する父の教育方針として、学校教育と宗教教育を切り離すべきとする層と学校教育にも宗教教育を取り入れるべきとする層が存在し、回答者がそれぞれを内面化していると捉えられよう。

さて、本節の目的は父母の信仰が回答者の宗教意識に及ぼす影響を確認することであった。簡単に振り返ると、まずは回答者の信仰もしくは宗教への関心は父の信仰の有無によって偏りがみられた。本稿ではこの結果について「イエ」概念を用い、家督および祭祀承継の問題として考察している。「イエ」と墓の結び付きは日本宗教の特徴であり、墓は強固に「制度化/客体化された文化資本」であると言えよう。墓制について他宗教/他地域との比較を行いたいところだが、それは調査報告である本稿で扱いうる範疇を超えるために扱わなかった。

そして特に情操的な部分に係る「身体化された文化資本」について、父母の信仰の有無を説明変数として「宗教に関わる事柄への意見」にどのような影響がみられるのかを詳らかにした。設問によっては父ないし母の影響が色濃く看取されるもの、あるいは父母の信仰と独立していたものなど、様々な状況が認められた。詳細を繰り返すことはしないが、情操面において父母および子は一枚岩ではありえず、それぞれの設問で特徴が見出せたように思われる。本節の分析が信仰継承に係る問題に棹さし、貢献できることを願う。

4. 結びにかえて

本稿の目的は信仰層と関心層の違いを浮かび上がらせること、ならびに父母の信仰が回答者の宗教意識にもたらす影響を確認することであった。双方に通底する問題意識は、宗教的文化資本の在り方を本調査結果から析出することである。以下、それぞれについて簡単にまとめて結びとしたい。

信仰層と関心層については、両者ともに宗教に対してポジティブな意見を有している。それは半ば当然ながら、種々の設問から差異が認められたように思われる。まず、信仰層と関心層は信者と非信者と換言され、その属する界の違い故に、宗教を擁護する傾向が異なると言える。信者であれば自宗教と比較して他宗教を批判すること

もあるだろうが、非信者の解釈枠組みからすれば、対立するものは自宗教と他宗教ではなく、あくまで宗教と非宗教である。信仰層と関心層が象徴闘争を行うに際して、宗教界で自宗教を卓越化させる戦略と、社会界で宗教を卓越化させる戦略は異なることが看取された。

また、関心層の宗教的ニーズについて、「道徳」や「いのちの大切さ」といった項目は埒外にあることが認められた。先の解釈枠組みの問題と紐付けるならば、非信者が社会界で耳にする「道徳」は宗教のそれではない。関心層が宗教に求めているのは、道徳の授業を想起させる情操教育ではないのである。それではパワースポットの如きものが宗教関心層の需要を満たすかと言えば、どうやら宗教とパワースポットは同一視できないようであった。パワースポットは「宗教にあまり関心がない」層にはやや訴求するようだが、関心層に強く響いているとは言い難い。

量的調査から関心層の需要の具体像を導き出すことは難しいが、宗教知識教育が強く求められていることが認められたのは大きな収穫であろう。理論的には、現代社会は浮遊した宗教的シンボルがかつてないほどに溢れた環境にある。しかし実際には、関心層であってもそれらにアクセスするための宗教的リテラシが必要である。宗教的リテラシは信仰層であれば当然のように持ち合わせているために、教育機関での宗教知識教育に頼る必要がない。信仰者が家庭で獲得する宗教的文化資本を、非信者は持ち合わせていないだろう。父母から継承されなかった宗教的文化資本を教育に求めることは必然ながら、宗教文化教育に関わる者として喜ばしく思う。

父母の信仰については、総じて父母が信仰を有するケースで宗教にポジティブな回答が認められた。名目的な信仰は男系継承が目につくものの、こと宗教情操に関する意見では父母双方からの影響が様々で総括しにくい。特徴的なのは「政党支持」や「街頭布教」について母が信仰を有するケースで、父と比較して肯定ないし問題ないと判断する傾向が確認されたことであろう。本稿ではこうしたケースについて、母が新宗教の信者である割合が有意に多いことを原因として挙げた。新宗教研究における女性信者への注目に悼さず分析である。

父母の信仰継承は男性に偏っており、ここに「イエ」制度の影響が見て取れる。「人生に悩んだとき相談したい宗教家」では男性が伝統宗教へ、女性が民間霊能者へという偏向が確認されたことも、「イエ」制度に接続されるであろう。伝統宗教において、「イエ」とそれに結び付いた墓の祭祀承継は未だ男性の役割と目されているようである。

冒頭で述べたように、本稿は『第13回学生宗教意識調査』を筆者の問題関心から分析したものである。筆者の関心と力量では十全な分析に程遠いが、大規模かつ統計的な実証研究が不足しがちな日本の宗教社会学において、本調査データの有用性の一端でも伝わったならば幸甚である。

引用文献

- 石井研士 2007 『データブック現代日本人の宗教増補改訂版』新曜社
- 稲葉圭信 2012 「東日本大震災における宗教者と宗教研究者」『宗教研究』86(2): 29-52
- 稲葉圭信・川端亮 2020 「自治体と宗教施設・団体との災害時協力に関する調査報告」『宗教と社会貢献』10(1): 17-29
- いしいさや 2017 『よく宗教勧誘に来る人の家に生まれた子の話』講談社
- 井上順孝 2003 「現代学生が示す宗教への意識と態度——一九九二年～二〇〇一年のアンケート調査の分析」『國學院大學日本文化研究所紀要』第92輯: 15-52
- 猪瀬優理 2011 『信仰はどのように継承されるか——創価学会にみる次世代育成』北海道大学出版会
- カサノヴァ, J. 1994(1997) 『近代世界の公共宗教』津城寛文訳、玉川大学出版部

- 木村雅文 2002 「現代日本人の宗教意識——JGSS-2000 からのデータを中心として」『JGSS で見た日本人の意識と行動——日本版 General Social Surveys 研究論文集』1: 125-134
- 2003 「現代日本人と“家の宗教”——JGSS-2000/2001 からのデータを中心として」『JGSS で見た日本人の意識と行動——日本版 General Social Surveys 研究論文集』2: 145-162
- ギデンズ, A. 1990(1993) 『近代とはいかなる時代か? ——モダニティの帰結』而立書房
- 小林利行 2019 「日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか——ISSP 国際比較調査「宗教」・日本の結果から」『放送研究と調査』APRIL: 52-72
- 桜井義秀・吉野航一・寺沢重法 2011 「宗教の社会貢献活動 (1) ——問題の射程と全国教団調査」『北海道大学文学研究科紀要』133: 103-154
- JGSS 研究センター 2017 『日本版 General Social Surveys 基礎集計表・コードブック JGSS-2016』JGSS 研究センター
- 櫻井義秀 2011 「ソーシャル・キャピタル論の射程と宗教」『宗教と社会貢献』1 (1) : 27-51
- JTB 総合研究所 2014 JTB 総合研究所 2014 「女性の時間の使い方と旅行に関する調査」
(https://www.tourism.jp/wp/wp-content/uploads/2014/05/research_140529_woman-travel.pdf, 2022.3.7)
- 西山茂 1988 「現代の宗教運動 霊術系新宗教の流行と二つの近代化」西山ほか編『現代人の宗教』有斐閣: 169-210
- 庭野平和財団 2019 「世論調査：日本人の宗教団体への関与・認知・評価の 20 年——1999 年・2004 年・2009 年・2019 年の世論調査から」
(https://www.npf.or.jp/pdf/2019_research.pdf, 2022.3.7)
- バウマン, Z. 2000(2011) 『リキッド・モダニティ——液状化する社会』森田典正訳、大月書店
- ブルデュー, P. 1979a(1990) 『ディスタンクシオン——社会的判断力批判』I、石井洋二郎訳、藤原書店
- 1979b(1990) 『ディスタンクシオン——社会的判断力批判』II、石井洋二郎訳、藤原書店
- Beckford, James A., 2001, "Social Movements as Free-floating Religious Phenomena", Richard K. Fenn(ed.), *Sociology of Religion*, Blackwell, 229-248
- 堀江宗正 2019 『ポップ・スピリチュアリティ——メディア化された宗教性』岩波書店
- 山中弘 2017 「消費社会における現代宗教の変容」『宗教研究』91 (2) : 255-280
- 弓山達也 2010 「日本におけるスピリチュアル教育の可能性」『宗教研究』84 (2) : 349-373

宗教教育とジェンダー

— 「隠れたカリキュラム」概念に着目して—

丹羽宣子¹

はじめに

「2020年度学生宗教意識調査報告(改訂版)」では宗教系/非宗教系大学を比較して記述しているが、両者間で有意差がみられなかった設問でも、宗教系大学を神道系・仏教系・キリスト教系に分けて検定すると有意差が確認できるものがみられた。また、宗教系/非宗教系大学で有意差が認められたものも、ある宗教系大学の学生の回答行動が「宗教系大学」全体の結果に大きな影響を与え、むしろ他宗教系大学の学生には異なる傾向が認められるものもあった。それらの代表的なものが「Ⅵ. 天皇の即位に関して」と「Ⅷ. 宗教とジェンダーについて」である。

本稿は、上記2項目を中心に、宗教系学校に所属経験のある学生の宗教意識とその背景を検討しようとするものである。ここで「宗教系学校」としたのは、宗教別大学の比較だけではなく、出身高校にも着目していくからである。

第1節では宗教系大学を神道系/仏教系/キリスト教系大学の別による検定結果を確認していく。これまでは「宗教系大学」とひとつのカテゴリーとなっていたこれらの大学であるが、先述のようにそれぞれに異なる傾向が確認できる。続く第2節では、宗教系高校を卒業したと回答した者たちに焦点を当てていく。予め示しておく、一部の設問では同じ宗教の大学と高校で回答行動に異なる傾向がみられた。そして第3節では、大学と高校における宗教教育の違いと、宗教系学校における「隠れたカリキュラム」の影響可能性を指摘する。宗教系高校を卒業していることと宗教系大学に所属していることの別について、試論的に考えていくのが本稿の目的である。

本調査で宗教系大学に在籍している回答者は705名である。宗教系大学別では、神道系大学は179名(11.3%)、仏教系大学341名(21.5%)、キリスト教系大学185名(11.7%)であった。なお本調査では新宗教立の大学からはアンケートを取っていない。また、出身高校は公立高校919名(56.3%)、一般の私立高校460名(28.2%)、キリスト教系高校98名(6.0%)、仏教系高校95名(5.8%)、神道系高校12名(0.7%)、その他の宗教系高校5名(0.3%)である。神道系高校とその他の宗教系高校出身者はそれぞれ1%に満たないので十分なサンプルサイズがあるとはいえない。そのため非宗教系高校(公立高校・一般の私立高校)と仏教系高校、キリスト教系高校で検定をしていく。

1. 宗教系大学別にみる学生宗教意識

1-1 天皇の即位に関して

2020年度調査では、天皇の即位をめぐる問題、女系天皇についての意見、ジェンダー問題への意識など、社会的関心事や重要とされる課題に関する設問が設定されている。これらの設問については宗教系大学別に回答傾向が異なるのであるが、まずは即位に関する儀礼(Ⅵ-1)から確認していきたい。

「即位に関する諸行事に実際に出掛けましたか」(Ⅵ-1-1)については、1%有意水準で宗教系大学は「はい」、非宗教系大学は「いいえ」を選択する傾向が認められた(詳細は「2020年度学生宗教意識調査報告(改訂版)」参照のこと)。では「即位に関する諸行事に実際に出掛け」た宗教系大学の学生とは誰だろうか。

¹ 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所客員研究員

表1-1 「即位に関する諸行事に実際に出掛けましたか」(VI-1-1)の宗教系大学別のクロス表(実数(調整済み残差))

	神道系	仏教系	キリスト教系
1.はい	41** (8.540)	14** (-3.636)	1** (-4.333)
2.いいえ	134** (-6.811)	313** (2.904)	176** (3.451)
3.回答なし	4 (-.907)	12 (.379)	7 (.468)

※* $p < .05$, ** $p < .01$ 。「空欄 (NA)」を除く。以下同。(n = 702)

大方の予想通り、神道系大学は1%有意水準で「はい」と回答する傾向が認められる。宗教系大学/非宗教系大学に現れた有意差は、神道系大学の学生の回答に牽引されたものだといえるだろう。割合を示すと、「はい」は神道系大学22.9%、仏教系大学4.1%、キリスト教系大学0.5%となる。なお、神道系大学の神道系学部とそれ以外の学部も検定したが、学部による有意差は認められなかった($p = .273$)。神道系学部以外でも約2割が出掛けたと回答している。

「即位に関連する諸行事をテレビやネットで見ましたか」(VI-1-2)は宗教系/非宗教系、男女ともに有意差が認められなかったが(それぞれ $p = .444$, $p = .270$)、宗教系大学の別でも同様であった($p = .297$)。天皇代替わりについては総じて神道系大学の学生の反応が高かったが、この設問には有意差はみられない。各局で即位に関する儀礼はテレビ中継され、翌日朝のニュース番組でも映像が流れ、ネットニュースでも配信されていたことを考えれば、当然の結果といえるかもしれない。

「大嘗祭」の認知度(VI-1-3)については、全体で68.2%の学生が知っていると答えている。宗教系/非宗教系大学では有意差は認められなかったが($p = .159$)、神道が皇室と深い関係をもつことをふまえれば、神道系大学の学生は他大学の学生より認知度が高かったことは予想される。宗教系大学別にその傾向を確認したのが表1-2である。

表1-2 「大嘗祭という言葉を知っていますか」(VI-1-3)の宗教系大学別のクロス表(実数(調整済み残差))

	神道系大学	仏教系大学	キリスト教系大学
1.はい	173** (9.041)	221* (-2.515)	96** (-6.104)
2.いいえ	6** (-8.825)	114* (2.518)	85** (5.886)
3.回答なし	0 (-1.441)	3 (.088)	3 (1.328)

(n = 701)

1%有意水準で神道系大学の学生は「大嘗祭」を知っていると答える傾向があることが確認できる。その割合は他と比べて圧倒的であり、96.6%に達する。神道系大学の「いいえ」はわずか3.4%に過ぎない。また、キリスト教系大学の学生も特徴的な傾向を示しており、知っていると答えた者は辛うじて半数を超えるが、他に比べて52.2%と低い。仏教系大学の学生の認知度は65.4%であった。

大学生世代の皇位継承に関する意識を尋ねたのが「VI-2. 女系天皇について」の各設問である。詳細は「2020年度学生宗教意識調査報告(改訂版)」を参照されたいが、まず天皇は男性に限るとする現憲法に対する意見(VI-2-1)から確認しよう。ここでは男女と宗教系/非宗教系大学で有意差が確認された。「男系に限った方がよい」は男性・宗教系大学が、「女性もなれるようにした方がよい」は女性・非宗教系大学が支持する傾向がある。宗教系大学別ではどうだろうか。

表1-3 「いまの法律では天皇は男性に限られています。このことについてどう思いますか。」(VI-2-1)の宗教系大学別のクロス表(実数(調整済み残差))

	神道系大学		仏教系大学		キリスト教系大学	
1.男性に限った方がよい	40**	(4.515)	36	(-1.626)	13**	(-2.630)
2.女性もなれるようにした方がよい	95	(.180)	177	(-.297)	97	(.159)
3.分からない	27	(-1.826)	63	(-.837)	49**	(2.766)
4.関心がない	11**	(-3.191)	59**	(3.220)	22	(-.498)
5.回答なし	5	(1.794)	4	(-.542)	1	(-1.164)

(n = 669)

表1-3にあるように、「男性に限った方がよい」は1%有意水準で神道系大学の学生が支持する傾向が認められる。「分からない」を支持する傾向がみられるのはキリスト教系大学である。「関心がない」は仏教系で高く、神道系で低い。ただし「女性もなれるようにした方がよい」に有意差はみられない。

続く設問は、「天皇の位をめぐることは、男系に限るか女系を認めるかという議論があります。このことについてどう思いますか。」(VI-2-2)である。ここでもあきらかな差が現れた。神道系大学とキリスト教系大学の回答傾向に大きな違いがある。「男性に限ったほうがよい」は1%有意水準で神道系大学の学生が支持する傾向がみられ、「女性もなれるようにした方がよい」「関心がない」は支持されにくい。割合を示すと、「男系に限る」は神道系39.0%に対し、キリスト教系9.8%である。キリスト教系大学では「違いが分からない」を1%有意水準で選択する傾向があり、「男性に限った方がよい」を選択するキリスト教系大学の学生は少ない傾向にあることも確認できる(表1-4)。

表1-4 「天皇の位をめぐることは、男系に限るか女系を認めるかという議論があります。このことについてどう思いますか。」(VI-2-1)の宗教系大学別のクロス表(実数(調整済み残差))

	神道系大学		仏教系大学		キリスト教系大学	
1.男系に限った方がよい	69**	(6.655)	62	(-1.877)	18**	(-4.440)
2.女系もなれるようにした方がよい	70**	(-2.866)	176	(1.570)	96	(1.048)
3.違いが分からない	20	(-1.139)	41	(-1.308)	36**	(2.610)
4.関心がない	10**	(-2.849)	47	(1.839)	24	(.727)
5.回答なし	8	(.068)	13	(-.740)	10	(.773)

(n = 700)

NHKが2019年10月に行った調査によれば、女性が天皇になることを認めることについては、全ての年代で賛成が7割を超える。全世代平均は賛成74%と多数ではあるが、大学生世代に重なる18~29歳は90%が賛成と回答し、年齢が若いほど賛成が多数を占める傾向が指摘されている。また女系天皇の意味を「知らない」は全体で52%であったが、18~29歳では81%が「知らない」と回答している[荒牧2020]。

大学生を対象とする本調査と比較すると、女系天皇に関する質問(VI-2-1)で「違いが分からない」は全体で13.9%にとどまる。「違いが分からない」と回答する傾向が1%有意水準で認められたキリスト教系大学の学生であってもその割合は19.6%であった。調査方法が異なるため単純な比較は慎むべきだが、18~29歳で8割強が女系天皇の意味を「知らない」と答えた前掲のNHK調査と異なり、本調査の回答者である宗教学を履修する大学生たちは、その意味を認識していた傾向があったことは指摘できるだろう。

「IV. 天皇の即位に関して」にみられる宗教系大学別の傾向は、次のようにまとめることができる。即位に関する諸行事に実際に出掛けていたのは神道系大学の学生が多数を占める。神道系学部とそれ以外の学部には有意差はなく、神道系学部以外の学生も約2割が出掛けたと答えている。女性/女系天皇についての意見は宗教系大学ごとに異なる傾向が析出できた。神道系大学は「男性/男系に限る」を支持する傾向が強く、キリスト教系大学では支持されにくい傾向がある。またいずれの設問も神道系では「関心がない」は少数である。皇室と関係のある神道が運営母体である神道系大学の特色を強く反映しているものだろう。

1-2 宗教とジェンダーについて

これまでの学生宗教意識調査でも宗教とジェンダー問題に関する設問は、第5回調査（1999年度）より第9・12回を除いて設定されている²。このうち、教団内地位や女人禁制に関わる質問の選択肢は、従来調査で「差別だと思う」「差別だと思わない」「分からない」としていたものを、今回は「差別だと思うが仕方がない」「差別だと思うので見直すべき」「差別だと思わない」「分からない」に変更され、差別か否かだけでなく、それに対する自身の考えも尋ねる設計に修正された。

「2020年度学生宗教意識調査報告（改訂版）」でも示されたが、女性の方が宗教とジェンダーの問題に敏感に反応し、批判的な回答をしている。「宗教によっては女性が教団の特定の役職や地位につけないことがあります。これは差別だと思いませんか。」(VIII-1)、「宗教によっては、山など一部の神聖な場所には、女性が入ってはいけないとすることがありますが、これは差別だと思いませんか。」(VIII-2)、「宗教によっては、同性愛を禁じているところがあります。これについてあなたはどう思いますか。」(VIII-3)、「宗教によっては、妊娠中絶を禁じているところがあります。これについてあなたはどう思いますか。」(VIII-4) それぞれに批判的態度を示す選択肢を1%有意水準で女性が選択している。他方、これらの問題について宗教系/非宗教系大学では全て有意差がみられなかった。

しかし宗教によっては男女で異なる役割が期待される傾向は根強くある。司祭とシスターのように、宗教的職位と身体的性差は不可分なものとされることもある。女性牧師という言葉は使われても男性牧師の語が一般的ではないように、住職配偶者を寺族婦人・寺庭婦人と呼ぶように、多くの教団内の特定の地位・役割・身分にはジェンダーが作用する。また既成宗教の上層部は男性が占めていることも、教団内のジェンダー格差を示すものといえよう。また、男女の規範に関する教えは宗教によってそれぞれに異なる。では、宗教教団が運営母体にある宗教系大学をそれぞれに確認すると、所属する学生たちにはどのような傾向がみられるのであろうか。

教団内役職・地位を性別によって制限することについての意見(VIII-1)から確認しよう。「差別だと思うが仕方がない」に差はみられないが、「差別だと思うので見直すべき」は1%有意水準で仏教系大学が支持する傾向がみられる。神道系大学では「差別だと思わない」が同じく1%有意水準で支持され、「差別だと思うので見直すべき」は他宗教系大学に比べてそれが支持される傾向は低い。キリスト教系大学では「分からない」が1%有意水準で多い。「差別だと思わない」は支持されにくい傾向も確認できる（表1-5）。

女人禁制(VIII-2)については、神道系大学は「差別だと思わない」を1%有意水準で、「差別だと思うが仕方がない」を5%有意水準で支持する傾向がみられる。仏教系大学とキリスト教系大学は1%有意水準で「差別だと思うので見直すべき」とする傾向が確認できる。キリスト教系大学では「差別だと思わない」を、神道系大学では「差別だと思うので見直すべき」は支持されにくい傾向もみられる（表1-6）。

教団内役職・地位を性別によって制限、あるいは分離させることについて、神道系大学では肯定的態度をとり、仏教系大学では是正すべきとする傾向が確認できる。また特定の場所への女性の立入禁止についても、神道系大学ではこれを肯定し、仏教系とキリスト教系大学では見直しを求める意見が支持されている。

² 第5回調査（1999年度）のみ、妊娠中絶に関する質問は掲載されていない。

表1-5 「宗教によっては女性が教団の特定の役職や地位につけないことがあります。これを差別だと思いませんか。」(VIII-1)の宗教系大学別のクロス表(実数(調整済み残差))

	神道系大学		仏教系大学		キリスト教系大学	
1.差別だと思うが仕方がない	53	(1.078)	86	(-.676)	47	(-.303)
2.差別だと思うので見直すべき	57**	(-3.735)	166**	(2.671)	84	(.668)
3.差別だと思わない	47**	(5.665)	39	(-1.632)	10**	(-3.767)
4.分からない	22	(-1.560)	48	(-1.271)	42**	(2.995)

(n = 701)

表1-6 「宗教によっては、山など一部の神聖な場所には、女性が入ってはいけないとすることがありますが、これは差別だと思いませんか。」(VIII-2)の宗教系大学別のクロス表(実数(調整済み残差))

	神道系大学		仏教系大学		キリスト教系大学	
1.差別だと思うが仕方がない	59*	(2.136)	80	(-1.839)	49	(-.029)
2.差別だと思うので見直すべき	39**	(-6.393)	164**	(3.302)	92**	(2.592)
3.差別だと思わない	60**	(6.902)	48	(-1.814)	10**	(-4.790)
4.分からない	21	(-1.073)	46	(-.391)	32	(1.510)

(n = 700)

では同性愛と宗教(VIII-3)ではどうだろうか。これについても神道系大学とキリスト教系大学に明確な違いが現れた。神道系大学の学生は宗教が同性愛を禁じることに肯定的、キリスト教系大学の学生は否定的である(表1-7)。妊娠中絶と宗教(VIII-4)については、神道系大学の学生は1%有意水準で宗教は「関与していい」とする傾向がある。キリスト教系大学の学生は、宗教が妊娠中絶を禁じることを肯定する選択肢は支持されにくい(表1-8)。

表1-7 「宗教によっては、同性愛を禁じているところがあります。これについてあなたはどのように思いますか。」(VIII-3)の宗教系大学別のクロス表(実数(調整済み残差))

	神道系大学		仏教系大学		キリスト教系大学	
1.関与していい	56**	(4.741)	65	(-.037)	14**	(-4.657)
2.関与すべきではない	81**	(-3.580)	192	(-.030)	125**	(3.582)
3.分からない	42	(-.221)	82	(.069)	45	(.141)

(n = 702)

表1-8 「宗教によっては、妊娠中絶を禁じているところがあります。これについてあなたはどのように思いますか。」(VIII-4)の宗教系大学別のクロス表(実数(調整済み残差))

	神道系大学		仏教系大学		キリスト教系大学	
1.関与していい	48**	(3.336)	52	(-.610)	17*	(-2.462)
2.関与すべきではない	86*	(-2.091)	211	(.449)	126	(1.453)
3.分からない	45	(.543)	77	(-.207)	41	(-.255)

(n = 703)

宗教とジェンダーの問題について、宗教系／非宗教系大学の比較ではみられなかった有意差も、神道／仏教／キリスト教系大学別に検定するとそれぞれの傾向があることが確認できる。特に注目すべきは、神道系大学とキリスト教系大学で対照的な回答傾向がみられたことだろう。神道系大学の学生は、宗教集団内で女性の立場・役割を限定することを容認する傾向があり、聖地等における女人禁制を「差別だと思わない」また「差別だと思うが、仕方がない」という意見が支持されやすい。同性愛や妊娠中絶を宗教が禁ずることも肯定的である。それに対してキリスト教系大学の学生は、宗教が女性に制限を設けること、同性愛や妊娠中絶を宗教が禁ずることに否定的である。

しかし、宗教系大学ごとに確認できる傾向が、その宗教の教えを反映しているわけでは必ずしもないことは確認しておきたい。確かに神道には巫女という女性限定の役割があるが、巫女になるにあたり資格は必要とされていない。聖職者層にあたる神職として神社に奉職する女性は、むしろ仏教教団における女性僧侶よりその割合は高い傾向にある³。男性住職の配偶者である寺族／坊守／寺族婦人／寺庭婦人といった妻・母役割を求められる教団内役割も、神道にはみられない。同性愛や人工妊娠中絶の是非が争点になるのは、むしろキリスト教団においてである。

宗教系大学の別にみられる傾向の背景には、いわゆる「校風」の影響が大きいことは予想されよう。校風を計量的に示すことは難しいが、とはいえ神道系大学には「日本古来の伝統や文化」を大切にする校風があるといっていだろう。キリスト教系大学は留学制度が充実しているなど、国際交流が盛んなイメージがあるかもしれない。進路選択の際、これらの校風がある程度の影響を与えていることは想像に難くない。実際に、リクルート進学総研が2019年3月高校卒業の男女を対象に行なった調査では、進学先検討時の重視項目は「校風や雰囲気がいいこと」は「学びたい学部・学科・コースがあること」(80.4%)に次いで2位(47.9%)であった。また、入学にあたって不安に感じることを複数回答で訪ねた設問でも「校風や雰囲気に馴染めるか」は32.0%と、3分の1の学生が校風を強く意識していることがわかる⁴。宗教系大学に通う学生の進路選択に宗教立であることがプラスに作用した人とマイナスに作用した人はほぼ半々であったとの指摘があるが[井上 1993:8]⁵、「校風や雰囲気」の影響は無視できまい。

校風が宗教系大学に通う学生の回答傾向に与えた影響を探るために、「日本古来の伝統や文化」に親和性が高いと思われる愛国心教育の是非(IV-2-②)と伝統的宗教施設の見学(IV-2-⑤)を宗教系大学別に検定したものが表1-9と表1-10である。愛国心教育の是非については、1%有意水準で神道系大学は強い肯定である「そう思う」を支持する傾向が認められる。キリスト教系大学は5%有意水準で「どちらかといえばそう思わない」を支持する傾向がみられる。伝統的宗教施設の見学についても、神道系大学は1%有意水準で「そう思う」を支持する傾向が確認できるが、キリスト教系大学は「そう思う」に否定的傾向がみられる。他方、道徳の授業の拡充(IV-2-③)といのちの大切さに関する授業(IV-2-④)は宗教系大学の別で有意差が認められなかった(道徳： $p=.245$ 、いのちの大切さ： $p=.158$)。宗教と教育への意見を尋ねる設問において、愛国心や伝統的宗教施設見学に神道系大学の学生が肯定的態度を示していることは、日本文化や伝統といったものが重視される校風、あるいは学校文化があることの現れであるといえよう。

³ 『宗教年鑑(令和2年度版)』によれば、神社本庁管轄の教師は男性83.4%、女性16.6%である。仏教は宗派によりその比率は大きく異なるため一部となるが、曹洞宗の女性教師比率は2.9%、浄土宗9.0%、日蓮宗11.1%、浄土真宗本願寺派14.4%となっている。

⁴ リクルート進学総研「進学センサス2019—高校生の進路選択に関する調査」より。

⁵ 井上順孝が1922年におこなった調査によると、宗教系大学に在籍する学生が受験前に宗教立の大学であることを知っていたのは91.5%と高い水準にあるが、知っていたと回答している者のうち受験意欲にプラスに働いたと答えたのは15.1%にとどまる[井上 1993]。

表 1-9 「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」の宗教系大学別クロス表(実数(調整済み残差))

	神道系大学		仏教系大学		キリスト教系大学	
1.そう思う	43**	(4.050)	48	(-.635)	14**	(-3.270)
2.どちらかといえばそう思う	45	(-.878)	101	(.894)	51	(-.149)
3.どちらかといえばそう思わない	61	(-.654)	117	(-1.228)	79*	(2.039)
4.そう思わない	27	(-1.836)	74	(1.040)	40	(.629)
	(n = 700)					

表 1-10 「神社や寺院など、日本の伝統的宗教施設を見学する機会を設けた方がいい。」の宗教系大学別クロス表(実数(調整済み残差))

	神道系大学		仏教系大学		キリスト教系大学	
1.そう思う	81**	(2.835)	121	(-.573)	55*	(-2.158)
2.どちらかといえばそう思う	69	(-.147)	128	(-.833)	78	(1.094)
3.どちらかといえばそう思わない	23*	(-2.185)	69	(1.254)	37	(.738)
4.そう思わない	5	(-1.929)	22	(.847)	13	(.948)
	(n = 700)					

2. 出身高校別にみる学生宗教意識

2-1 非宗教高校／仏教系高校／キリスト教系高校の別にあらわれた有意差

前節で確認してきたように、キリスト教系大学の学生にはいわゆるリベラルな回答傾向がみられる。しかしここから確認していくように、キリスト教系高校出身の学生はそれとは反転する意見・立場を示す傾向がいくつかの設問で確認できた。

女系天皇についての意見から確認してきた。作表は省くが、現行法では天皇は男性に限るとすることへの意見 (VI-2-1) は、「分からない」が 5%有意水準で仏教系高校出身者に多い。他の項目には有意差が現れなかったため、仏教系高校の出身者は慎重な回答をしているとも読める。

女系天皇への意見 (VI-2-2) には注目すべき有意差が現れた。表 2-1 にあるように、キリスト教高校の出身者は、5%有意水準で「男系に限った方がよい」を支持する傾向がみられたのだ。男系支持は全体 17.2%、キリスト教系出身者 25.5%である。なおこの設問の宗教系別検定では、キリスト教系大学では「男系に限った方がよい」を支持されにくい傾向が確認されている (表 1-4)。

表 2-1 「天皇の位をめぐるっては、男系に限るか女系を認めるかという議論があります。このことについてどう思いますか。」 (VI-2-2) の非宗教系・仏教系・キリスト教系高校のクロス表 (実数 (調整済み残差))

	非宗教高校		仏教系高校		キリスト教系高校	
1.男系に限った方がよい	226	(-1.653)	16	(-.009)	25*	(2.240)
2.女系もなれるようにした方がよい	730	(1.313)	44	(-1.160)	49	(-.642)
3.分からない	196	(1.282)	13	(-.009)	8	(-1.723)
4.関心がない	156	(.414)	10	(-.191)	10	(-.373)
5.回答なし	50**	(-3.001)	10**	(3.197)	6	(.943)
	(n = 1,549)					

宗教とジェンダーについての設問はどうだろうか。「同性愛と宗教」(VIII-3)と「妊娠中絶と宗教」(VIII-4)は有意差が認められなかった(同性愛と宗教： $p=.177$ 、妊娠中絶と宗教： $p=.388$)が、「役職・地位からの女性の排除」(VIII-1)と「女人禁制」(VIII-2)に有意差が確認できる。

表2-2と表2-3にあるように、いずれも5%有意水準で「差別だと思うが仕方がない」をキリスト教系高校出身者が支持する傾向が確認できる。表1-6で示したが、女人禁制についてキリスト教系大学の学生は積極的に是正すべきとする「差別だと思うので見直すべき」を1%有意水準で支持する傾向がみられていた。

表2-2 「宗教によっては女性が教団の特定の役職や地位につけないことがあります。これを差別だと思いませんか。」

(VIII-1)の非宗教系仏教系・キリスト教系高校のクロス表(実数(調整済み残差))

	非宗教高校	仏教系高校	キリスト教系高校
1.差別だと思うが仕方がない	356 (-1.916)	27 (.507)	36* (2.082)
2.差別だと思うので見直すべき	628 (1.062)	43 (.186)	38 (-1.603)
3.差別だと思わない	164 (1.304)	7 (-1.256)	10 (-.541)
4.分からない	223 (-.263)	16 (.228)	17 (.133)
			(n = 1,549)

表2-3 「宗教によっては、山など一部の神聖な場所には、女性が入ってはいけないとすることがありますが、これは差別だと思いませんか。」(VIII-1)の非宗教系仏教系・キリスト教系高校のクロス表(実数(調整済み残差))

	非宗教高校	仏教系高校	キリスト教系高校
1.差別だと思うが仕方がない	378 (-1.112)	23 (-.558)	36* (2.035)
2.差別だと思うので見直すべき	577 (.680)	41 (.722)	33 (-1.612)
3.差別だと思わない	217 (.504)	14 (-.040)	13 (-.640)
4.分からない	201 (-.053)	13 (-.254)	16 (.317)
			(n = 1,549)

なお、ジェンダーに関する設問は男女の回答傾向に違いが大きかったので、キリスト教系高校の男女別検定を行ったところ、「役職・地位からの女性の排除」(VIII-1)と「女人禁制」(VIII-2)は前者が $p=.858$ 、後者は $p=.524$ と有意差は認められなかった。

このように、宗教系高校の別ではジェンダーに関わる設問に有意差が確認される。キリスト教系高校出身者は宗教が女性に何かしらの制限をかけることを消極的に容認する傾向がみられ、またキリスト教系高校の男女の別には有意差は認められない。念の為、宗教系大学の別でも言及した「IV-2. 宗教と教育に関する考え」の出身高校別傾向も提示しよう。「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的知識を学んだ方がいい。」($p=.132$)、「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」($p=.634$)、「道徳の授業をもっと充実させた方がいい。」($p=.567$)、「いのちの大切さを教える授業を充実させた方がいい。」($p=.521$)、「神社や寺院など、日本の伝統的宗教施設を見学する機会を設けた方がいい。」($p=.545$)で、非宗教系高校/仏教系高校/キリスト教系高校に有意差はみられない。「学校では受験や就職に必要な知識や技能を教えるだけでいい。」は4件法で仏教系高校が1%有意水準で「どちらかといえばそう思わない」を、キリスト教系高校が5%有意水準で「そう思わない」を支持する傾向が確認されるものの、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の2値で改めて検定すると、有意差は確認できなくなる($p=.823$)。なぜジェンダーに関わる設問にこのような傾向が見受けられるのだろうか。以下ではこの傾向の意味について仮説的な考察を行っていききたい。

3. 宗教教育と「隠れたカリキュラム」

3-1 大学と高校における宗教教育

宗教系大学別による検定では、神道系大学の学生は天皇の位は男系男子が継承するとする現行の皇室制度の維持を支持し、キリスト教系大学では支持されにくい傾向が確認できた。また、キリスト教系大学の学生は、宗教が女性に何かしらの制限を与えることに否定的傾向がみられる。他方、キリスト教高校の出身者は、天皇の位の男系継承を支持し、宗教が女性に何かしらの制限をかけることについても消極的容認の立場を採る傾向が析出される。宗教とジェンダーに関わる設問について、キリスト系大学と高校では異なる回答傾向がみられるのである。

宗教系大学の別では、いわゆる校風が影響を与えた可能性について言及した。大学の校風や雰囲気は、受験生の進路選択の際に検討事項として重視される。そのため近い価値観をもつもの同士がキャンパスに集い、それが回答傾向に影響をあたえているのではないだろうかという仮説である。確かに大学別では「愛国心」や「伝統的宗教施設」の語が含まれる設問の検定結果からこの説を補強しうる傾向が析出される。しかし高校別検定では、これらの設問に有意差は確認できない。ジェンダーに関わる設問にのみ、有意差がみられるのである。

この違いを考えていくために、まずは大学と高校で行われている宗教教育の特色を確認していきたい。

宗教系学校を宗教別、また中高と大学の別ごとに特色を論じた橘木俊詔は、宗教系学校で行われる教育を、次の3つに大別している。第一に、宗教教育を行うことを主目的とし、宗派教育を熱心に行う学校である。その例は天理教と創価学会の設立した学校であり、他の宗教系学校では一部にそのような教育を行う学校もあるが、数は少ないとされる。第二に、その宗教に固有な日における儀式を行い、週に一度ほど宗教の授業を必修として行う学校である。宗教の授業では、宗教的情操教育だけでなく宗派教育も行われることが多い。中学校や高校といった中等教育機関に多いとされる。第三に、宗教固有な礼拝・説教は行われるが、宗教の科目は必修とせず選択、あるいは必修であっても宗派教育ではない教養的な科目に限定させる学校である。ここには中学・高校も一部に含まれるが、高等教育機関である大学に多いという。中学・高校では宗派教育だけでなく情操に踏み込む宗教教育が重視されているのに対し、大学では宗教系学部の学生を除き宗教教育が実施される程度は低い。大学によっては、宗教系科目は選択科目とするケース、必修科目であっても2単位のみ取れば卒業要件を満たすケースもある [橘木 2013: 202-210]。

やや古いデータだが、1990年代に國學院大學日本文化研究所の宗教教育プロジェクトの調査報告もある。網羅的に行われたこの調査でも、宗教系高校では一般的に週に一度ほど「宗教」の時間が設けられることが報告されている [國學院大學日本文化研究所編 1993, 1997]。しかし大学では、宗教立の大学であったとしても、それがほとんど意識されていないことは一部を除いて少なくないと報告される [井上 1993]。

中等教育機関である中学・高校と、高等教育機関である大学では、行われる宗教教育は異なる傾向にある。特に社会科学系の学部・学科で行われている大学教育では、自明とされているものの歴史性を自覚し、異なる価値観をもった他者といかに共生していくのが問いかけられる。受身の姿勢ではなく、主体的な学びと批判的精神が求められる。宗教に基づく人格形成が志向される中学・高校での教育とは異なり、宗教を学びながらもそれを相対化する視点が大学では求められるともいえる。

また、初等教育と並び中等教育は、主要な社会化プロセスのアーリーナであることにも着目したい。ここで行われるのは、正規のカリキュラムとして学ぶ知識だけではない。学校文化や学校における慣習により、子どもたちに伝達されていく価値や規範が学校には存在する。それが「隠れたカリキュラム」である。ここからは、宗教系高校出身者の宗教意識を考えるにあたり、隠れたカリキュラムの影響可能性について考えていきたい。

3-2 ジェンダー秩序と「隠れたカリキュラム」

隠れたカリキュラムとは教育社会学分野でジェンダーが議論される際の鍵概念である。ここでは「正規の教育課程以外に、学校における慣行や教職員の言動から生徒が学び取る社会の価値観や規範を伝達する場面」を隠れたカリキュラムとする石井クツ昌子の定義を参照しておこう [石井 2021: 55]。教科書に描かれる挿絵、男子生徒に重い用具を持つよう促すこと、女子生徒に文化祭の飾り付けをまかせること、進路選択におけるジェンダートラッキング、また男性教職員が管理職ポジションの多数を占める環境に接することなどがその一例である。またこれに類する重要概念としてジェンダー社会化もある。これも石井の定義では「子どもがジェンダーに関するルール、規範、期待などを学び理解していくプロセス」とされるが、このプロセスに影響を与えるエージェントとして親、メディア、言語、そして教師や学校があげられる [ibid.: 58]。

ジェンダーと教育研究では、学校教育と学校文化に潜むジェンダーの生成過程を解明しようとする研究が蓄積されており、隠れたカリキュラム論も多くの実証研究に適用されてきた。学生の宗教意識にみられるジェンダー観を考えるにあたり、隠れたカリキュラムを理解の補助線に引くことができないだろうか⁶。

天童睦子が整理した隠れたカリキュラム概念の展開過程によると、hidden curriculum の語は P.W.ジャクソンの *Life in Classroom* (1968) のなかで初めて用いられた。教育制度が内包する「政治的隠べい」を体系的に論じたのは E.ヴァランスである [Valance 1973, 1974]。そして J.バラントインが学校生活のなかの暗黙のルール・ルーティーン・レギュレーションの頭文字をとり「もう一つの 3Rs」 [Ballantine. et. al 訳書 2011: 362] と呼び、表立って伝達されるカリキュラム (manifest curriculum) だけではなく、学校生活のなかで生徒が従うべき暗黙の規則として「隠れたカリキュラム (hidden curriculum)」の議論が深められていった [天童 2021: 17]。

さて、「隠れた」とは具体的にどのようなものだろうか。高旗浩志によると、「(1) 学校生活のあらゆる場面にわたって一貫して存在し、普及・浸透していること、(2) とりわけ生徒に意識されない形で影響を及ぼすこと、(3) 学校や教師の振る舞いがもたらす『二次的効果』であること」の 3 点が重要な要素であり、潜在的カリキュラムの価値内容は「言明されない規範・価値・信念」と捉えられるとする [高旗 1996: 57-58]。

ジェンダー研究の視点から隠れたカリキュラム概念を再検討する氏家陽子が指摘するように、隠れたカリキュラムを通じてジェンダー・メッセージは伝達されていく [氏家 2009: 23]。また天童睦子は、ジェンダーによる統制はメリトクラシーを前提とする学校教育では見えにくいものの、男女で異なる役割期待、身体的な規制と許容、進路選択におけるジェンダートラッキングなど「自発的」従属などのかたちで具現化されることに特徴があるとする [天童 2021: 18]。

宗教系学校で行われる宗教教育には、正規のカリキュラムとして宗教の時間に行われる知識の伝達の他に、隠れたカリキュラムを通じて宗教が求めるジェンダー・メッセージの伝達が行われているのではないだろうか。それが女系天皇への意見 (VI-2-2)、役職・地位からの女性の排除 (VIII-1)、女人禁制 (VIII-2) に現れたキリスト教系高校出身者の回答傾向に影響を及ぼしているのではないだろうか。これが本稿の仮説である。

1970 年代以降の教育社会学の蓄積を通じて、カリキュラム概念は学校で「教えられている内容」から、子どもたちが実際に「学んでいる内容」、学習経験の総体を意味するものとなった [村松 2003: 36]。この点を踏まえた上で、宗教系高校で行われているものを確認しよう。先述の通り、宗教系高校の多くでは、週に 1 時間ほどの宗教の時間が設けられている。キリスト教系であれば聖書やイエスの生涯について、仏教系であれば仏陀や宗祖、仏典について学ぶ機会を得る。そして授業時間以外でも、キリスト教系であればクリスマスや復活祭、仏教系であれば成道会や灌仏会といった行事が行われる。シスターや僧侶を校内で見掛けることも少なくないだろう。キ

⁶ なお「潜在的カリキュラム (latent curriculum)」概念と「隠れたカリキュラム (hidden curriculum)」概念は同義である [氏家 2009: 25]。そのため本稿でも氏家に倣い、「潜在的カリキュラム」の語を用いる研究も「隠れたカリキュラム」の用語に含めて記述していく。

リスト教徒人口が1%の日本社会において、シスターに接する経験はキリスト教系学校特有のものだろう。こうした校内で接する宗教者の姿自体がジェンダー・メッセージになっているのではないだろうか。すなわち、性差に基づく宗教的役割が「ある」ことを身近に感じ、そのような振る舞いに接する高校時代の経験が、男女の役割の分離、特定の役割に女性は就くことができないということを「仕方がない」とする傾向に影響を及ぼしているのではないだろうか。男性が主に担っていたあらゆる職域に女性が進出している現代日本社会において、性差に基づく職種・役割の違いが正当化される場面は限られる。性差による職業制限は、日本では男性が助産師になることのみである。また、聖典や経典で示されるジェンダーの階層性は、平等原理を基にしてなされる一般的な教育カリキュラムとは異なる世界観を生徒たちに提示する。宗教系学校でなされる宗教教育とは、宗教に関する知識の伝達だけでなく、その宗教が内包する、そして宗教者たちが実践するジェンダー・メッセージも含まれるのではないだろうか。

なお、井上順孝が1992年に行った調査では、宗教系の中学・高校に通った者たちの分析がなされている。このうち「学校でみかけた宗教に関するもののうち最も印象に残ったものを一つあげて下さい」では、礼拝堂／仏間／神社といった宗教的建造物を答えた者が43.1%と最も多く、シスター／牧師・神父／僧侶／神主といった人物については9.6%と少ない[井上 1993: 5]。しかし、この設問が単一回答形式であることには注意したい。また、「次のような内容の授業は、中学校や高校の授業の一環として、あってもいいと思いますか。それとも必要ないと思いますか」のうち「牧師、神父、僧侶、神主などをゲストに呼び、話を聞く」は「あってもいい」36.2%、「必要ない」57.8%であり、宗教の基礎的知識や社会福祉等の話に比べて肯定的回答は低い[ibid.: 6]。とはいえ、これは顕在的カリキュラムに対する生徒のニーズを尋ねる設問であり、本稿が問題とする隠れたカリキュラムとは異なる。高校までに行われていた授業の影響が想定される「IV-2. 宗教と教育に関する考え」の高校別検定では、それぞれに有意差が確認できなかったとは先にも述べた。いずれも正規のカリキュラムに組み込むかどうかについての意見を求める設問である。

しかし、この仮説を検証していくには困難が伴う。本調査は宗教系学校における隠れたカリキュラムの影響の有無を想定していない。仏教系学校は大学も高校も非宗教系学校に近い傾向を示す理由も精査して考えていかななくてはならない。また、宗教系高校にみられたジェンダー意識の差異には、いくつかの擬似相関がありえることは想像に難くない。

そのため本稿では、キリスト教系大学とキリスト教系高校で確認できたジェンダーに関する設問の回答傾向の違いを指摘し、この背景に大学と高校までの宗教教育との性質の違い、宗教教育における隠れたカリキュラムの影響が見込まれることを言及するに留めておく。しかし、これまでの宗教教育に関する議論では、隠れたカリキュラムが想定されていなかったことは指摘しておきたい。特に若い世代の人格形成に宗教教育が与える影響の大きさをふまれば、「宗教の授業」として学ぶ知識だけでなく、学内の環境や文化、慣行、教職員が体現する規範の影響は無視できないものだろう。

おわりに——隠れたカリキュラムを析出していくために

計量的調査である本調査において、学生の宗教意識のうち特にジェンダーに関わる設問に着目すべき有意差が現れた。この意味を考えるにあたり、本稿では隠れたカリキュラムに関する教育社会学分野の研究蓄積を紹介しながら予備的考察を行ってきた。

ジェンダー視点に立つ教育社会学的研究は、一見公平に見える平等主義的能力主義と、抑圧的・権威主義的指導を通じて、社会が求める価値規範を教え込むという隠れたカリキュラムの二面性が学校教育のなかに共存していることを指摘する。隠れたカリキュラムは、単に正規のカリキュラムのインフォーマルな部分を示すものでは

ないことに天童睦子は注意を促す。第一に、それはイデオロギー注入の側面をもつ。第二に、教職員は何気ない仕草、まなざし、顔色といったノンバーバルな意思表示を通じて潜在的メッセージを伝える。これが言明されない価値規範の伝達の側面である。そして第三に、隠れたカリキュラムは教師と生徒、あるいは生徒間の相互作用のなかで構築される側面がある [天童 2012: 18]。宗教系学校に引き付けて考えるならば、第一の点は宗教的世界観の注入、第二は教職員としての宗教者が潜在的に伝えるメッセージ、第三は生徒・学生の相互作用を通じて補強されていく校風も含まれるだろうか。宗教系大学の別では、回答傾向の違いに「校風」の影響があるのではないかと記した。進学先検討時の重視項目は「校風や雰囲気がいいこと」が重視されていること、入学前に不安に思うこととして3分の1が「校風や雰囲気に馴染めるか」をあげていることは、大学生が強く「校風」を意識していることの現れだろう。そしてこの「校風」も、学校文化という隠れたカリキュラムの一端である。「校風に馴染む」とは、まさに社会化なのだから。

隠れたカリキュラムに関する実証研究をいくつかあげたい。今日の教科書ではジェンダーの視点からの改善がみられるが、昭和60年代の小学校理科の教科書では、実験で主要な役割を果たし、時には危険を冒すような行動をとるのは男子児童に限られ、積極的で時には危険を冒す男子、女子はそのような行為はしないというメッセージが暗黙に伝えられていたことを指摘した植原と稲田の研究がある [植原・稲田 2016]。理科教育における隠れたカリキュラムが「女子の理科離れ」を永続させることに警鐘を鳴らす研究 [稲田 2021]、フォーマルには男女は対等とともに活動するとされる中学校の部活動で、インフォーマルな空間的性別分離の規則や男性優位を脅かさない暗黙のルールが形成され、それを生徒たちが自然に受け入れていく様子を描いたもの [羽田野 2004]、ジェンダー・コードの共有や、それに基づく仲間集団の文化と秩序の形成・維持を明らかにする研究 [上床 2011]、公立小学校への調査から、個人の裁量、学級の閉鎖性、集団の調和を大切にす教師文化の影響が、理念としての男女平等教育の推進を阻んでいることを見出した研究 [木村 2009] もある。宗教とジェンダー研究でも、隠れたカリキュラムに言及する論考はいくつかある。例えばキリスト教とイスラム教の聖典が女性の社会的機能をどのように提示し、それが社会的な隠れたカリキュラムとして影響を及ぼしていく様子に焦点をあてる研究がある [Llorent-Bedmar & Llorent 2014]。

ジェンダーとは、指示され、表現され、体現される社会的カテゴリーである。ジェンダーは実際に行われるものである。ジェンダーの社会学では性役割パラダイムの限界が指摘され [Connell 1987, 訳書 1993]、ジェンダーを「行動」として捉える Doing Gender という視点に立つ研究の方向性が主流になりつつある [West & Zimmerman 1987; 平山 2017]。個人が社会化の過程で学習する男女の態度や、役割として遂行される日々の行動のなかからジェンダーはつくられていくというこのコンセプトから宗教とジェンダーについて考える時、宗教的権威がジェンダー間の階層差を固定化するというフレームのみでは不十分であることが改めて明らかになる。テキストに書かれる性役割、集会で説かれる言説、特定の地位や役割にみられる排除の構造を、宗教者がどのように Doing Gender しているのか、それを宗教者周辺にいる人たちとの相互作用も含めて明らかにすることが宗教とジェンダー研究にも求められよう。そのときに「隠れたカリキュラム」という視点は有用であろうと筆者は考える。

引用文献

- 荒牧央 2020 「新時代の皇室観 — 『皇室に関する意識調査』から」NHK 報道文化研究所『放送研究と調査 2020 年3月号』:22-29.
- 石井クンツ昌子 2021 「家族とジェンダー —これまでとこれからの10年」『家族関係学』40: 53-63.
- 井上順孝 1993 『「宗教教育に関するアンケート」報告書』國學院大學日本文化研究所.
- 稲田結美 2021 「学校理科教育におけるジェンダーの問題と課題」『学術の動向』26(7): 30-35.
- 植原美友季・稲田結美 2016 「ジェンダーの視点による小学校理科教科書における写真と挿絵の時代的变化」『日本理科教育学会第55回関東支部大会研究発表要旨集』120.
- 氏家陽子 2009 「隠れたカリキュラム概念の再考 —ジェンダー研究の視点から」『カリキュラム研究』18: 17-30.
- 上床弥生 2011 「中学校における生徒文化とジェンダー秩序 —『ジェンダー・コード』に着目して」『教育社会学研究』89: 27-48.
- 木村育恵 2009 「男女平等教育実践をめぐる教師文化の構造」『教育社会学研究』84: 227-246.
- 國學院大學日本文化研究所編 1993 『宗教教育資料集』すずき出版.
——— 1997 『宗教と教育 —日本の宗教教育の歴史と現状』弘文堂.
- Connell, R. W. 1987, *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics*, Polity Press. (=1993, 森重雄・菊地栄治・加藤隆雄・越智康詞訳『ジェンダーと権力 —セクシュアリティの社会学』三交社).
- 高旗浩志 1996 「「潜在的カリキュラム」概念の再検討 —D.ゴードンの議論を中心に」『カリキュラム研究』5: 53-64.
- 橋木俊詔 2013 『宗教と学校』河出ブックス.
- 天童睦子 2021 「知識伝達とジェンダー —隠れたカリキュラムの視点」『学術の動向』26(7): 17-21.
- Ballantine, J. H. and F. M. Hammack, 2009, *The Sociology of Education: A Systematic Analysis*, 6th edition, Upper Saddle River, NJ: Pearson/Prentice Hall. (=2011, 牧野暢男・天童睦子監訳『教育社会学 —現代教育のシステム分析』東洋館出版社).
- 羽田野慶子 2004 「〈身体的な男性優位〉神話はなぜ維持されるのか —スポーツ実践とジェンダーの再生産」『教育社会学研究』75: 105-125.
- 平山亮 2017 『介護する息子たち —男性性の視角とケアのジェンダー分析』勁草書房.
- リクルート総研 2019 「進学センサス2019 —高校生の進路選択に関する調査」.
- Jackson, P. W., 1968, *Life in Classrooms*, Rinehart and Winston.
- Llorent-Bedmar, V. & V. Llorent, 2014, "Religion and Social Hidden Curriculum—The Educative Influences of Christianity and Islam in Women," *International Education Studies*, 7(4): 126-132.
- Vallance, E. 1973/74, "Hiding the Hidden Curriculum: An Interpretation of the Language of Justification in Nineteenth Century Educational Reform," *Curriculum Theory Network*, 4(1): 5-21.
- West, C., & D. H. Zimmerman, 1987. "Doing gender," *Gender and Society*, 1: 125-151.

2020年度調査票

2020年度学生宗教意識調査

本調査は、現代日本の若者の宗教文化への意識や態度を学術的に調査、分析するために行われるものです。多くの大学で同時期に実施されます。統計処理のみを行い、個人のプライバシーを侵害するようなことは一切いたしません。また、集計結果は公表いたしません。

答えたくない質問があったら、選択せずに次の質問に進んでもらって結構です。

本調査は、下記の団体による共同のものです。

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

「宗教と社会」学会・宗教文化の授業研究プロジェクト

宗教文化教育推進センター

科研費「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」（基盤研究（B）研究代表・平藤喜久子）

科研費「高齢多死社会本におけるウェルビーイングとウェルダイングの臨床社会学的研究」（基盤研究（B）研究代表・櫻井義秀）

*本調査は、國學院大學ヒト研究等及びヒト由来試料研究等に関する倫理委員会による承認を得たものです（承認番号R02第1号）

本調査についてのお問い合わせは下記のメールアドレスにお願いいたします：

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所「2020年度学生宗教意識調査」担当

csatrs2020@gmail.com

凡例

1. [] は Google Forms の「記述式テキスト（短文回答）」を示す。
2. ○は Google Forms の「ラジオボタン（単一選択）」を示す。
3. □は Google Forms の「チェックボックス（複数回答可）」を示す。

担当教員名 []

あなたの生年(西暦を半角入力) []

あなたの性別 ○男 ○女 ○その他

あなたが卒業した高校は次のどれですか。

- | | |
|---------------------------------|--|
| <input type="radio"/> 公立高校 | <input type="radio"/> その他の宗教系の高校 |
| <input type="radio"/> 一般の私立高校 | <input type="radio"/> 大検 |
| <input type="radio"/> キリスト教系の高校 | <input type="radio"/> 外国の高校 |
| <input type="radio"/> 仏教系の高校 | <input type="radio"/> その他 [] |
| <input type="radio"/> 神道系の高校 | |

「外国の高校」を卒業した方にお聞きます。卒業した高校の国名を記入して下さい。 []

調査票

大学、短大、専門学校について

あなたが現在通っている大学、短大、専門学校等の名称を記入してください。 []

あなたが現在通っている学部・学科(コース)等の名称を記入してください。 []

あなたの学年について、次のうちから選んでください。[*この項目は以下の1~6をブルダウんで選択]

- | | |
|-------|---------|
| 1. 1年 | 4. 4年 |
| 2. 2年 | 5. 大学院生 |
| 3. 3年 | 6. その他 |

現在のあなたの生活形態について、次のうちから選んでください。

- | | |
|-----------------------------|---------------------------|
| <input type="radio"/> 親と同居 | <input type="radio"/> 寮 |
| <input type="radio"/> 一人暮らし | <input type="radio"/> その他 |

「家の宗教」について

あなたの「家の宗教」がありましたら、次のうちから選んで下さい。2つ以上ある場合は、すべて選んで下さい。

- | | | |
|-------------------------------|--|----------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 神道 | <input type="checkbox"/> 仏教とだけしか分からない | <input type="checkbox"/> 幸福の科学 |
| <input type="checkbox"/> 浄土真宗 | <input type="checkbox"/> プロテスタント | <input type="checkbox"/> 崇教真光 |
| <input type="checkbox"/> 浄土宗 | <input type="checkbox"/> カトリック | <input type="checkbox"/> 真如苑 |
| <input type="checkbox"/> 曹洞宗 | <input type="checkbox"/> その他のキリスト教 | <input type="checkbox"/> 立正佼成会 |
| <input type="checkbox"/> 日蓮宗 | <input type="checkbox"/> キリスト教とだけしか分からない | <input type="checkbox"/> 天理教 |
| <input type="checkbox"/> 真言宗 | <input type="checkbox"/> 創価学会 | <input type="checkbox"/> 霊友会 |
| <input type="checkbox"/> 臨済宗 | <input type="checkbox"/> エホバの証人 | <input type="checkbox"/> その他 [] |

あなたは宗教にどの程度関心がありますか。次のうちから選び、さらにそれぞれの質問に答えて下さい。

- 現在、信仰をもっている
- 信仰はもっていないが、宗教に関心がある
- 信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない
- 信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない
- 回答なし

「現在、信仰をもっている」とお答えした方にお聞きます。あなたが信仰している宗教を選んで下さい。

- | | | |
|----------------------------|---------------------------------------|-------------------------------|
| <input type="radio"/> 神道 | <input type="radio"/> 仏教とだけしか分からない | <input type="radio"/> 幸福の科学 |
| <input type="radio"/> 浄土真宗 | <input type="radio"/> プロテスタント | <input type="radio"/> 崇教真光 |
| <input type="radio"/> 浄土宗 | <input type="radio"/> カトリック | <input type="radio"/> 真如苑 |
| <input type="radio"/> 曹洞宗 | <input type="radio"/> その他のキリスト教 | <input type="radio"/> 立正佼成会 |
| <input type="radio"/> 日蓮宗 | <input type="radio"/> キリスト教とだけしか分からない | <input type="radio"/> 天理教 |
| <input type="radio"/> 真言宗 | <input type="radio"/> 創価学会 | <input type="radio"/> 霊友会 |
| <input type="radio"/> 臨済宗 | <input type="radio"/> エホバの証人 | <input type="radio"/> その他 [] |

調査票

「信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない」もしくは「信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない」とお答えした方にお聞きます。

あなたが宗教に関心がありません、あるいはまったくない理由を次の中から選んで下さい。【複数回答可】

- 宗教に関する嫌な体験があるから
- 宗教に関する悪い報道やニュースを見たから
- なんとなく嫌いだから
- 身近に接したことがないから
- 宗教の必要性を感じていないから

お父さんの信仰について

あなたのお父さんは個人で信仰をもっていますか。

- はい
- いいえ
- 回答なし

「お父さんは信仰をもっている」とお答えした方にお聞きます。

お父さんの信仰している宗教を選んで下さい。

- | | | |
|----------------------------|---------------------------------------|--|
| <input type="radio"/> 神道 | <input type="radio"/> 仏教とだけしか分からない | <input type="radio"/> 幸福の科学 |
| <input type="radio"/> 浄土真宗 | <input type="radio"/> プロテスタント | <input type="radio"/> 崇教真光 |
| <input type="radio"/> 浄土宗 | <input type="radio"/> カトリック | <input type="radio"/> 真如苑 |
| <input type="radio"/> 曹洞宗 | <input type="radio"/> その他のキリスト教 | <input type="radio"/> 立正佼成会 |
| <input type="radio"/> 日蓮宗 | <input type="radio"/> キリスト教とだけしか分からない | <input type="radio"/> 天理教 |
| <input type="radio"/> 真言宗 | <input type="radio"/> 創価学会 | <input type="radio"/> 霊友会 |
| <input type="radio"/> 臨済宗 | <input type="radio"/> エホバの証人 | <input type="radio"/> その他 [] |

お母さんの信仰について

あなたのお母さんは個人で信仰をもっていますか。

- はい
- いいえ
- 回答なし

「お母さんは信仰をもっている」とお答えした方にお聞きます。

お母さんの信仰している宗教を選んで下さい。

- | | | |
|----------------------------|---------------------------------------|--|
| <input type="radio"/> 神道 | <input type="radio"/> 仏教とだけしか分からない | <input type="radio"/> 幸福の科学 |
| <input type="radio"/> 浄土真宗 | <input type="radio"/> プロテスタント | <input type="radio"/> 崇教真光 |
| <input type="radio"/> 浄土宗 | <input type="radio"/> カトリック | <input type="radio"/> 真如苑 |
| <input type="radio"/> 曹洞宗 | <input type="radio"/> その他のキリスト教 | <input type="radio"/> 立正佼成会 |
| <input type="radio"/> 日蓮宗 | <input type="radio"/> キリスト教とだけしか分からない | <input type="radio"/> 天理教 |
| <input type="radio"/> 真言宗 | <input type="radio"/> 創価学会 | <input type="radio"/> 霊友会 |
| <input type="radio"/> 臨済宗 | <input type="radio"/> エホバの証人 | <input type="radio"/> その他 [] |

宗教習俗について

あなたの家族は今年の初詣はどうしましたか。次のうちから選んで下さい。

- 家族で行った
- 家族とは別に自分だけで行った
- 行った家族もいるが自分では行かなかった
- 家族の誰も行かなかった
- その他

調査票

あなたの家族は去年のお盆の墓参りはどうしましたか。次のうちから選んで下さい。

- 家族で行った
- 家族とは別に自分だけで行った
- 行った家族もいるが自分は行かなかった
- 家族の誰も行かなかった
- その他

次のうち、あなたの家(一人暮らしの場合などは実家)にあるものすべてを選んで下さい。

- 神棚
- 亡くなった近親者の写真を飾ったもの
- 仏壇
- その他宗教的なもの

次のうち、あなたが個人で持っているものすべてを選んで下さい。

- お守り
- 十字架
- 御朱印帳
- パワーストーン
- 数珠

次のような意見について、あなたの考えに近いものを選んで下さい。

「どんなに科学が発展しても、宗教は人間に必要な。」

- そう思う
- どちらかといえばそう思う
- どちらかといえばそう思う
- そう思わない

「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある。」

- そう思う
- どちらかといえばそう思わない
- どちらかといえばそう思う
- そう思わない

「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ。」

- そう思う
- どちらかといえばそう思わない
- どちらかといえばそう思う
- そう思わない

「特定の宗教団体が特定の政党を支持するのはよくない。」

- そう思う
- どちらかといえばそう思わない
- どちらかといえばそう思う
- そう思わない

「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ。」

- そう思う
- どちらかといえばそう思わない
- どちらかといえばそう思う
- そう思わない

「宗教を信じると、心のよりどころができる。」

- そう思う
- どちらかといえばそう思わない
- どちらかといえばそう思う
- そう思わない

「災害が起こった際に宗教は人々を支えることができる。」

- そう思う
- どちらかといえばそう思わない
- どちらかといえばそう思う
- そう思わない

調査票

「パワースポットを訪れると、パワーをもらうことができる。」

- そう思う どちらかといえばそう思わない
 どちらかといえばそう思う そう思わない

宗教と教育に関する次の意見について、あなたの考えに近いものを選んで下さい。

「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい。」

- そう思う どちらかといえばそう思わない
 どちらかといえばそう思う そう思わない

「高校までの教育で、愛国心を深めるための工夫をした方がいい。」

- そう思う どちらかといえばそう思わない
 どちらかといえばそう思う そう思わない

「道徳の授業をもっと充実させた方がいい。」

- そう思う どちらかといえばそう思わない
 どちらかといえばそう思う そう思わない

「いのちの大切さを教える授業を充実させた方がいい。」

- そう思う どちらかといえばそう思わない
 どちらかといえばそう思う そう思わない

「神社や寺院など、日本の伝統的宗教施設を見学する機会を設けた方がいい。」

- そう思う どちらかといえばそう思わない
 どちらかといえばそう思う そう思わない

「学校では受験や就職に必要な知識や技能を教えるだけでいい。」

- そう思う どちらかといえばそう思わない
 どちらかといえばそう思う そう思わない

イスラム教に関する次の質問に答えて下さい。

最近のあなたのイスラム教への関心は次のうちどれですか。

- 大変高い あまり高くない
 やや高い ほとんどない

あなたのイスラム教徒（ムスリム）との関わりで、次のうちあてはまるものがあったら選んで下さい。【複数回答可】

- 自分はイスラム教徒である
 日本にイスラム教徒の友人がいる
 外国にイスラム教徒の友人がいる
 近所にイスラム教徒が住んでいる
 近所にイスラム寺院（モスク）がある
 あてはまるものはない

調査票

モスク（イスラム寺院）が近所にできることになったとするとあなたは不安を感じますか。

- 不安は感じない
- 少し不安を感じる
- かなり不安を感じる

ウェルビーイング（主観的幸福感）に関わる次の質問に答えて下さい。

あなたは現在の生活にどの程度満足していますか。「とても満足」を10点、「とても不満」を1点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字にチェックをつけて下さい。

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10

あなたの状況にどの程度あてはまるかを答えてください。あなたは、社会から取り残されているという不安がありますか。次のうちから選んで下さい。

- よくあてはまる
- あてはまらない
- あてはまる
- まったくあてはまらない
- どちらでもない

あなたは、他人と接するときには、相手の人を信頼してよいと思いますか。それとも、用心したほうがよいと思いますか。あなたの考えに一番近いものを次のうちから選んで下さい。

- いつでも信頼してよい
- たいていは用心した方がよい
- たいていは信頼してよい
- いつでも用心した方がよい

あなたは、自分の死について考えたことがありますか。一番近いものを次のうちから選んでください。

- 深く考えたことがある
- ほとんど考えたことがない
- ある程度考えたことがある
- まったく考えたことがない

宗教および宗教家に関する次の質問に答えて下さい。

神の存在について、あなたはどのように考えますか。

- 信じる
- あまり信じない
- ありうると思う
- 否定する

仏の存在について、あなたはどのように考えますか。

- 信じる
- あまり信じない
- ありうると思う
- 否定する

霊魂の存在について、あなたはどのように考えますか。

- 信じる
- あまり信じない
- ありうると思う
- 否定する

超自然的な力の存在について、あなたはどのように考えますか。

- 信じる
- あまり信じない
- ありうると思う
- 否定する

調査票

人生に悩んだ時に、次のような人に相談したいと思いますか。相談したいような人にチェックを付けて下さい。【複数回答可】

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 仏教の僧侶 | <input type="checkbox"/> 街の占い師 |
| <input type="checkbox"/> キリスト教の牧師・神父・シスター | <input type="checkbox"/> ネット上で相談に回答してくれる人 |
| <input type="checkbox"/> 神社の神主 | <input type="checkbox"/> その他の宗教家（新宗教の教師など） |
| <input type="checkbox"/> メディアに登場するような霊能者 | <input type="checkbox"/> この中に相談したい人はいない |

「スピリチュアルな」という表現であなたが感じるのは次のどれですか。【複数回答可】

- 精神的に深みのあることを感じる。
- 宗教的というのに比べると、近づきやすく感じる。
- あやしさを感じる。
- なんのことだか、よく分からない。
- その他

オウム真理教について

オウム真理教に関連する次の事柄のうち、あなたが知っているものを選んで下さい。【複数回答可】

- 教祖は麻原彰晃（本名松本智津夫）である。
- 教祖は修行によって空中浮揚など超能力が得られると主張した。
- 信者たちが修行していた建物は、サティアンと呼ばれていた。
- （1995年3月に）東京で地下鉄サリン事件を起こした。
- 地下鉄サリン事件では10名以上の死者を含む数千人の被害者が出た。
- サリン事件に関わった教祖と幹部の死刑が執行された。
- オウム真理教の元信者の一部は、現在アレフという団体に所属している。
- 麻原彰晃の弟子であった上祐史浩は「ひかりの輪」という団体を作った。
- 布教のために作成されたアニメが現在もネット上に存在する。
- 知っていることはない。

宗教とジェンダーに関する次の質問に答えて下さい。

宗教によっては女性が教団の特定の役職や地位につけないことがあります。これは差別だと思いますか。

- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------|
| <input type="radio"/> 差別だと思うが仕方がない | <input type="radio"/> 差別だと思わない |
| <input type="radio"/> 差別だと思うので見直すべき | <input type="radio"/> 分からない |

宗教によっては、山など一部の神聖な場所には、女性が入ってはいけないとするところがありますが、これは差別だと思いますか。

- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------|
| <input type="radio"/> 差別だと思うが仕方がない | <input type="radio"/> 差別だと思わない |
| <input type="radio"/> 差別だと思うので見直すべき | <input type="radio"/> 分からない |

宗教によっては、同性愛を禁じているところがあります。これについてあなたはどのように思いますか。

- 宗教もそういうことに関与していい
- 宗教はそういうことに関与すべきではない
- 分からない

調査票

宗教によっては、妊娠中絶を禁じているところがあります。これについてあなたはどのように思いますか。

- 宗教もそういうことに関与していい
- 宗教はそういうことに関与すべきではない
- 分からない

天皇の即位に関わる次の質問に答えて下さい。

即位に関連する諸行事に実際に出掛けましたか。

- はい
- いいえ
- 回答なし

即位に関連する諸行事をテレビやネットで見ましたか。

- はい
- いいえ
- 回答なし

大嘗祭という言葉を知っていますか。

- はい
- いいえ
- 回答なし

いまの法律では天皇は男性に限られています。このことについてどう思いますか。

- 男性に限った方がよい
- 女性もなれるようにした方がよい
- 分からない
- 関心がない
- 回答なし

天皇の位をめぐるっては、男系に限るか女系を認めるかという議論があります。このことについてどう思いますか。

- 男系に限った方がよい
- 女系も認めてよい
- 違いが分からない
- 関心がない
- 回答なし

以上

あとがき

『第13回学生宗教意識調査』の改訂・増補となる本報告書の編集と刊行は、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」（令和元年～令和3年度、責任者：平藤喜久子）によって行われた。専任教員としては星野靖二、吉永博彰が編集統括に当たり、日本文化研究所スタッフの今井信治氏・丹羽宣子氏に、再分析による改訂作業および増補版の中核となる分析論考を執筆いただいた。また、改訂した数値の確認やグラフのカラー化ほか編集作業については、同スタッフの高田彩氏、宮澤安紀氏、大場あや氏にもご協力いただいた。本報告書に関する最終的な編集責任は平藤にある。

なお、13回目となる学生宗教意識調査に当たり、実施期間となった2020年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う緊急事態宣言の発出などもあり、大きな社会不安と混乱の中で、授業の開始時期の遅れやオンライン授業の導入など、授業計画や実施形態の変更を余儀なくされた大学が多かった。そのような中で貴重な授業時間を割いて調査の実施にご協力いただいた各大学の先生方には、改めて篤く感謝申し上げたい。

調査実施者氏名（敬称略・五十音順）

※回答者から調査実施者として名前の挙げられた方々

飯嶋秀治	齊藤智朗	武井順介	星野靖二
井関大介	酒井真道	塚田穂高	水野友晴
板井正斉	櫻井義秀	土井裕人	宮本要太郎
井上順孝	清水香基	徳野崇行	村上晶
猪瀬優理	住家正芳	中西尋子	矢野秀武
今井信治	高橋沙奈美	丹羽宣子	横山聖美
黒崎浩行	高橋典史	野口生也	李賢京
小松加代子	高橋原	平藤喜久子	

調査校

(* 印は宗教系の学校)

学習院大学	上越教育大学	東北大学
関西大学	多摩大学	東洋大学
九州大学	玉川大学	藤女子大学*
皇學館大学*	中央学院大学*	文京学院大学
國學院大學*	筑波大学	北海道大学
駒澤大学*	天使大学*	立教大学*
札幌大谷大学*	東海大学	立正大学*
札幌保健医療大学	東京大学	立命館大学
順天堂大学	東京福祉大学	龍谷大学*

第 13 回学生宗教意識調査（2020 年度）改訂増補版

2022 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

発行人 平藤喜久子

連絡先 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

電話 03-5466-0104（研究開発推進機構事務課）

FAX 03-5466-9237

